

史料と人物 VI（中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館資料叢書 XVIII）

ミヒエル, ヴォルフガング
九州大学 : 名誉教授

吉田, 洋一
久留米大学文学部 : 教授

大島, 明秀
熊本県立大学文学部 : 准教授

<https://hdl.handle.net/2324/2231643>

出版情報 : 2019-03-30
バージョン :
権利関係 :



史料と人物Ⅱ

中津市歴史民俗資料館

分館 医家史料館 叢書Ⅱ

火界咒
次ニ
外總
皆
兵
陳
闘
外獅子者
内獅子
在
日輪

ミヒエル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀 共編

中津市教育委員会、平成三二年三月



中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書 XVIII

史料と人物

VI

ミヒエル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀 共編

中津市教育委員会、平成三一年三月

編者前書き

昨年度の叢書では、大江春塘編の『バスタード辞典』の原典対訳版を出しましたが、本年度は従来追究してきた村上家や大江家に加え、辛島家と神尾家の資料にも注目しました。

大島は、村上医家史料館より、中津藩に係る儒者三人の墓銘が写された資料を取り上げ、実物の墓碑を発掘して銘を校合しながらその内容と背景を追究しました。

吉田は、中津市歴史民俗資料館より、古医道の秘伝と思われる二点の卷子について、その翻刻と内容に関する検証を行いました。

ミヒエルは、辛島医家旧蔵の写本「種痘新説」とそのヨーロッパに遡る背景について、諸本と比較しながら検討しました。

曾我と三谷は、幕末に中津城下で活動した神尾医家に関する二点の書簡を紹介しました。

工藤と當所は、村上玄水の肖像画と見られる掛幅について分析しました。

中津の歴史の奥深さや内容の豊富さを再認識していただけると幸いです。

平成三二年 春

編者一同

目次

編者前書き

凡例

【原著論文】

近世中津領内の儒者とその墓銘―藤田敬所、賀来元龍、原田東岳―

大島明秀

1

古医道秘伝巻（「医大道小巻」）に関する一考察

吉田洋一

26

中津藩辛島医家旧蔵の写本「種痘新説」とその背景について

ミヒエル・ヴォルフガンク

44

【史料紹介】

神尾格の人物交流―松山棟庵・田代基徳との関係を巡って―

曾我俊裕、三谷紘平

73

新発見の村上玄水像について

工藤舞子、當所美恵子

82

特別展実施報告「『解体新書』と前野良沢」

ABSTRACTS (英文要旨)

89

索引

96

92

【凡例】

一、底本は「(仮) 近世中津領儒者墓銘録」、「(仮) 古医道秘伝巻」二点、「種痘新説」、神尾格関連書簡二通、「永仙院様御寿像」を使用した。

一、原文の欠字・改行・平出・削除線その他体裁は総じて底本の表記を反映するように記した。

一、異体字・略字などは通用する字句に改めた。

一、見せケチや削除線は二重線で、修正前の文字が判読できないほど塗りつぶしている箇所は■、虫損・破損等で判読不能な箇所は□または「」にて示した。また修正がある場合は丸括弧で補足した。

一、「(仮) 近世中津領儒者墓銘録」は三墓銘から成り、その読み下しの冒頭には銘の対象となっている人物の名をそれぞれに付した。

一、「(仮) 近世中津領儒者墓銘録」の読み下しで、筆者による加筆は「」で示し、また、難読箇所にはルビを付した。

一、「(仮) 古医道秘伝巻」では、活字化が困難な部分に関しては、底本のまま図示した。

近世中津領内の儒者とその墓銘

― 藤田敬所、賀来元龍、原田東岳 ―

大島明秀

要旨

中津市村上医家史料館に所蔵されている無題の歴史資料の内容を検討したところ、中津藩の学問の基礎を作った藤田敬所（一六九八～一七七六）、中津豊後町で酒造業を営み、町年寄をつとめながら儒学を学んだ賀来元龍（一七一六～一八四）、豊後日出藩士で、後に中津藩にて儒学を教えた原田東岳（一七〇九～一八三）といった、中津藩に関係する儒者三人の墓銘であることが判明した。

本資料における敬所および元龍の二墓銘と東岳墓銘とは筆跡が異なり、前者の書写者は不明であるものの、後者は村上玄水の筆と見られる。

本稿によつて、藤田敬所の墓碑の破損個所が補われ、また、数々の著作を持つ原田東岳が、漢詩文で名高い服部南郭（一六八三～一七五八）に儒学を学んだことや、軍学、馬術、剣術に通じていたことが明らかになった。加えて、在野で儒学を学んだ賀来元龍については、これまで不明であった家族関係や、哲学的な著作で知られる三浦梅園（一七二三～一八九）との親交の深さを突き止めるにとどまらず、梅園が墓

碑銘として作成した漢詩を初めて提示した。

キーワード

墓銘、墓碑、村上玄水、藤田敬所、賀来元龍、原田東岳、伊藤東涯、伊藤東所、土居震発、三浦梅園、倉成龍渚、久恒元的、江村北海、服部南郭、中津藩、合元寺、広運寺

はじめに

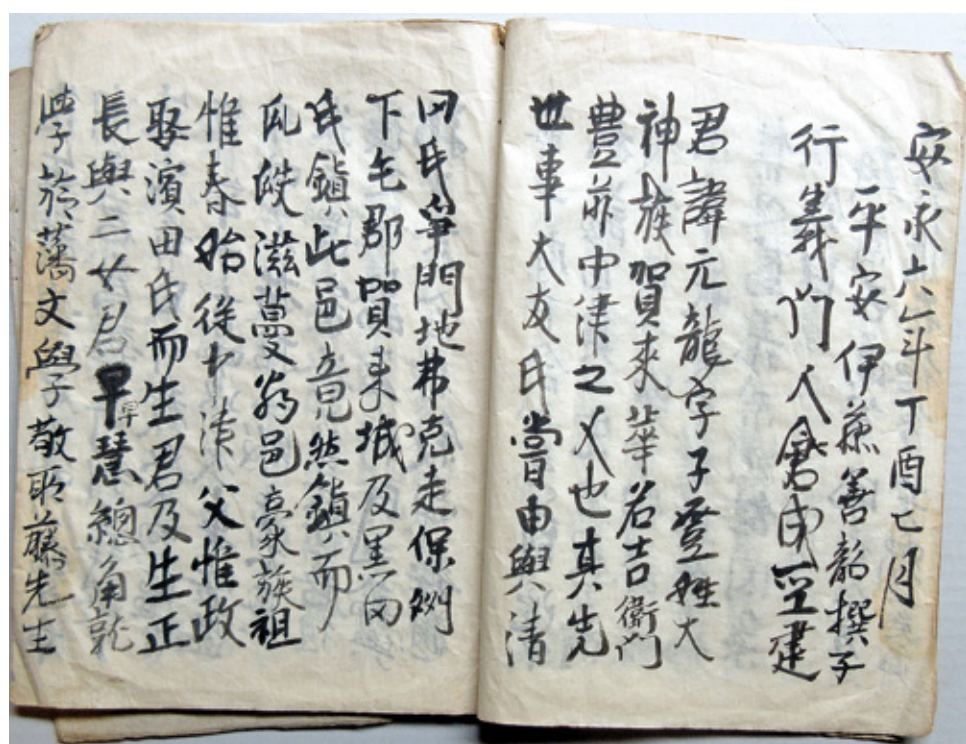
既に紹介してきたように、中津市村上医家史料館には代々で医者をつとめてきた村上家の旧蔵書が豊富に収められている。それら多岐にわたる資料群の中に、近世中津に関係する三人の人物にまつわる行状が記された、表題の付されていない未発表の写本（「村上医家史料館史料目録」七部二六）が認められる。

そこで本稿では、該書を対象としてその翻刻と読み下しを提供しつつ、内容や典拠を精査しながら資料の位置づけを行う。

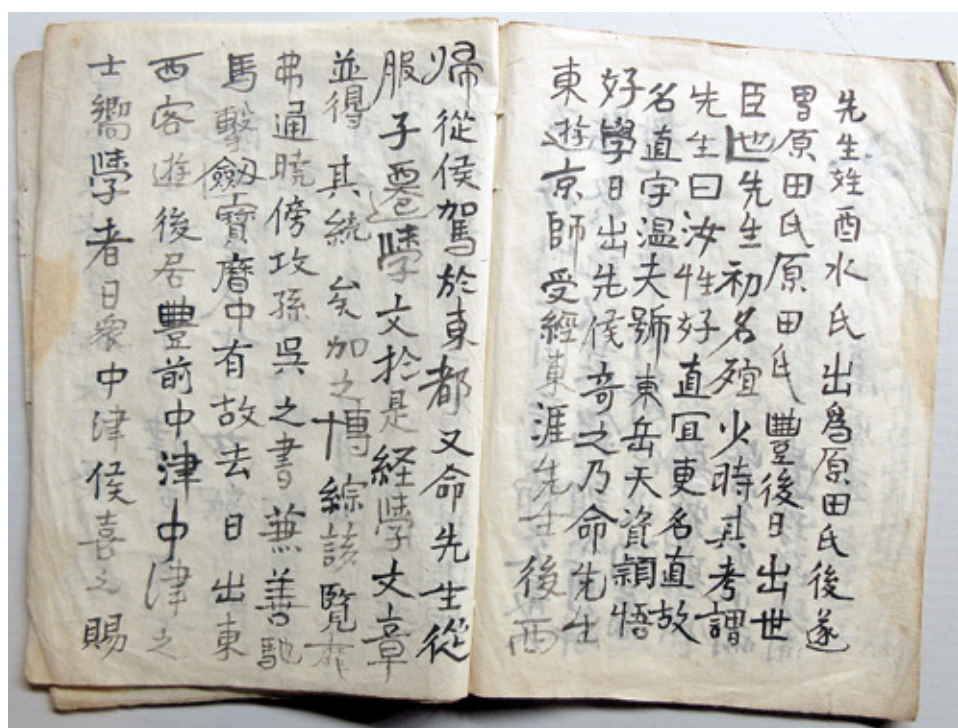
圖一 「近世中津領儒者墓銘錄」(中津市村上医家史料館藏) 中の藤田敬所墓銘。



圖二 「近世中津領儒者墓銘錄」 中の賀來元龍子登墓銘。



図三 「近世中津領儒者墓銘録」中の原田東岳墓銘。



一、書誌情報

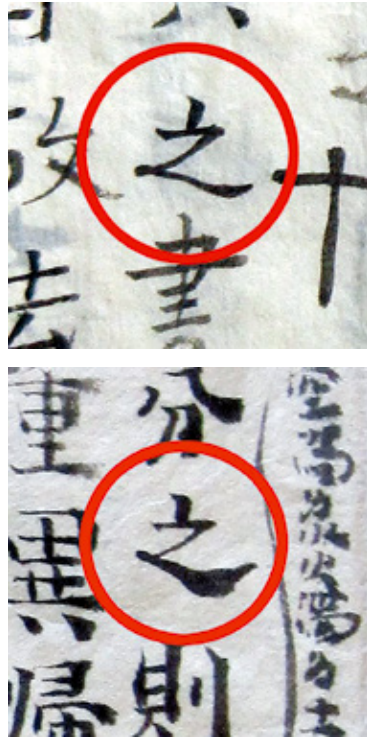
本資料は楮紙一〇枚を袋状にし、こより紐によって四つ目綴じにした仮綴写本で、最初の一枚が表紙、最後の一枚が裏表紙として用いられている。外題ならびに内題は認められず、原題を探る手掛かりは無い。

内容に目を移すと、一丁表から三丁裏までが中津藩儒であつた藤田敬所（一六九八～一七七六）、三丁裏から七丁表は醸造業を生業としながら敬所に学んだ賀来元龍（子登、玉淵、一七一六～八四）、七丁表から裏表紙裏までは豊後日出藩士で中津藩においては客儒をつとめた原田東岳（一七〇九～八三）の行状が記されており（図一～三）、それぞれに「墓」という言葉が認められ、また、没した年月日が録されていることから、本資料は近世中津藩に係る儒学者三人の墓銘を録したものであることが分かる（以下、資料名を「近世中津領儒者墓銘録」とする）。

さて、資料の書写者は示されていないが、藤田敬所および賀来元龍の墓銘は同筆の一方、原田東岳のそれは前者とは筆圧や筆勢、さらには各文字の特徴も異なることから、二人の手に成る冊子であると見られる。前者の筆写者は不明であるが、後者については、線が細くはあるが、線の連続の仕方、線の角度、字の構成、字が平たく右のはらいに力が込められがちなどところが村上玄水（一七八一～一八四三）の筆跡の特徴と類似しており、その書写と目される（図四）。

成立年次については、原田東岳墓銘（一七八四）以降であることは確実であり、これに加えて、玄水が書写したことなどと勘案すると、寛政年間から文政年間（一七八九～一八三〇）の間に成されたものと推察される。

図四 上図は「近世中津領儒者墓銘録」の東岳墓銘、下図は村上玄水写「四元行火吸之論」（「村上医家史料館史料目録」八部九）の「之」字。筆の差による字体の違いはあるものの、特徴は一致している。



二、墓銘

（一）藤田敬所

「近世中津領儒者墓銘録」によると、敬所は号で、諱は順則。字を不識、正藏とも称した。そもそも藤田家は藤田姓の出で、江戸時代には龍野藩の家臣であったが、寛永九（一六三二）年に藩主小笠原長次（一六一五～一六六）が中津に転封した際、敬所の祖父新右衛門もこれに従い、中津に移った。

敬所は幼くして父母を失ったが、学問に対する志は持ち、亡父の門人で中津藩儒であった土居震発（東蔵、一六八六～一七三六）に学び、後に京都に遊学する。寛保元（一七四一）年に豊前中津藩初代藩主奥平昌成（龍源公、一六九四～一七一六）の命で儒学を講義し、宝暦二（一七五二）年には二代藩主奥平昌敦（方広公、一七二四～五八、在位一七四六～五八）に藩儒に任ぜられた。その後、明和四（一七六七）年²に致仕し、息子の与一郎（行義）に家督を譲った。妻は脇屋氏で先死した。

未上梓の文集二巻と詩集三巻を家蔵していたが、安永五（一七七六）年二月十二日、七九歳の生涯を終えた。墓銘は古義堂三代目塾主伊藤東所（善紹、一七三〇～一八〇四）の撰。墓碑は与一郎と高弟倉成龍渚（一七四八～一八一三）が建てた（図二）³。

なお、儒官時代の講義内容は『孟子古義』などを用いた古

義学であり、これは伊藤東涯（一六七〇～一七三六）に学んだ土居震発の教えによるところが大きかったものと考えられる。

さて、これまで敬所の基礎資料として、中津市寺町に所在する合元寺ごうげんじの墓銘が用いられてきたが、碑が大幅に破損していることから、実物ではなく、郷土史家赤松文二郎が採録した「藤田敬所先生墓碑」が用いられてきた。しかしながら、村上家蔵「近世中津領儒者墓銘録」と突き合わせてみると、両者の記述が所々で異なることが判明した。

以下、比較のために赤松採録銘文を引用するが、その際、訓点を省略し、旧字は常用漢字に、赤松の不解読箇所は■に改め、さらに村上家蔵資料と異同が見られる箇所には傍線を付した。なお、本文通りに句点を施すと意味が通らなくなる場合は変更した。

【赤松文二郎「藤田敬所先生墓碑」】

君諱順則。字不識別号敬所。称正藏。藤姓藤原氏。初当源平角衝之日。有藤田■諱行安者。後数世有四郎兵衛諱行忠。其子新右衛門諱安之仕播之龍野。我侯移封豊之中津遂従焉。安次子市市左衛門諱某。居家配西郡氏。即君之考。幼而喪怙恃。不事生産。竊有志于聖賢之道。享保初奥平侯来鎮中津。侯之儒有先子門人土居東藏者。君就而正焉。後來京師。謁吾先子■遣蒞。寛保辛酉年先■源公命君講經燕寢。礼遇甚渥。宝曆

壬申年方広公命為儒官。賜月俸若干。明和二年致仕。猶以唱導為任。君性行慤謹。嚴而泰莊而謙。与人之謀必以忠。嘗遇年大饑。民之貧而不能自立者。傾家資賑恤。平生不喜華飾。其說經論道。亦不以私說廁其間。文集一卷詩集三卷。共藏于家云。配脇屋氏先死。生一男曰行義襲祿。元禄十一年某月某日生。安永五年丙申二月十二日罹病終。年七十有九。葬于府下合元寺。私諡曰貞一先生。君之門人倉成至与令嗣謀。録行状。使予銘其墓。■因以銘

砥厲古道 風声一方 其惟在德兮 芳躅奚亡

安永六年丁酉七月 平安 伊藤善韶撰

子行義 門人至建之。

赤松採録銘文と村上家蔵「近世中津領儒者墓銘録」中の墓銘は論旨が同じであるものの、細かい所まで見て行くと、およそ二四箇所にわたって記述の異なりが認められた。そこで、記述の正誤を確かめるために、異同箇所番号を付し、赤松文二郎「藤田敬所先生墓碑」、村上家蔵「近世中津領儒者墓銘録」、合元寺墓碑銘（図五）を並列して、比較確認してみよう。なお、磨滅や剥落により合元寺墓碑銘の一部が解説不能の場合は■で示した。また、引用文は全て常用漢字に改めた（以下、全ての引用文で同）。

図五 藤田敬所墓碑（中津市寺町合元寺）。



- ① (赤松)「藤原氏」
(村上)「藤田氏」
(墓碑)「藤田氏」
- ② (赤松)「角衝」
(村上)「角衝」
(墓碑)「破損につき不明」
- ③ (赤松)「藤田■」
(村上)「藤田三郎大夫」
- ④ (墓碑)「破損につき不明」
(赤松)「行忠」
(村上)「行忠者」
(墓碑)「行忠者」
- ⑤ (赤松)「新右衛門」
(村上)「新右衛門」
(墓碑)「新右衛門」
- ⑥ (赤松)「我侯」
(村上)「小笠原侯侯」
(墓碑)「破損につき不明」
- ⑦ (赤松)「君之考」
(村上)「君之考妣也」
(墓碑)「破損につき不明」
- ⑧ (赤松)「幼而」
(村上)「君幼而」
(墓碑)「破損につき不明」
- ⑨ (赤松)「侯之儒有」
(村上)「侯之儒官有吾」

〔墓碑〕「破損につき不明」

⑩ (赤松)「■遣蒞」

(村上)「扣道蒞」

(墓碑)「扣道蒞」

⑪ (赤松)「先■源公命」

(村上)「先君 龍源公令」

(墓碑)「破損につき不明」源公令」

⑫ (赤松)「甚渥」

(村上)「甚欽」

(墓碑)「甚欽」

⑬ (赤松)「明和二年」

(村上)「明和丁亥年」

(墓碑)「破損につき不明」年」

⑭ (赤松)「大饑」

(村上)「大飢」

(墓碑)「破損につき不明」

⑮ (赤松)「民之貧」

(村上)「親戚之貧」

〔墓碑〕「破損につき不明」

⑯ (赤松)「其說經論道」

(村上)「其說論道」

(墓碑)「其說經論道」

⑰ (赤松)「其間」

(村上)「其間矣」

(墓碑)「破損につき不明」

⑱ (赤松)「文集一卷」

(村上)「文集二卷」

(墓碑)「文集二卷」

⑲ (赤松)「元禄十一年」

(村上)「元禄十一年戊寅」

(墓碑)「破損につき不明」

⑳ (赤松)「合元寺」

(村上)「合元寺別院中」

(墓碑)「破損につき不明」

㉑ (赤松)「行狀」

(村上)「事狀」

〔墓碑〕「事状」

②② (赤松) 「■■■因以銘」

(村上) 「仰信之篤義不能辞因系以銘曰」

〔墓碑〕 「破損につき不明」 因系以銘曰」

②③ (赤松) 「砥厲古道」

(村上) 「砥厲古道兮」

〔墓碑〕 「砥厲古道兮」

②④ (赤松) 「至建之」

(村上) 「倉成至建」

〔墓碑〕 「破損につき不明」

碑の破損により多くが不明であるものの、合元寺墓碑銘の判読可能箇所については、①⑥を除けば墓碑と「近世中津領儒者墓銘録」とで全ての記述が一致した。唯一異同が見られた①⑥については、単に「経」字を落としただけの誤写だと考えられる。一方、赤松文二郎「藤田敬所先生墓碑」の異同の多さは誤写という現象では説明できない。赤松が合元寺墓碑や村上家蔵資料ではない、何らかの資料に基づいて採録したことは明らかであるが、その底本は不明である。

ともあれ、以上から「近世中津領儒者墓銘録」中の藤田敬所墓銘は、合元寺の墓碑から直接筆写したか、もしくは碑銘

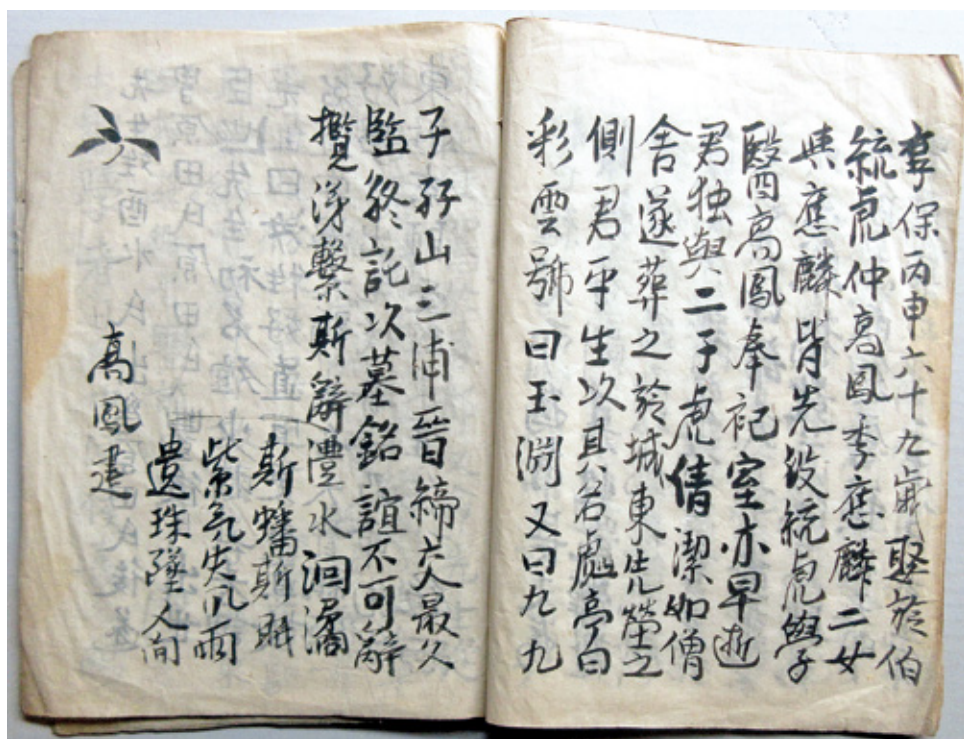
の版下を書写した二通りの可能性が考えられるが、前者と見るのが自然である。本資料は、墓碑の破損部分を補うものであるとともに、現時点で最も信用できるものと考えてよい。

(二) 賀来元龍

「近世中津領儒者墓銘録」によると、元龍は諱で、字を子登、名を吉衛門、号を玉淵また九九子と称した。亭は彩雲という。祖先の出自は大神族賀来氏で、後に大友氏に仕えたが、清田氏との勢力争いに敗れ、賀来城に居を定めることとなった。黒田氏が周縁を平定したことで、平穩を得たこの地に落ち着き、村を構えたという。

元龍は享保元(一七一六)年に生まれた。まだ士官する以前の藤田敬所門に学び、荻生徂徠(一六六六〜一七二八)の学問に親しみ、その論は、二豊の事績をはじめとした例証をもって唱えられた。そのため、諸家に秘された歴史事項を記した文献類についてはこれを買求め、書写、家蔵していた。父を継いで酒造業を生業とし、市長(後述、町年寄)と銀鈔局副(勘定所のような部局の次官か)をつとめた。交友関係が広く、酒を好み、昂りやすい性格で、三男二女に恵まれたが、妻と末男と二人の娘に先立たれた。後に望まず職を辞め、客を謝絶して執筆に専念する生活に入った。

図六 左葉に笹図と梅園が撰した墓銘が見える。



元龍は三〇余部に及ぶ著述を成したが、上木した作品、未発表のまま家蔵した文章、脱稿に至らないものとの三種があった。天明四（一七八四）年四月二八日、六九歳で没した。生前親交を深くしていた三浦梅園（二七三〜八九）に死後を託し、その約束の下に梅園は次の墓銘を撰した（図六）⁶。なお、墓碑は次男高鳳が建てた⁷。

澧水洄瀾 斯蟠斯賦 紫氣失風雨 遺珠墜人間

（澧水れいすいの洄瀾かいけつ、斯わだかまく蟠るを斯く賦す。紫氣は風雨を失い、遺珠人間に墜つ。）

梅園と元龍との交友は書物を介した関係だったようで、その書翰から、梅園は元龍に対し、貝原益軒『豊国紀行』や松井可楽『詩法要略』に対する貸借の礼を述べるほか、瀬尾維賢『八居題詠』、石川丈山『覆醬集』、雨森芳洲『橘窓茶話』などの和本に加え、朱國禎『湧幢小品』ならびに錢謙益『列朝詩集』といった漢籍の貸与を懇望している。また、梅園から元龍に本を貸借した様子も見え、さらに『今昔物語』を売買していた様子も窺える。

また、安永七（一七七八）年に起筆されている梅園の日記「帰山録」には「賀来玉淵は名は元龍、字は子登。中津豊後町に住す。我四十年來の相識也。將に西遊せんとして中津に

留まる事数日、因て共に語る。玉淵和書を好む。且当世俗間の流布の書に及ぶ。眼ある人は魚眼を珠に混ぜざれども、知ざる人は燕石を以て連城の珍に当つ。今偽書多く出で蒙者を誤り、其日月を費さしめ其識鑒を誤しむ。当代諸家の事故興廢を説くの書『慶安太平記』、『殺法転輪』など云う、数至る処の手掌を抵て談ず。頗聞くに厭く。近頃又双鳥志なる者有て出づ。武蔵岩流の始末を記せり。我因て其実説を問ふ。玉淵微笑して広寿山法雲和尚の撰する武蔵の碑文を出して示す¹⁰とあり、元龍が慧眼をもって稀少な歴史文献を収集していた事実が裏付けられる。

さて、これまで元龍の墓は知られていなかったが、今回の調査で中津市大字角木の竜王墓地に発見した。墓碑正面には「賀来吉衛門墓」、向かつて左側面から裏面にかけては長文の銘があるが、剥落と磨滅でほとんど判読できない。ただ、僅かに字が判別できる箇所があり、それらは「近世中津領儒者墓銘録」と記述が完全に一致する。また、右側面には「豊後街／佐田屋」と彫られており、元龍の居住地と屋号が明らかになった(図七、八)。

その他、墓銘には元龍が「市長」である旨が記されているが、その意味するところは町年寄である。このことを裏付けるために「惣町大帳」の明和七年正月十四日条を繙くと「佐田屋吉右衛門様」¹¹「賀来吉衛門(書判)」¹²、正月三日条には「月番町年寄 吉右衛門様」¹²などといった文言が認められる。

図七 賀来元龍墓碑(中津市大字角木竜王墓地)。



以上、これまで素性に謎が多かった賀来元龍は、豊後町で酒造業佐田屋を営みながら町年寄をつとめた人物で、三男と二女に恵まれたが、妻と末男と二人の娘に先立たれた。酒を好み、交友関係が広く、昂りやすい性格で、学問をよくし、歴史にまつわる書物を収集したが、晩年は職を辞し、客を謝絶して執筆に専念する生活に入り、天明四(一七八四)年四月二八日、生涯を閉じた。享年六九歳。

図八 右側面の拡大図。「豊後街／佐田屋」の銘が見える。



(三) 原田東岳

「近世中津領儒者墓銘録」によると、出自はもともと西水氏で、後に原田氏となった。原田家は豊後日出藩の家臣である。東岳の初名は殖であったが、性格が直を好んだことから、父に名を直と改めるよう言われ、名を直、字は温夫と称した。東岳は号である。

聡明で学問を好んだことから、第九代藩主木下俊泰（二七二六～六八、在位一七四八～六八）は京都遊学を命じた。当地では古義堂二代目塾主伊藤東涯（一六七〇～

一七三六）に儒学を学んだ。一旦帰郷した後、参勤交代に従い、江戸で服部南郭（一六八三～一七五九）に就いて儒学や文章を修めた。書物を博搜し、あらゆる事柄に精通していた。その一方で、孫子や呉子の軍学に通じ、馬術や剣術もよくした。

宝暦年間（一七五一～六四）の間に日出を去り、東西に客遊して後に中津藩に居を定めると、多くの藩士が日々東岳に学ぶようになった。天明三（一七八三）年二月三日、七五歳にて没した。妻は土屋氏で、三女を儲けたが男子がいなかったことから、門人が相談して久恒元祐の第二子である重三郎を跡継ぎに決め、東岳の遺体は城外の広運寺（広運禪寺）に葬った。

上梓した著書には『経説拾遺』、『席上腐談』、『臥遊謾抄』、『詩学新論』、『東岳筆嘯』、『東岳学的』があり、その他いまだ板行に至っていない原稿も数種存在する。

さて、「近世中津領儒者墓銘録」の原田東岳墓銘の末尾に「天明甲辰「一七八四」春三月 北海江村綬撰」とあるように、江戸の漢学者江村北海（二七一三～八八）の撰であるが、二年後の天明六年九月に刊行された『北海先生文鈔』初編中巻にも墓銘が収録されている。ただし、村上家蔵資料とは所々で記述が異なっている。以下、全文を挙げるが、旧字は常用漢字に改め、訓点は省略し、異同箇所傍線を施した。

『北海先生文鈔』初編中巻「東岳先生墓碣銘」

先生本姓西水氏、出為原田氏後、遂冒原田氏、原田氏、豊後日出世臣云、先生初名殖、少時其考謂先生曰、汝性好直、宜更名直、故名直、字温夫、号東岳、幼而穎悟、日出先侯奇之、乃命先生、東遊京師、受經伊藤東涯、亡何西帰、從侯駕於東都、又命先生、從遊服子遷學古文辭、於是經學文章、並得其統矣、加之博綜該覽、靡弗通曉、傍攻孫吳之書、兼善馳馬擊劍之術、宝曆中、有故去日出、東西客遊、而後卸鞍豊前中津、於是中津之髦士、嚮學者日衆、中津侯嘉之、賜粟粟以資筆硯、今茲天明癸卯十二月三日、病没于中津、享年五十五、君配生三女、無男子門人相謀、以門人久恒元的第二子、重三郎者為嗣、奉其祭祀、又相謀葬先生於中津城外広運寺後山、又相謀請墓碣文併銘於余、先生時多著述、經說拾遺、席上腐談、臥遊謾抄、詩學新論、東岳筆疇、東岳學的等、既行世、其已脱稿、而未遑繕梓亦數種矣、齡未躋耳順齋志長逝、不亦惜乎銘曰

無非命者 慎身奉天 生死窮達 附之逝川

前半部分の内容は「近世中津領儒者墓銘録」と変わらず、僅かに記述の異同も、主に文章表現を調えたものが多い。後半では論旨は同じであるものの、文章の大きな変更が確認でき、表現上の問題にとどまらず、事実認識自体が異なっている箇所も確認できる。

図九 原田東岳墓碑（福岡県吉富町広運寺）。



ここで現在福岡県吉富町に所在する広運寺に墓碑が確認できたので校合してみよう（図九）。なお、磨滅が進み、墓碑銘はほとんど判読できない状態であったものの、次の重要な四点が確認できた。

①出自

「近世中津領儒者墓銘録」には「西水氏」とあり、『北海先生文鈔』では「酒田氏」とされるが、広運寺の墓碑銘を判読

すると、「酉水氏」であることが判明した。

②配偶者

『北海先生文鈔』においては配偶者名への言及が無い一方、「近世中津領儒者墓銘録」には「配土屋氏」とその名が記される。広運寺の東岳墓碑側面には「妻土屋氏附／文化二年乙丑「一八〇五」二月二日病没■」とあり、村上家蔵資料の正確さが示されている。

③年記

「近世中津領儒者墓銘録」の年記は「天明甲辰「二七八四」春三月」、「北海先生文鈔」の刊記は二年後の「天明六年「二七八六」九月」である。墓碑には「天明甲辰春三月」とあり、村上家蔵資料の記述と一致した。

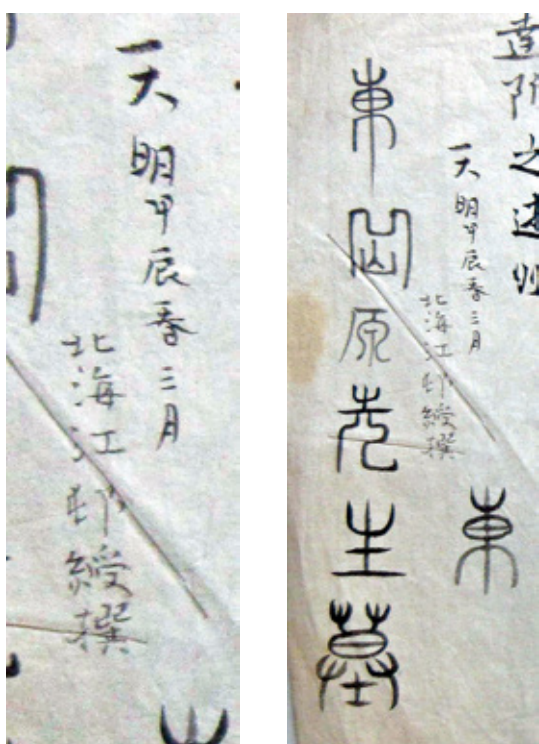
④字体

『北海先生文鈔』には認められないが、「近世中津領儒者墓銘録」の末尾には篆書体で「東岳原先生墓」と記されている。墓碑の上部を見ると、一瞥して分かるように全く同じ字体で「東岳原田先生墓」とある。ここから、「近世中津領儒者墓銘録」は「田」字が脱落しているものの、間違いなく墓碑を直接写したものである（図一〇、一一）。

以上から、「近世中津領儒者墓銘録」が広運寺の原田東岳墓碑から直接銘を筆写したものであることは疑いない。

最後に、東岳の年齢について、村上家蔵資料には「享年七十五」、「北海先生文鈔」には「享年五十五」と二〇歳の年齢の異同が見られるが、東岳が伊藤東所ではなく父の東涯に学んでいることから、東所に学んだ藤田敬所とそれほどの年齢差が無いものと想定できるとともに、何より「近世中津領儒者墓銘録」が墓碑に基づいた資料であることを考えると、「享年七十五」説がより信用に足る記述とひとまずは見てよいだろう。

図一〇 「近世中津領儒者墓銘録」中の原田東岳墓銘の末尾。



図一 東岳墓碑の上部。横書きで「東岳原田先生墓」という銘が見え、図一〇の字体と一致する。



おわりに

以上、村上医家史料館に所蔵されている無題の歴史資料の内容を検討したところ、藤田敬所、賀来元龍、原田東岳といった中津藩に関係する三人の儒者の墓銘であることが判明し、これを「近世中津領儒者墓銘録」と名付けた。

次に筆跡を分析すると、敬所ならびに元龍の二墓銘と東岳墓銘とは手が異なり、前者の書写者は不明であるものの、後者は村上玄水の筆と目される。

ついで、敬所および東岳の墓碑の判読可能箇所、ならびに新たに発見した元龍の墓碑をもつて各墓銘と校合してみたところ、「近世中津領儒者墓銘録」が墓碑から直接筆写して成立したものと考えられる。

本稿によって、藤田敬所の墓碑の破損個所が補われ、また、数々の著作を持つ原田東岳が漢詩文で名高い服部南郭に儒学を学んだことや、軍学、馬術、剣術に通じていたことが明らかになった。加えて、在野で儒学を学んだ賀来元龍については、これまで不明であった家族関係や、豊後の思想家三浦梅園との親交の深さを突き止めるとともに、梅園が墓碑銘として作成した漢詩を初めて提示した。

「近世中津領儒者墓銘録」は、これまで埋もれていた賀来元龍墓銘を世に示すとともに、藤田敬所および原田東岳墓碑銘の判読不能箇所を補う、現時点で最も信用できる墓銘資料と考えてよい。

なお、郷土史家赤松文二郎が採録した敬所墓銘が合元寺の敬所墓碑とは随分異なったものであった事態は、明治から昭和期までに編纂された中津の歴史資料とそれに基づいて描かれた歴史に対する総点検の必要性を示唆している。

【史料】「(仮) 近世中津領儒者墓銘録」

【原文】

〔表紙〕

〔表紙裏〕

〔一丁表〕

君諱順則字不識別号敬所

稱正藏○藤。○姓藤田氏初當源平

角衡之日有藤田三郎大夫

諱行安者後救世有四郎

兵衛諱行忠者其子新右

衛門諱安之仕播之龍野

小笠原侯移封豐之中

津遂從焉安之次子市左

〔一丁裏〕

衛門諱某居家配西郡氏即

君之考妣也君幼而喪怙

恃不事生產竊有志于聖

賢之道享保初 奥平侯

來鎮中津 侯之儒官有

吾先子門人土居東藏者

君就而正焉後來京師謁

吾先子扣道蒞寬保辛酉

〔二丁表〕

年先君 龍源公令君講

經燕寢礼遇甚欽寶曆

壬申年方廣公命爲儒官

賜月俸若干明和丁亥年

致仕猶以唱導爲任君性行

愷謹嚴而泰莊而謙與人

之謀必以忠嘗遇年大飢

親戚之貧而不能自立者傾

〔二丁裏〕

家資賑卹平生不喜華飾其

說論道亦不以私說廁其

間矣文集二卷詩集三卷

共藏于家云配脇屋氏先

死生一男曰行義襲祿

元祿十一年戊寅某月某

日生安永五年丙申二月

十二日罹病終年七十有九^九

〔三丁表〕

葬于府下合元寺別院中

私諡曰貞一先生君之門

人倉成至與令嗣謀錄

示事狀使予銘其墓仰仰

信之篤義不能辭因系

以銘曰

砥厲古道兮 風聲一方
其惟在德兮 芳躅奚亡

〔三丁裏〕

安永六年丁酉七月

平安伊藤善韶撰子

行義門人倉成至建

君諱元龍字子登姓大

神族賀來華名吉衛門

豐前中津之人也其先

世事大友氏嘗由與清

〔四丁表〕

田氏爭門地弗克走保州

下毛郡賀來城及黑田

氏鎮此邑竟然鎮而

瓜瓞滋蔓為邑豪族祖

惟春始從中津父惟政

娶濱田氏而生君及生正

長與二女君早慧總角就

學於藩文學敬所藤先生

〔四丁裏〕

先生試舉君子喻義之章

問之君為辨折利義之分

先生奇曰可教受煦嘔有

年年十有四以家事客遊

于四方拮据之暇手不廢

卷反還家益孳孳喜徂

徠之說論孟軻氏之論與

孔子不合有叙舜辨觀

〔五丁表〕

筑人山卒子豐葦原中津

國為豐中津之說主張

其說有引證辨論最

用意於二豐之事蹟應永

新田氏之亂慶長黑田氏

之戰及津藩沿革廢興

市井猥瑣之事故背娓娓

而記故諸家帳中之秘購

〔五丁裏〕

求騰寫以藏家焉平生

愛客好飲意氣激昂

有孔北海之風每酒酣扼腕

曰丈夫生世可以託名於不

朽何与草木俱生与草木

俱朽為焉所交廣所著多

果以名高于一方雖老身於

釀酒家能高尚其志其

「六丁表」

壯也繼父而爲市長又爲銀鈔局副其性骯髒難與俗合君不以為意免職後閉戶謝客以著書爲務至三十餘部或上木或藏家或未脫稿雖落魄居肆竟以所志而終屬續在天明甲辰夏四月二十八日去生年

「六丁裏」

享保丙申六十九歲娶於伯統虎仲高鳳季應麟二女與應麟皆先沒統虎學醫高鳳奉祀室亦早逝君獨與二子虎請潔如僧舍遂葬之於城東先塋之側君平生以其名處亭曰彩雲号曰玉淵又曰九九

「七丁表」

子孖山三浦晉締交最久監終託以墓銘誼不可辭攬涕繫斯辭澧水洄瀾

斯蟠斯賦

紫氣失風雨

遺珠墜人間

「笹岡」高鳳建

「七丁裏」

先生姓西水氏出爲原田氏後遂冒原田氏原田氏豐後日出世臣也」先生初名殖少時其考謂先生曰汝性好直宜更名直故名直字溫夫號東岳天資穎悟好學日出先侯奇之乃命先生東遊京師受經東涯先生後西

「八丁表」

婦從侯駕於東都又命先生從服子遷學文於是經學文章並得其統矣加之博綜該覽靡弗通曉傍攻孫吳之書兼善馳馬擊劍」寶曆中有故去日出東西客遊後居豐前中津中津之士嚮學者日衆中津侯喜之賜

「八丁裏」

稟粟以資筆硯天明癸卯十二月三日病没于中津享年七十五配土屋氏生三女無男門人相謀以門人久恒元的第二子重三郎爲嗣十二月五日葬

於中津ノ城外廣運寺後山著
經説拾遺席上腐談臥遊譚

〔裏表紙裏〕

抄詩學新論東岳筆疇東岳
學的既行于世其未繡梓
亦有數種」銘曰

無非命者愼身奉天生死窮
達附之逝州

天明甲辰春三月

北海江邨綬撰 東

東岳原先生墓

〔裏表紙〕

【注釈】

〔一丁表〕

○角衝…角衝か。合戦のことを意味する言葉か。

○播の龍野…播州龍野藩。

○小笠原侯…寛永九（一六三二）年に龍野藩から八万石で入封した小笠原長次（一六一五〜一六六）のこと。小倉城主・小笠原忠真の甥。

〔一丁裏〕

○居家…家にあつて職業を有する人。

○考妣…亡き父母。

○怙恃…父母。

○奥平侯…享保二（一七一七）年に十萬石で入封した奥平昌成（一六九四〜一七一六）のこと。

○先子…亡父。

○土居東藏…伊藤東涯に学んだ儒学者土居震発（一六八六〜一七三六）のこと。丹後宮津藩に仕えたが、享保二（一七二七）年、奥平昌成の転封に従い中津に移った。『下毛郡誌』、六四八頁。

○寛保辛酉年…寛保元（一七四一）年。

〔二丁表〕

○龍源公…豊前中津藩初代・奥平昌成の諡号。

○燕寝…宮廷。ここでは中津城のこと。

○礼遇…礼を厚くしてもてなすこと。

○方広公…豊前中津藩二代藩主奥平昌敦（一七二四〜一七八、在位一七四六〜一七八）の諡号。

○宝曆壬申年…宝曆二（一七五二）年。

○明和丁亥年…明和四（一七六七）年。

〔二丁裏〕

○家資…身代。

○賑恤…貧困者などを援助するために金品を提供すること。

○華飾…分を越えて飾ること。

○元禄十一年戊寅…一六九八年。

○安永五年丙申…一七七六年。

〔三丁表〕

○倉成至：儒学者倉成龍渚（一七四八～一八一三）。中津藩校進脩館教授をつとめた。『下毛郡誌』、六五〇～六五三頁。

○令嗣：跡継ぎ。

○砥厲：砥厲切偲で、互いに励まし合うこと。

○芳躅：先人の事跡を讃えている語。

「三丁裏」

○安永六年丁酉：一七七七年。

○伊藤善紹：儒学者伊藤東所（一七三〇～一八〇四）。後述伊藤東涯（一六七〇～一七三六）の三男で、古義学を唱えた伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）の孫。古義堂三代目塾主。後に三河国挙母藩藩校崇化館の初代学頭となる。

「四丁表」

○瓜瓞滋蔓：瓜茂り育ち、その蔓がどんどん伸びて大小たくさん実をつけることを意味し、ここから代々に渡って繁栄がつづくことを願うことを譬えた謂。

○総角：古代の少年の髪形で、頭髮を中央から二分し、耳の上で輪の形に束ね、二本の角のように結つたもの。

○藩文学：藩儒。

「四丁裏」

○試挙：挙試のこと。律令制下で出仕を望む大学の学生に課された試験のことで、ここでは藩校の試験を意味する。

○君子喻義之章：『論語』「里仁第四」の「子曰、君子喻於義、小人喻於利。」が典拠。よくできた人物は正しい道かどうかで物事を判断し、小人は利益が得られるかどうかで

判断するという意。

○煦嘔：煦嘔のことか。恵み育てること。

○拮据：忙しく働くこと。

○孳孳：一所懸命に努力するさま。

○徂徠：儒学者荻生徂徠（一六六六～一七二八）のこと。五代將軍徳川綱吉側近で幕府側用人であった柳沢保明（のちの柳沢吉保）に仕えたが、綱吉の死去と吉保の失脚により、江戸に出て護園塾を開いた。学問としては、古代中国の古典を読み解く方法として古文辞学を唱え、後世に多大な影響を与えた。

○孟軻：孟子。

「五丁表」

○筑人山本予：不明。

○引証：証拠として引用すること。

○二豊：豊前と豊後。

○応永新田氏の乱：いわゆる応永の乱（一三九九）は、守護大名の大内義弘が室町幕府に対して起こした反乱で、新田氏との関連が不明である。また、それより少し以前、明德二（一三九一）年に起こった明德の乱は、山名氏清、山名満幸ら山名氏が室町幕府に対して起こした反乱で、この山名氏は新田氏の一族であった。ただ、ここで言う「応永新田氏の乱」が何を指すかは不明。

○慶長黒田氏の戦：慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の戦いで黒田長政が東軍として参戦したが、並行して九州内の西軍

を攻撃すべく、父如水が中津城で挙兵した。

○猥瑣…雑事。

○背妮…そむくことと従うこと。

〔五丁裏〕

○孔北海…孔融のこと。黄巾の乱（一八四）にあたって北海（山東省濰坊）の相となり、のち曹操の幕下に加わり少府となった。傲慢な性格でしばしば曹操に反発したため、ついに処刑された。

○扼腕…扼腕。残念な気持ちや憤慨から、自分の腕を握りしめること。

〔六丁表〕

○市長…賀来元龍は豊後町の町年寄であつた。

○銀鈔局…「鈔」には貨幣という意味があることから、貨幣の流通や勘定などを司る公的機関のことか。

○骯髒…たかぶつて屈しないさま。

○落魄…落ちぶれること。

○属續…人の死に際。

○天明甲辰…天明四（一七八四）年。

〔六丁裏〕

○享保丙申…享保元（一七一六）年。

○伯統虎仲高鳳季応麟…伯、仲、季はそれぞれ兄弟の長男、次男、末子を意味する。よってここでは長男統虎、次男高鳳、三男応麟。

○先塋…先祖の墓。

〔七丁表〕

○子仔山三浦晉…豊後の儒者で自然哲学者であつた三浦梅園（一七二三〜八九）のこと。

○締交…交際を結ぶこと。ここでは友情。

○攬涕…涙を拭うこと。

○澧水…中国湖南省の四大河川（湘江、沅江、資江、澧水）の一つ。湖南省に源を発し、洞庭湖に注ぐ。

○洄湔…水が湧き出てめぐり流れるさま。

○紫氣…紫色の雲氣。紫氣は、中国では非常に吉祥で縁起がよい。

〔七丁裏〕

○考…父。

○頓悟…すぐれて悟りのはやいこと。

○日出先侯…豊後日出藩第九代藩主木下俊泰（一七二六〜六八、在位一七四八〜六八）のこと。

○東涯先生…京都の儒学者伊藤東涯のこと。伊藤仁斎の長男で、古義堂二代目塾主。先述伊藤東所の父。

〔八丁表〕

○服子遷…荻生徂徠の高弟として周知される服部南郭（一六八三〜一七五九）のこと。漢詩文をよくした。

○通曉…ある物事に精通していること。

○孫呉之書…中国春秋時代の兵法家孫子（孫武）と呉子（呉起）の書。つまり、軍学を修めたことの謂。

〔八丁裏〕

○稟粟：俸給として支給された米や粟。

○天明癸卯：天明三（一七八三）年。

○久恒元的：中津城下の新魚町に居を構えていた町医で、時折藩の医業にも従事した。江戸の医官渋江松軒の門流で、原田東岳のほか、中津藩医三輪東庵や江戸の漢学者江村北海（一七一三～八八）にも師事した。拙稿「中津の医家田淵家蔵『醫療歌配劑秘本』写本について」、一二一～一二三頁。〔裏表紙裏〕

○無非命者：『孟子』「尽心章句上」の「莫非命也、順受其正。是故知命者、不立乎巖墻之下。盡其道而死者、正命也。桎梏死者、非正命也。」が典拠。孟子は、人が没するのは天命であるが、正しい天命（危険に近寄らず、刑に処されるようなことなく、己の道を尽くして死ぬこと）を全うしなければならぬことを説いた。

○生死窮達：窮達は、おちぶれることと栄えること。ここではつまり、運命を意味する。

○逝州：逝川のことか。流れ去る川の水。

○天明甲辰：天明四（一七八四）年。

○北海江村綬：前述江村北海。天明六（一七八六）年九月に上梓された『北海先生文鈔』初編中巻には東岳の墓銘が見えるが、「近世中津領儒者墓銘録」所収墓銘とは特に後半部分が大きく異なる。

【読み下し】

①藤田敬所

君諱順則。字は不識。別に敬所と号す。正蔵とも称す。藤姓藤田氏。初め源平の角衡（衡九）の日に当たり、藤田三郎大夫、諱行安なる者有り。後数世にして四郎兵衛、諱行忠なる者有り。其の子新右衛門、諱安之。播の龍野に仕える。小笠原侯、侯豊の中津に移封し遂に従う。安之次子市左衛門、諱某。居家にして配（れい）は西郡氏。即ち君の考妣（こうひ）なり。君幼にして怙恃（こじ）を喪う。生産を事とせず。竊いみるに聖賢の道に志有り。享保の初め、奥平侯中津に来鎮す。侯の儒官に吾が先子の門人土居東蔵なる者有り。君に就きて焉（これ）を正す。後京師に來りて吾が先子に謁し、道蘊（うん）を扣える。寛保辛酉年先君龍源公、君をして燕寢（えんしん）に経を講ぜしむ。礼遇甚だ欽（うやま）う。宝曆壬申年、方広公命じて儒官と為り、月俸若干を賜う。明和丁亥年致仕。猶お唱導を以て任と為す。君の性行慤（まこと）に謹。嚴にして泰。莊にして謙。人との謀必ず忠を以てす。嘗年大飢に遇う。親戚の貧にして自立する能わざるは、家資を傾け賑恤（しんじゆつ）す。平生華飾を喜ばず。其の說道を論じ、亦私説を以て其の間に厠（まじ）えず。（「其れ説を説き力」）『文集』二卷、『詩集』三卷共に家に蔵（おさ）むと云う。配（れい）は脇屋氏にして先死す。一男行義と曰うを生じ、禄を襲う。元禄十一年戊寅某月某日生。安永五年丙申二月十二日病に罹り、終わる。年七十有九。府下の合元寺別院中に葬る。私諡は貞一先生と曰い、君の門人倉成至と令嗣と謀り、事状を録示し、予（あらかじ）め其の墓を銘せしむ。仰信の篤義、辞にする能わず。系

に因りて以て銘曰く、

古道を砥厲し、風声は一方。

其れ惟だ徳在るのみ。芳躅なんぞ亡びんや。

安永六年丁酉七月、平安伊藤善紹撰す。子行義、門人倉成至建つ。

②賀来元龍

君諱元龍、字子登。姓は大神族賀来、華名は吉衛門。豊前中津の人也。其の先世大友氏に事える。嘗て清田氏と門地を争うも克たざるに由り、保州下毛郡賀来城に走く。黒田氏此邑竟を鎮めるに及び、然して鎮まりて瓜瓞滋蔓し、邑を為す。

豪族の祖惟春中津より始まる。父惟政、濱田氏を娶りて君を生じ、及び正長と二女とを生ず。君早慧にして総角、藩文学の敬所藤先生に就きて学ぶ。先生は「君子喻義の章」を試挙して之を問うに、君は利を折りて義の分とすることを弁ず。

先生奇しくも曰く、煦謳を教受するべく有年。年十有四を以て家に事え、四方に客遊し、拮据の暇も手は廃らず、反を巻き家益に還すこと孳孳たり。但徠の説を喜び、孟軻氏の論は孔子と合わざることを論ず。舜を叙べることに有りて、筑人山本子の豊葦原中津国は豊の中津たるの説を弁観す。其の説を主張するに引証有りて、弁論は最て二豊の事蹟に用意す。応永新田氏の乱、慶長黒田氏の戦及び津藩の沿革廃興、市井猥瑣の事、故の背妮々々。而して故を記す諸家帳中の秘は購求して騰寫し、以て家に蔵む。平生客を愛して飲を好み、意氣

の激昂は孔北海の風有り。酒酣ごとに扼腕して曰く、丈夫世に生れて以て不朽に名を託すべし。何ぞ草木と俱に生い、草木と俱に朽つと為さん。交る所広く、著す所多きは、果たして以て一方に名高し。老身と雖も釀酒に於いては家能く高尚たり。其の志は其れ壯也。父を継いで市長と為り、又銀鈔局副と為る。其の性は骯髒にして難と俗とを合わせる。君以て意とせず職を免め、後閉戸して客を謝わる。書を著すを以て務と為し、三十余部に至る。或は上木し、或は家に蔵め、或は未だ脱稿せず。落魄の居と雖も竟に以て志す所を肆にし、而して終に属續に在り。天明甲辰夏四月二十八日去る。生年享保丙申。六十九歳。伯の統虎、仲の高鳳、季の応麟娶るも、二女と応麟とは皆先没す。統虎医を学び、高鳳祀を奉るも室亦早逝し、君独り二子を与す。虎潔如僧舎に請いて、遂に城東の先塋の側に之を葬る。君平生以て其の処亭を名つけて彩雲と曰う。号して曰く玉淵、又九九子と曰う。存山三浦晉締交最久にして監終を託す。墓銘の誼は辞するべからざるを以て涕を攪りて斯辞を繋ぐ。

澧水の洄瀾、斯く蟠るを斯く賦す。

紫氣は風雨を失い、遺珠人間に墜つ。

高鳳建つ。

③原田東岳

先生姓西水氏、出でて原田氏と為る。後遂に原田氏を冒す。原田氏は豊後日出の世臣也。先生の初名は殖。少時其の考、

先生に謂いて曰く、汝の性、直を好む。宜しく名を直あつためと更るべし。故に名は直、字は温夫、東岳と号す。天資穎悟えいごにして学を好み、日出の先侯之を奇とし、乃ち先生に京師に東遊せんことを命ず。経を東涯先生に受け、後西帰し、侯の駕に東都に従う。又先生、服子遷に従いて文を学び、是に於いて経学、文章並びに其の統を得たり。しかのみならず、博綜該覧、通曉せざるなし。傍ら孫呉の書を攻め、兼て馳馬、擊劍を善くす。宝曆中故有りて日出を去り、東西客遊して後豊前中津に居す。中津の士で学に嚮むかう者日に衆おほし。中津侯は之を喜び、稟粟を賜いて以て筆硯に資す。天明癸卯十二月三日中津に病没す。享年七十五。配は土屋氏、三女を生ずるもの男無し。門人相謀りて以て門人久恒元的第二子重三郎を以て嗣と為し、十二月五日中津ノ城外、広運寺の後山に葬る。著は『経説拾遺』、『席上腐談』、『臥遊謾抄』、『詩学新論』、『東岳筆疇』、『東岳学的』、既に世に行われる。其れ未だ續梓せざるもの亦数種有り。銘に曰、

命に非ざる者無く、身を慎み天に奉ず。

生死窮達、之を逝州可力に付す。

天明甲辰春三月 北海江村綬撰 東 東岳原先生墓

【参考文献及び史料】

参考文献

- ▲赤松文二郎『郡誌後材 扇城遺聞』、中津小幡紀念図書館、一九三二年。
- ▲赤松文二郎『倉成龍渚先生遺稿 附藤田敬所先生遺稿』、後凋閣、一九三六年。
- ▲江村北海『北海先生文鈔』初編中卷、唐本屋吉左衛門、唐本屋新右衛門、一七八六年、慶応義塾図書館蔵。
- ▲大分県下毛郡教育会編『下毛郡誌』、国書刊行会、一九八〇年復刻版。
- ▲大分県教育会編・発行『大分県偉人伝』、一九三五年改訂増補版。
- ▲大分県総務部総務課編『大分県史』近世篇二、大分県、一九八五年。
- ▲大島明秀「屋形家と中津藩儒倉成龍渚―写本「外療内治法」を中心に―」（『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第七卷、中津市教育委員会、二〇〇八年所収）。
- ▲大島明秀「中津の医家田淵家蔵『醫療歌配劑秘本』写本について」（『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第一三卷、中津市教育委員会、二〇一四年所収）。
- ▲小野精一『三浦梅園書簡集』、第一書房、一九四三年。
- ▲神戸輝夫「中津藩の儒者藤田敬所について」（『大分大学経済論集』六三卷五・六合併号、二〇一二年所収）。

▲熊谷克己「大中津志」、中津市立図書館蔵、一九二〇年凡例、複写を使用。

▲黒屋直房『中津藩史』、碧雲荘、東京、一九四〇年。

▲竹本弘文校訂『惣町大帳』第三輯、中津惣町大帳刊行会、二〇〇二年。

▲中津市史刊行会編・刊『中津市史』、一九六五年。

▲梅園会編『梅園全集』上巻、名著刊行会、一九七〇年復刻版。

▲半田隆夫校訂『市令録』第一輯、中津市立小幡記念図書館、一九七八年。

史料

▲村上玄水著「四元行火吸之論」(写本、仮綴四丁、二七・八糶×一九・九糶、文化一一年成、村上医家史料館蔵)。

▲「近世中津領儒者墓銘録」(写本、仮綴八丁、二六・五糶×一九・三糶、「村上医家史料館史料目録」七部二六、村上医家史料館蔵)。

注

- 1 それぞれの人物の概略は、『下毛郡誌』「第十一章 人物篇 参照。藤田敬所については、神戸輝夫「中津藩の儒者藤田敬所について」が最も詳細である、なお、神戸は敬所の致仕年次を明和二年としているが、これは後述赤松文二郎(翠陰)が採録した「藤田敬所先生墓碑」に基づいたことによる。
- 2

- 3 敬所と龍渚の子弟関係を物語る事例として、明和二年(一七六五)、郷里を出て中津で学んでいた一八歳の倉成龍渚が、理由は不明ながら寄宿先にいられなくなり、それを気に病んだ敬所が龍渚を引き取って世話をすることを申し出たことがあった。赤松文二郎『扇城遺聞 郡誌後材』、三六〇～三六一頁。
- 4 前掲神戸輝夫「中津藩の儒者藤田敬所について」、五～六頁。
- 5 赤松文二郎『倉成龍渚先生遺稿 附藤田敬所先生遺稿』所収「藤田敬所先生遺稿」一頁～二頁。
- 6 前掲『下毛郡誌』における記述は、明らかに元龍の墓銘に準拠しているように見えるが、典拠とした資料を示していない。さらに、いくつかの点で明らかな解釈誤りが認められ、また、三浦梅園撰墓銘も収録されていない。なお、熊谷克己「大中津志」も同様の具合であるが、ただし、末尾には三浦梅園が撰した「病中聞賀来子登之訃」と題する七言律詩を掲げている。
- 7 「市令録」によれば、次男高鳳が町年寄として記録され、「享和二戌十月廿七日 京町組 佐田屋 加来五郎衛門高鳳 文化元子十一月十六日御免」とある。途中に長男を挟んだかどうかは不明であるが、元龍の墓を建てた次男は家業を継ぎ、町年寄となった。「市令録」第一輯、二七頁。
- 8 原文では「湧」ではなく「油」となっている。小野精一『三浦梅園書簡集』、一八八頁。
- 9 以上は、前掲小野精一『三浦梅園書簡集』、一八八～一九一頁。
- 10 「帰山録」下(『梅園全集』上巻所収)、一〇九九頁。なお、旧字は常用漢字に改めた。また、句読点は筆者による。
- 11 『惣町大帳』第三輯、二八頁。
- 12 『惣町大帳』第三輯、三頁。

古医道秘伝巻（「医大道小巻」）に関する一考察

吉田洋一

要旨

本稿は中津市歴史民俗資料館所蔵の二点の卷子について瞥見するものであるが、それぞれの史料の成立は文政四（一八二二）年と考えられる。宛名の「寺井要人殿」、「寺井専悟殿」は同一人物と推察されるが、現時点での詳細は不明である。しかしながら、作成に関わる人物の丹波頼理・半井主善・半井宗玄は、江戸時代後期の医家であり、本史料は医業免許状の一種ではないかと比定することができる。

キーワード

医大道小巻、寺井要人、寺井専悟、和気家、丹波家、三種祓、護身法、半井宗玄、丹波（錦小路）頼理

はじめに

本稿は中津市歴史民俗資料館所蔵の二点の卷子について瞥見する。同史料は、平成四（一九九二）年四月に個人から寄贈され、二点とも文政四（一八二二）年に成立したものと思われる。史料の宛名は、それぞれ「寺井要人殿」、「寺井専悟

殿」とあり同一人物と推察される。以下個々の史料に関する概要を記す。

史料の概要

紹介する二点の卷子は、平成四（一九九二）年四月に中津市が寄贈を受けたもので、一点ごと箱に収納されている。二点のうち一方（黒色）の収納箱は下箱の底面に、

品目 医大道小巻

番号 3391—①

取得年月日 H・4・4・1

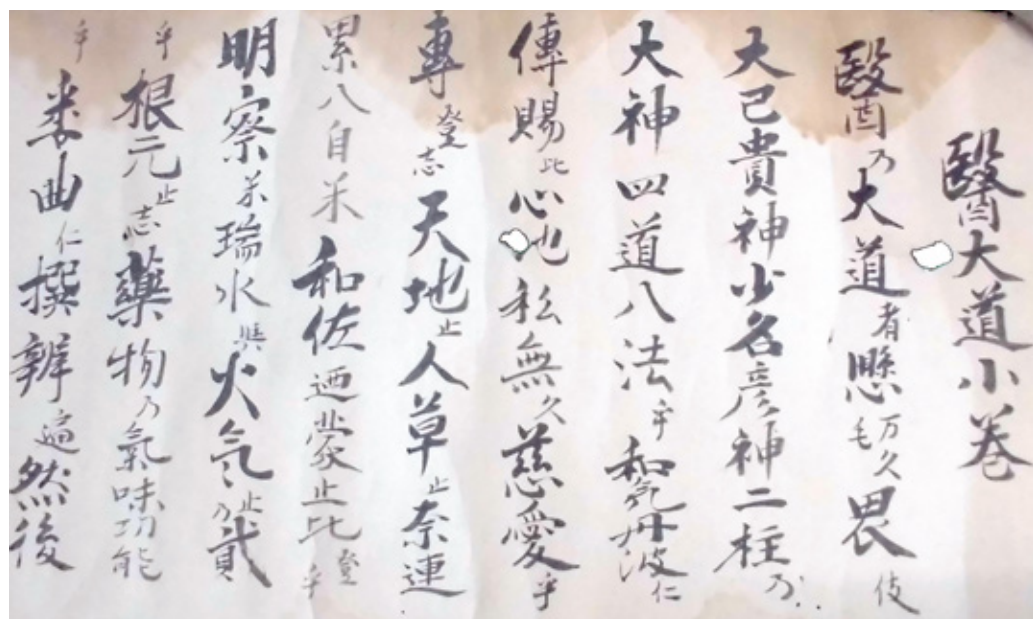
と記載されたラベルの貼付があり、上箱には植物の図柄で装飾されている。もう一方の収納箱（朱色、柿渋か）にはラベルの貼付などは見られない（図一）。

図一 史料と収納箱（中津市歴史民俗資料館所蔵）。



「史料」の文頭には「医大道小巻」とある（図二）。「大道」とは、「医学の大綱」といった意義と考えられるが詳細は不明である。しかしながら、以下「祝詞」を思わせる文章が続く。次に、我が国では医薬の神として祀られている大己貴神（大国主神）と少彦名神の表記があり、「神二柱」が創出した「四道八法」を、古代の医家である「和気丹波」の二家が伝承した、とある。

図二 「史料」冒頭部分（中津市歴史民俗資料館所蔵）。



「四道八法」は未詳であるが、「四道」は視診・聴診・問診・触診のいわゆる「四診」、「八道」は密教における八種の修法（富饒法・求勝法・求恩法・趁逐法・大願法・愍念法・厭伏法）のことと考えられる。

「和氣丹波」は、古代から続く医家である。和氣家は吉備出身の古代豪族で、先祖は和氣清麻呂（七三三～九九）であるが、子の広世は『葉經太素』（奈良末～平安初期成立、偽託）を編纂したとされ、その孫の時雨が医博士・典藥頭に任ぜられると、その後典藥頭を歴任、室町時代末頃からは半井家と称し、曲直瀬家とならぶ地位を占めた³。

丹波家は丹波康頼（九一二～九五）を始祖に仰ぐ官医の家系で、史料中の丹波家は、後に「錦小路家」と称する家である。同家は康頼から八代目の頼基の系を承ける。以後、長基・頼季・光基・篤基・長直・篤直・重直・頼直・篤忠・定基・秀直・盛直と続き、代々、典藥頭・施藥院使に任じられたが、戦国時代の盛直に至って中絶した。江戸時代中期に宮内大輔小森頼季の子頼庸がこれを再興し、宝永四年（一七〇七）はじめて錦小路を称した⁴。

「史料」文章はその後、私心なく天地自然の仕組みを理解して、医学の伝統を守り継承していくこと、遵守できないときは医業を禁ずることなどが記されている。

続く「小中清祓」の祝詞では、天孫降臨から八百万の神々の生成が述べられて、「三種祓」を三回唱えよ、とある。「三種祓」とは、「三種大祓」、「三種祓詞」、「三大神咒」とも呼

ばれ、室町時代末期以降、吉田神道（唯一神道）では、「秘々中深秘⁵」として伝授され、その後垂加神道によって「三種太祓之傳」として口伝されていく。

吐普加身依身多女^{とほかみえみため}

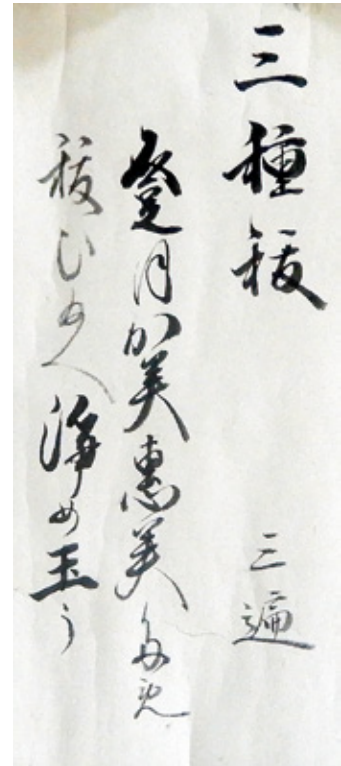
寒言神尊・利魂陀見^{かんごんしんそん・りこんだけん}

波羅伊玉意喜余目出玉^{はらいたまいきよめでたまう}

以上の三種を用いるが、これは平安時代から存するものだという⁶。本史料では、第一句のみが記されている（図三）。

また、西田長男『神道史の研究』では、「三種祓」の制作者は吉田兼俱（一四三五～一五一二）と推定されており、三種のうち第二の祓（寒言神尊利魂陀見）は、易経の八卦の字音を取ったもので我が国の古言ではなく、後に陰陽師によって用いられたものが僧侶によつて襲用された事例の一つであるという⁷。

図三 三種祓の部分（中津市歴史民俗資料館所蔵）。



その後いくつかの祝詞が続き、

- 一、なれるはじめ
- 一、わさのもとひ
- 一、薬物気味功能
- 一、臨ては応機変
- 一、風寒暑湿之気
- 一、三病三氣之大事
- 一、行住坐臥大事
- 一、心神ヲサマリノ大事

右の七カ条の中には医学的用語が散見されるが、「風寒暑湿」は、東洋医学で病気の「外因」と考えられているもので、通常は六淫（風寒暑湿＋燥熱）であり、「行住坐臥」

は、現在では禪的な要素として認識されている。史料作成当時の医学思想がどのように解釈されていたのか非常に興味深い。

「寺井専悟殿」の宛て名が記された後、「秘蜜修法」と題する記述がみえる。これはいわゆる「九字護身法」で、「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」の九字の呪文と九種類の印を結誦して除災や戦勝等を祈る作法である。ただし本来は仏教（特に密教）で正當に伝えられる作法ではなく、道教の「六甲秘呪」（『抱朴子』内編）という九字の作法が修験道等に混入し、その他の様々なものが混在した日本独自の作法である。九字作法は、金剛針印（独股印）を結んで口で「臨」と唱え、順次に大金剛輪印、外獅子印、内獅子印、外縛印、内縛印、智拳印、日輪印、宝瓶印（隱形印）を結び、「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」を唱える。次に刀印を結んで四縦五横の格子状に線を空中に書く。本史料には、この四縦五横の線と考えられる図が付記されている（図四）。

八法」に類似した「四のミち」、「八の法」の記述もみえる。
「史料1」との相違点は、

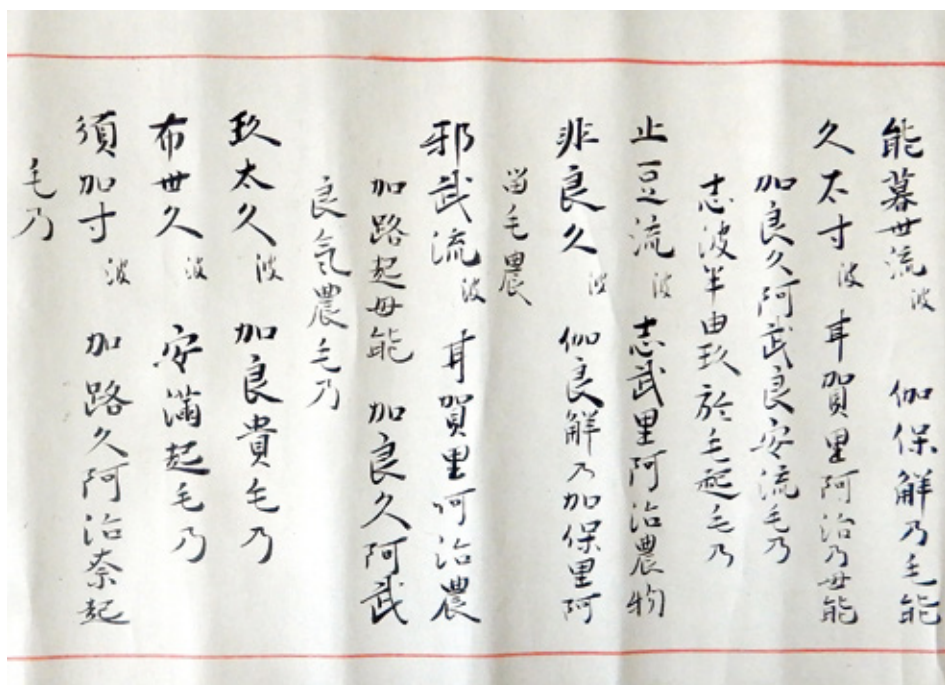
のぼせるは かほげのもの
くたすは にがりあちのもの

とあるように、具体的な病症に対する処方が記されている
(図六)。

最後に、二点の史料に記されている人名について瞥見する。「史料1」には「一貫斎」、「信貞丈」、「史料2」には「丹波頼理」、「半井主膳和氣貞長」、「一貫斎宗玄和氣貞陶」とある。

丹波頼理は錦小路頼理(一七六七～一八二七)のことで(丹波は本姓)、明和四年二月九日生、修理大夫錦小路頼尚の子。母は権大納言日野資枝の女。子は頼易。安永四(一七七五)年治部権大輔、従五位下となり、同五年典薬頭となったが二ヶ月で辞す。天明八(一七七八)年中務権少輔、寛政六(一七九四)年中務大輔、同一一年従三位、文化元(一八〇四)年正三位、同二年修理大夫となる¹⁰⁾。「史料2」中に「正三位修理太夫」とあることから、この人物に間違ひなからう。錦小路家は、もと丹波家を出自とするが、戦国時代に一時断絶、江戸時代中期に宮内大輔小森頼季の子頼庸がこれを再興し、宝永四年(一七〇七)、前述の錦小路を称して幕末まで続く。明治元(一八六八)年には、その後継

図六 「史料2」該当部分(中津市歴史民俗資料館所蔵)。



と思われる頼言が、京都烏丸に病院を設立している¹¹。

半井宗玄（？～一八五三）は、半井主善（貞長）の養子で磐城中村藩医。江戸で医学を学び、のちに京都の鍼医半井主善に就学、さらに長崎にも遊学した。文化一三（一八一六）年、半井家の養子となり、文政二（一八一九）年藩主相馬益胤の命により帰藩、法橋に叙せられる。嘉永五年、江戸の桑田立斎のもとで種痘法を修めたという¹²。両家とも、当時の京都に於いては、医家としての地位を確立していたと考えられる。

おわりに

二点の卷子について若干の考察を加えると、中津に何らかの関わりがある「寺井某」が、当地で医業を営むにあたり、錦小路家及び半井家から免許皆伝を受けた、ということになる。元来「医師免許状」の類は、幕府医学館の多紀氏や幕末佐賀藩の事跡などの研究蓄積は膨大であるが¹³、江戸時代を通じて体系的な免許制度の変遷に関する研究は不十分である。また京都を中心とした公家の医療に関しては、『京都の医学史』¹⁴に負う所が多く、江戸や中津をはじめとした諸地域との関わりについては、検証の余地があるように思われる。

【史料一】

医大道小卷

医の大道は懸^{もく}く畏き

大己貴神・少名彦神二柱の大神、四道八法を和氣丹波に伝賜ひ、心地私無く、慈愛を専とし、天地と人草となれるはじめ、わざのもとひとを

明察め、瑞水と火氣との貳

を根元とし、薬物の氣味・功能

を委曲に撰弁へ、然後

常に疾病を鑷、急速

に人名を救うくすのりは

皇御国の伝^{でし}代

々所秘神剂なり、無故人に

伝事を禁むと、今すえの

所伝の利は、和漢両流

一致の別伝なり

朝廷に関事有ば、雖小事

両家の受御許容て行

之へしと

右條々有違は、削札て

永く医業を禁止、故に

誠心存養の人に有されば

伝事を不許、可謹々々

手水 宮川の清き流にみそて
禱らん事の叶わぬハなし

水無時 此度ハぬさとりあへぬ折なれハ
きりに在りても払つる哉

鳥居の

大事 神のます鳥居二人らは、此身より
ひつきの宮にやすらかにすむ

神前に向扇を以身体を祓

陽日、左ニ持、陰ヲ内ニ含ミ、右ヨリ払

陰日、右ニ持、陽ヲ内ニ含ミ、左ヨリ払

口伝

謹請再拜く懸^{まく}賢キ

太元尊神大日靈尊

天神地祇八百万神

別て神号口伝

○

小中清祓 一遍

高天原に神とまりまします

すめむつかみろきかみろきミの

みことを以て八百万の神たちを

神集めにあつめ給ひ神はかり

にはかり給ひてすめみ孫の

みことをは豊あし原のみずほ

の国をやす国とたいらけく

しろしめせとことよさし

奉りきかくよさし奉りし国

中にあらふる神等を神とハし

にとい神祓にはらい給へとこと

よさし奉りきかくよさし

奉りし四方の国中に

天津のつとのふと祝詞

のことを以ての礼かくのら

は罪と云う罪とかと云う

とかハあらしとしなとの風の

天の八重雲を吹払うことの

ことく祓ひ浄る事を

はらいとの八百万の神等

にやすらけくきこし

めせと申す

三種祓 三遍

とほかみえみため

祓ひ給へ浄め玉う

柏手 陽陰

祝詞

神供祝詞

ナカタノイネヲミケニカシキ

サナタノイネヲモテミキニガシ
ナマモノカラモノ、ムマキヲソ
ナヘタテマツル平ケクヤ
スラケクキコシメセト申ス

祈願

三種祓

三遍

柏手

陰陽

一なれるはじめ

一わさのもとひ

一薬物気味功能

(付箋)「のりわたらいわからはせくすのり」

一臨ては応機変

一風寒暑湿之気

一三病三氣之大事

一行住坐臥大事

一心神ヲサマリノ大事

右は貴殿執心不浅

に依て此度伝授

せし令畢則被指

出神文之趣堅

以違背有間敷もの也

一貫斎

(朱印) (花押)

文政二 とつ 卯

八月十五日

寺井專悟殿

秘密修法

護身法

如常

独古印 火界咒

七遍

次二九字

臨 外縛

兵 独古

闘 外獅子

者 内獅子

皆 内縛シテ
二中立

陳 内縛

烈 面ヲ鋸シテ
重左ヲ上ス

在 日輪

前 宝瓶



九字印 参照

護身神法

身体護神 三元加持

根本印

五大神王 全身守護
如影隨形^{エイギョウ} 如意感応

八腑印

八腑護神 三元加持
八万四千 毛穴九竅^{キョウ}
通氣自在 命根長養

日輪印

陰陽護神 三元加持
運命延長 動靜隨喜^{ジョウ}
五臟安寧 身体吉祥

月輪印

心上護神 三元加持
胸霧自消 心月証明^{シンヨウ}
大願成就 上天妙果

七星印

行年護神 三元加持
一切星宿 養我護我
年月日時 災過消除^{サイ}

△フルベユラ／＼ハルベユラ／＼トフルベ

丁白甘龍麝

火傷

ナノルハイニヘヤスゲ
ラササノケゲヂカムナ

口伝

唱イ水ヲ掛如此三遍

犬咬

ダゴノタルリズゴンンウゴ
インヨマクノサクドジサウ
ナドリハスミンササヨン

口伝

唱研ニテ三度疵口
ニ油ヲ付ケル
ケドサケドサ
ンクルンクル

三遍

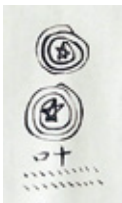
脚氣

カマドノハイニ其足カタヲ付ケサセ
其中ニ灸スルコト三火

アウン

ラヒケン

唱三遍



ちはやふるふぎくる風のはけしくて
齒くろう虫こそたまらざりけり

三反黒

口伝 疾ヲ愈シ玉フハ

大己貴尊・少彦名命フナタケノミコ右ノ歌余大秘

靈妙膏

紙ヲ九ツニ折カタキ膏ヲ点シ九字ヲ以テ
切りケスコト 五月節句ニ製ス

右口授畢

(朱印)(花押)

文政四年九月

信貞丈

【史料二】

懸まくもかしこき大己貴神・
少彦名神、古の二はしらの大神
の遺したまふ医薬の法、武内
宿祢のこの身のわかりのミちなと
の、豊芦原にひめるのりを、高祖
康頼の君あつめ伝へたまひし
より、こゝに八百とせまりの
今にいたるまで、朝廷につ
かへまつるわか家業のてし
文を加ふによてゆるし申
さむ、此許し事をよくく
知てたもてよ、抑家の業は二

柱の大神のミちをさきとして、
見るものきくものつけて氣を
やしない、こゝろを医するとな
む身のわかちをもとゝし、も
のゝ味によりて病にあつ
るもとをしめす、四のミち、八の
法のはしにハ
のぼせるは かほげのもの
くたすは にがりあちのもの
からくあぶらあるもの
しわはゆくおもきもの
しずるは しぶりあちの物
ひらくは からげのかほりあ
るもの
やぶるは にがりあちの
からきもの からくあぶ
ら氣のもの
くたくは からきもの
ふせくは あまきもの
すかすは からくあちなき
もの
しずむるは おもくあち
なきもの
うるをすは あまくう

るほふもの

ゆるめるは

あまくか

ろきもの

ちらすは

にかきもの

からきもの

むすぶは

しわはゆき

もの

とむるは

かろくにかき

もの

かはかすは

かろくから

きもの

はらせるは

からくから

きもの

ちらすは

えくりあち

のもの

かくひめる家業の

をしいなれは、努く

くちよりはかにない

たしはあなかしこ

正三位修理太夫

丹羽頼理

年号月日

半井氏

貞長丈

文略ス

半井主膳

和氣貞長印(花押)

文化十二乙亥正月

和氣宗玄殿

右之一巻医業之大事

極秘之巻也、貴殿執心

依不浅、今度令伝授

畢、則被指出処々ノ

神文之趣堅以違

背有間敷もの也

一貫齊宗玄

和氣貞陶(花押)

文政四辛巳九月

寺井要人殿

【注】

○大己貴神（大国主神）・少彦名神：日本では二神を医薬の神として祀る（『日本の医療史』二九頁）。

○武内宿禰：『古事記』『日本書紀』にみえる、大臣（おおみ）を出した葛城・平群・巨勢・蘇我の四氏をはじめ、二十八氏の祖先とされる伝承的人物。「たけのうちのすくね」ともいい、建内宿禰とも書く。

○高祖康頼：丹波康頼（九一二〜九五）のこと。丹波国天田郡（現京都府福知山市の一部）の人。父母は不詳。『丹波氏系図』には「後漢靈帝―延王―石秋王―阿智王―高貴王（都賀使主）―志努直―駒子―弓束―首名―孝子（老連）―大国―康頼」とあるが、大国以前の系譜については時間的に超越するところがあり信憑性はうすい。丹波氏は倭漢氏系の帰化渡来人と考えられ、丹波史の流れをくむものと推測される。康頼のとき姓丹波宿禰を賜わる。永観二年（九八四）十一月医薬総合事典である『医心方』全三十巻を公家に撰進する。ほかに康頼撰とするものに『康頼本草』一卷、『神遺衆古秘法方録』三巻があるが、いずれも偽撰と考えられる。針博士・医博士・左衛門佐・左兵衛医師・丹波介を経歴し、従五位上に昇る。『左経記』長元七年（一〇三四）十二月二日条によれば、医道課試のことは康頼以来行われず、曾孫の雅忠に至って復活したとある。

延慶本『医心方』（安政版『医心方』三〇、札記）には

「長徳元年（九九五）四月十九日逝去、歳八十四」とある。

○和気氏：吉備出身の古代豪族。垂仁天皇の子鐸石別（ぬでしわけ）命を始祖にあててゐるが、もともと吉井川流域の備前・美作地方より出て、清麻呂の高祖父より父まで四代の墳墓も故郷にあつた地方豪族で、広虫・清麻呂の代に至りはじめて中央に出仕したらしい。清麻呂ら一族は磐梨別公より藤野別真人、輔治能（ふじの）真人、さらに和気公、和気宿禰、和気朝臣と改姓されたが、これに連動し、故郷の同族たる藤野郡大領以下の各階層も、それぞれ低位の姓から輔治能宿禰、石成宿禰、石成別公、石野連などに改姓された。清麻呂が故郷の民政にも力をつくし、備前・美作国造に任ぜられ、子の広世も父の志をついでいることとあわせて、在地性を失わない中央豪族であるといえよう。清麻呂の子広世・真綱・仲世らは、父と異なりいずれも大学寮に入り、文章生より出身し、大学寮を復興し、また最澄・空海の外護者となつて平安仏教に大きな足跡をのこした。また広世が『新撰薬経大素』などを講ぜしめ、ことに清麻呂の曾孫時雨が医博士・典薬頭に任ぜられると、その後和気氏は典薬頭を歴任し、医道を家学とするに至つた。室町時代末ごろから、半井家を称し、曲直瀬家とならぶ地位を占めた。

○丹羽（錦小路）氏：丹波康頼を始祖に仰ぐ官医の家系で、康頼八代の頼基の系を承ける。以後、長基・頼季・光基・篤基・長直・篤直・重直・頼直・篤忠・定基・秀直・盛直

と続き、代々、典薬頭・施薬院使に任じたが、戦国時代の盛直に至って中絶。百数十年後、江戸時代中期に宮内大輔小森頼季の子頼庸がこれを再興し、宝永四年（一七〇七）

はじめて錦小路を称した。頼庸は典薬頭・侍医・右京権大夫に任じ、その養子となった尚秀は図書頭・典薬頭を兼ね、從三位に進んだ。享保二十年（一七三五）、尚秀のとき堂上に列せられる。頼尚・頼理も典薬頭に任じ、頼易までいずれも医をもつて仕えた。頼易の跡を継いだ頼徳は公卿唐橋在久の子で、七卿落ちの一人として知られ、赤間関（山口県下関市）で病没。養子頼言は明治元年（一八六八）

四月官許を得て、施薬院三雲宗順邸に御所の内病院を開設したが、この代で医業を廃止。明治三十一年在明が子爵を授けられる。頼庸・頼尚・頼理・頼易・頼徳の墓は京都市左京区の光雲寺墓地に、尚秀と各代女入方の墓は同市上京区の妙蓮寺玉竜院墓地にある。なお頼理は文政七年（一八二四）に五八歳という記述がある（後藤志朗・根本幸夫『佐藤方定と『大同類聚方』』参照）。

○半井宗玄（一八五三）：半井主善（貞長）の養子。磐城・中村藩医。江戸で医を学び、のちに京都の鍼医半井主善に就学、さらに長崎にも遊学した。文化一三（一八一六）年、半井家の養子となり、文政二（一八一九）年藩主相馬益胤の命により帰藩、法橋に叙せられる。嘉永五年、江戸の桑田立斎のもとで種痘法を修めた（『国書人名辞典』）。

○丹波（錦小路）頼理（一七六七～一八二七）：明和四

（一七六七）年二月九日生、本姓丹波。名、頼理。修理大夫錦小路頼尚の子。母は権大納言日野資枝の女。子は頼易。安永四（一七七五）年治部権大輔、從五位下。同五年典薬頭となったが二ヶ月で辞す。天明八（一七七八）年中務権少輔、寛政六（一七九四）年中務大輔。同一年從三位、文化元（一八〇四）年正三位。同二年修理大夫。著作に『医方朗鑑』（文化七年）、『本草薬名備考和訓鈔』（文化三年）など（『国書人名辞典』）。

○八法：密教における八種の修法（富饒法・求勝法・求恩法・趁逐法・大願法・愍念法・厭伏法）のことか（『密教大辞典』）。

○四道：視診・聴診・問診・触診のことか。未詳。

○蠲：やすで。ゲジゲジのこと。ここでは「はらう」、「のぞく」の意か。

○両家：ここでは和気家と丹波家と思われる。

○宮川：三重県中南部を北東流する川。紀伊山地の日ノ出岳に源を発し、幹川流路延長九一km。大内山川・一之瀬川などの大きな支流を合せて東流し、大湊町で伊勢湾に入る。

伊勢国最大の河川。『三国地志』（一七六三年刊）は度会川・度会大川・豊宮川を別称としている。神領の境界をなし、中世武家の神領押領が続くが、宮川以東は守護不入の地であった。江戸時代は主に船渡で、参宮者などの渡河点として桜の渡（下の渡または小俣の渡）は京および東国からの伊勢参宮街道、柳の渡は大和・紀州方面からの初瀬

(伊勢) 本街道に通じた。宮川を渡ると神域であり、渡河点で禊をしたことは「延喜式」にみえ、「御禊する豊宮河のしき波の数よりきみをなほいのるかな」という度会朝勝の歌(新後拾遺集)からも知られる(『日本地名大系』『日本国語大辞典』)。

○八重雲：幾重にも重なる雲。

○三種祓(三種大祓)：室町時代末期以降、吉田神道(唯一神道)の中で秘々中深秘として重んぜられた呪詞。三種祓・三種祓詞・三大神呪ともいう。文明年間(一四六九―八七)、吉田兼俱によつて作られた。(一)吐普加身依身多女(とほかみえみため)、(二)寒言神尊・利魂陀見(かんごんしんそん・りこんだけん)、(三)波羅伊玉意喜余目出玉(はらいたまいきよめでたまう)の三種から成る。(二)は『江家次第』一八、軒廊御卜条にもみえ、亀卜に用いられた。「遠つ神愛(恵)み賜え」と解釈される。(二)は『周易』の八卦「坎艮震巽離坤兌乾」の字音をとつたものの。のち吉田家では増穂残口の意見を容れてこの句を削除する。(三)は「祓賜え清賜え」の意で、(一)(二)(三)をそれぞれ天津祓・国津祓・蒼生祓という。また、(一)を五大神呪、(二)の寒言神尊を陽天神呪、利魂陀見を陰天神呪といい、(三)をあわせて八大神呪と称した。ほかに(一)を八字祓、(三)を善言美詞祓(ぜんげんびじのはらえ)とも呼ぶ。のち吉川神道・垂加神道でも、これが重んぜられ注釈書も多い(『国史大辞典』)。

○神供祝詞：神への供物の際に唱える祝詞のことか。

○風寒暑湿：東洋医学における「外因」の要素。通常は「燥」「熱」を加えた六種(六淫)を指す。

○三病三氣：三病は、『日葡辞書』では、三つの難病(癩病、癩癰、癩癰に似た別の病氣)、または癩病のみを指す。仏教用語では、なおりにくい病氣を三種数えたもので、風病(中風)・鬼病(鬼による病)・業病(先世の宿業)の三つを指す。三氣は、太初・太始・太素、または天地・人の氣を指す(『大漢和辞典』)。

○行住坐臥：人間の日常生活上の基本的な行動(歩く・立止まる・すわる・横たわること)の四つをいい、四威儀ともいう。

○九字印(九字護身法)・護身神法：「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前」の九字の呪文と九種類の印を結誦して除災や戦勝等を祈る作法である。ただし本来は仏教(特に密教)で正當に伝えられる作法ではなく、道教の「六甲秘呪」(『抱朴子』内編)という九字の作法が修験道等に混入し、その他の様々なものが混在した日本独自の作法である。九字作法は、金剛針印(独股印)を結んで口で「臨」と唱え、順次に大金剛輪印、外獅子印、内獅子印、外縛印、内縛印、智拳印、日輪印、宝瓶印(隱形印)を結び、「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前」を唱える。次に刀印を結んで四縦五横の格子状に線を空中に書く(『密教大辞典』)。

○根本印：諸尊の内証本誓を標幟させる根本の印をいう。諸尊には多く根本印・心秘密印・随心印の三種があり、これに相応する根本陀羅尼（大心咒・心真言・心中心真言（随心咒））がある（『密教大辞典』）。

参考文献

- ▲愛知大学中日大辞典編纂所編『中日大辞典第三版』大修館書店、東京、二〇一〇年。
- ▲青木歲幸『江戸時代の医学』吉川弘文館、東京、二〇一一年。
- ▲浅田宗伯ほか『醫家傳記資料上下』青史社、東京、一九八〇年。
- ▲有坂隆道『日本洋学史の研究Ⅱ』創元社、東京、一九七二年。
- ▲安西安周『日本儒医研究』青史社、東京、一九八一年。
- ▲石田瑞麿『例文仏教語大辞典』小学館、東京、一九九七年。
- ▲市古貞治等編『国書人名辞典』岩波書店、東京、一九九五年。
- ▲今永正樹『医も亦自然に従う（村上医家事歴志）』村上記念病院・村上医家史料館、中津、一九八二年。
- ▲大塚敬節『臨牀傷寒論解説』創元社、東京、一九六六年初版。
- ▲京都府医師会医学史編纂室編『京都の医学史』思文閣出版、京都、一九八〇年。
- ▲桐山靖雄『密教入門』角川書店、東京、一九七六年（初版）。
- ▲黒塚信一郎『呪術秘法の書』原書房、東京、二〇〇一年（初版）。
- ▲吴克潜編著『病源辞典』天津市古籍書店、中国、一九八八年。
- ▲後藤志朗・根本幸夫「佐藤方定と『大同類聚方』」（『日本医学雑誌』第五三卷第一号、二〇〇七年、所収）。
- ▲国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館、東京、一九七九〜九七年。
- ▲小曾戸洋『日本漢方典籍辞典』大修館書店、東京、一九九九年。
- ▲酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍、東京、一九八二年。
- ▲下中彌三郎編『神道大辞典（縮刷版）』臨川書店、京都、一九九〇年（縮刷復刻版）。
- ▲立川武蔵『密教の思想』吉川弘文館、東京、一九九八年。
- ▲田村正雄『日本医学百年史』臨床医学社、東京、一九五七年（初版）。
- ▲中医学基本用語邦訳委員会訳編『中国漢方医語辞典』株式会社中国漢方、東京、一九八〇年（初版）。
- ▲陳有昭『中国医学辞典』たにぐち書店、東京、二〇一〇年。
- ▲土井忠夫他編集翻訳『邦訳日葡辞書』岩波書店、東京、一九九五年。
- ▲中村謙介『和漢薬方意辞典』緑書房、東京、二〇〇四年。
- ▲西田長男「神道の死の観念と仏教との関係―三種大祓の成

立を通路として―」(『神道史の研究』雄山閣、東京、一九四三年、所収)。

▲日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日本医学史(増補復刻版)』(財)日本古医学資料センター、東京、一九七八年。

▲日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典第二版』小学館、東京、二〇〇一年。

▲『日本大百科全書』小学館、東京、一九八四年初版。

▲『日本地名大系二四三 三重県の地名』平凡社、東京、一九八三年(初版)。

▲芳賀登・杉本つとむ・森睦彦編『日本人物情報大系第五七巻』(京都名家墳墓録) 皓星社、東京、二〇〇〇年。

▲服部敏良『江戸時代医学史の研究』吉川弘文館、東京、一九七八年(初版)。

▲服部敏良『奈良時代医学史の研究』吉川弘文館、東京、一九四五年(初版)。

▲服部敏良『平安時代医学史の研究』吉川弘文館、東京、一九五五年(初版)。

▲羽生和子『江戸時代、漢方薬の歴史』清文堂出版、大阪、二〇一〇年。

▲日原利国編『中国思想辞典』研文出版、東京、一九八四年。

▲富士川游『日本医学史』日新書院、東京、一九四一年。

▲松本照敬『密教經典入門』東京書籍、東京、一九九一年。

▲密教辞典編纂会編『密教大辞典縮刷版』法蔵館、京都、

一九三一年。

▲諸橋轍次編『大漢和辞典』大修館書店、東京、一九五七年初版。

▲ミヒエル・ヴォルフガング他編『史料と人物Ⅴ』中津市歴史民俗資料館分館医学史料館叢書Ⅻ、中津市教育委員会、中津、二〇一三年。

▲諸橋轍次編『広漢和辞典』大修館書店、東京、一九八二年初版。

▲矢数道明『臨床応用漢方処方解説』創元社、東京、一九八一年(増補改訂初版)。

▲山崎佐「史料 錦小路家史料(1)(2)」(『日本医史学雑誌』、第六卷二号・四号、一九五六年、所収)

▲養老孟司『身体の文学史』新潮社、東京、一九九七年。

史料

▲「史料1(医大道小巻)」(卷子一六・〇糎×三三・六糎、箱一二四・〇糎×五・八糎×高四・一糎、中津市歴史民俗資料館所蔵)。

▲「史料2」(卷子一八・一糎×一九〇・一糎、箱一二・五糎×七・二糎×高三・八糎、中津市歴史民俗資料館所蔵)。

注

- 1 便宜上、黒色箱のものを「史料1」、朱色箱のものを「史料2」とする。
『日本の医療史』二九頁。
- 2 『日本漢方典籍辞典』三七五頁、『平安時代医学史の研究』一六六、
一六七頁、など参照。
- 3 『平安時代医学史の研究』一六五頁、山崎佐「史料 錦小路家史料（1）
（2）」（『日本医史学雑誌』、第六卷二号・四号、一九五六年、所収）な
ど参照。
- 4 『神道大辞典』「三種祓」の項（六三二頁）。
- 5 同右。
- 6 西田長男「神道の死の観念と仏教との関係―三種大祓の成立を通路とし
て―」（『神道史の研究』雄山閣、東京、一九四三年、所収）参照。
一部「付箋」あり（『史料1』参照）。
- 7 『密教大辞典』「九字」の項（三三二頁）参照。
- 8 『国書人名辞典』参照。
- 9 『明治前日本医学史』七二八頁。
- 10 『国書人名辞典』参照、なお「信貞丈」に関しては未詳。
近年では、青木歳幸『江戸時代の医学』など参照。
- 11 特に第一篇「京都の宫廷医家」参照。
- 12
- 13
- 14

中津藩辛島医家旧蔵の写本「種痘新説」と その背景について

ミヒエル・ヴォルフガング

キーワード

種痘新説、牛痘新書、牛痘接法、日高涼台、有馬撰蔵、高野長英、Jan Cock Blomhoff, Johann Heiman Goldschmidt

はじめに

近世の中津地方において痘瘡の研究に最も積極的に取り組んだ藩医・辛島長齡（正庵、一七七九〜一八五七）とその養子長徳（一八〇六〜一八四五）が遺した資料のほとんどは、長徳が岩国で修めた池田流痘瘡学の流れを汲むものであるが、写本「種痘新説」だけは全く異なる系統である。同書の成立を示す奥書はないが、「名医エンネル」、「名医ペアルソン」、「名医ウートウイルレ」、つまり牛痘接種の先駆者 Edward Jenner、George Pearson、William Woodville を取り上げているので、一九世紀初頭のイギリスにおける動きを反映した牛痘導入初期のものと判明している。表紙と一丁目に見られる四つの印影から、辛島父子にとってこの写本が大切なものであったことがうかがえる。



図一 「種痘新説」〔壺印〕蕉庵³、〔印〕〔精徳堂蔵書〕、精徳堂蔵書、辛島徳印⁴）

一、「種痘新説」の訳者について

「種痘新説」は牛痘に感染した牛や接種後の人間に見られる水疱（「牛痘」）が真痘か偽痘かを判断する方法を紹介した上で、その「種子」の確保と「貯る法」、接種方法を説明し、さらに接種後から痂が落ちるまでの毎日の経過を記述している。このような実用的な資料はある程度普及していたはずであるが、同名のものは現存していないようである。九州以外の地域について調べたところ、蒲原宏が一九五九年に類似の写本を紹介していた⁵。越後国蒲原郡加茂の蘭方医森田千庵（一七九八〜一八五七）の遺品資料に「和蘭悉乙勃兒咄著種痘書」という約五〇〇〇字の自筆写本が含まれている⁶。ところどころ語句の違いはあるが、基本的構成と内容は中津の「種痘新説」と一致している。漢方医の生家で医業の基礎を身につけた千庵は、文政三年（一八二〇）に京都の藤林普山に入門し、その後、江戸の宇田川塾に入り、蘭方系の医学を極めた。さらに文政九年（一八二六）から翌年までオランダ商館医シーボルトにも師事し、文政十一年（一八二八）に、亡くなった父の後を継いだ。森田の経歴から、上述の「種痘書」は長崎で成立したと思われる⁷。

出島商館医シーボルト (Philipp Franz von Siebold、一七九六〜一八六六) は、自著『NIPPON』などで自身が牛痘接種法を日本に導入したと主張しているが、確かに来日直後に数名の子どもに牛痘接種を実施したものの、痘漿が腐敗

していたため成功しなかった⁸。この件について、安芸の医師日高涼台の訳書「牛痘新書」に息子涼民が寄せた記述がある。

「愚父在長崎の頃、蘭医シーボルト、牛痘種を持渡り、長崎にて児三人に種ゆ。其種る人に金百疋づゝ菓子料を遺したり。然るに一万三千里の波濤を越へ、日月を経て、其種梱枯せるにや、皆共痘に感ぜず可惜事なり」（「牛痘新書」より）。

安芸の新庄にある医家に生まれた日高涼台（一七九七〜一八六八）は一才の頃に新宮涼庭と接して蘭学について知り、その後文化一三年（一八一六）に大坂で高須琴に儒医学を、同一四年には京都の福井棣園に古医方を学び、引き続き新宮涼庭および華岡青州に師事した。文政六年（一八二三）に彼は故郷へ帰り開業したが、その二年後、長崎で文政一〇年（一八二七）までシーボルトや鳴滝塾での通訳を務めた吉雄権之助（一七八五〜一八三一）から西洋医学を学び、大坂および故郷の竹原で眼科医として開業した¹⁰。

興味深いことに、杏雨書屋蔵の日高資料にも「悉乙勃兒咄」の「種痘書」がある¹¹。成立の背景を示す情報としてはシーボルトの名しかないが、ほぼ同じ内容の訳書「牛痘新書」の巻頭に「安芸処士 日高涼台一訳」とあり、巻末に「文政九酉夏¹² 六月訳於長崎客舎」とあるので、この訳文はシーボルトの長崎滞在中に完成したことになり、森田千庵の「和蘭悉乙勃兒咄著種痘書」と中津の「種痘新説」は、日高

の訳に基づいて作製されたと考えられる。

図二 日高涼台夫妻（『広島県山県郡医師会史』より転載）



杏雨書屋蔵の写本は一九世紀後半以降の写しである。長い間不明だった涼台の自筆本の所在は、二〇一八年三月に刊行された『鳴滝紀要』の論文で明らかになった。牛痘法普及における涼台の業績を取り上げた織田毅によれば、「種痘新書」の草稿と清書本は日高家から長崎のシーボルト記念館に寄贈されている¹³。

シーボルト自身が執筆した種痘関連の書籍は存在しない。一九八九年に「日高涼台の蘭学」を調査した吉田忠は、杏雨書屋蔵の写本「和蘭悉乙勃兒咄著種痘書」と「牛痘新書」¹⁴の

内容およびその背景を詳細に分析した上で、涼台の翻訳が出まわるうちに、当時の高名なオランダ人外科医の名に仮託してシーボルト著としたのだろうと分析している¹⁵。

二、底本について

日高涼台の訳書の底本は、緒方洪庵の高弟有馬撰蔵（一八一七〜一八四七）が一八四〇年代に全訳した本と同じもので、有馬の訳書の標題紙によれば書名や著者名は次のようになっている。

「牛痘新書 和蘭紀元一千八百二年於亜謨斯垠兒陀無訳行
フランクホルト 独乙地名 医員 ヘーエマンヨセフゴルトスミ
ット著

肥前 長崎 上野常足 蔵書

讃岐 高松 有馬撰蔵 訳」

著者名の「ゴルトスミット」はドイツ・フランクフルト (Frankfurt am Main) の医師ハイマン・ヨーゼフ・ゴルトシュミット (Heimann Joseph Goldschmidt) である。彼が一八〇一年に発表した『Allgemeine Übersicht der Geschichte der Kuhpocken und deren Einimpfung (牛痘と種痘の概史)』は、すぐにオランダ語に訳され、一八〇二年にアムステルダムで『Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken, en derzelver inenting (牛痘と種痘の概観)』として刊行された。

図三 ゴルトシュミット著『牛痘と種痘の概史』（ドイツ語版、一八〇一年、オランダ語版、一八〇二年）



オランダ語版の訳者名は示されていないが、ゴルトシュミットの本に着目し素早くオランダ語版を作成したのは、牛

痘接種推進派の専門家に違いない。当時のオランダ医学界で目を引くのは、ロッテルダムのユダヤ人医師レオナルドウス・ダーフィズ (Leonardus Davids, 1772-1820)¹⁶⁾ の先駆的な活動である。ダーフィズは一七九九年に自費でフランスに赴き、パリでジェンナーの牛痘法を広めていたウィリアム・ウッドヴィル (William Woodville) のもとで学び、オランダで初の牛痘接種を成功させた。一八〇一年、彼はジェンナーの名著『An Inquiry into the Causes and Effects of the Variolae Vaccinae (牛痘の原因及び作用に関する研究)』の翻訳書を刊行しており¹⁷⁾、同年にフランクフルトで出たゴルトシュミットの本に彼が注目したことは容易に想像できる。新しい接種法を普及させるには、医師たちの理解を得るための専門書のみならず、接種を受ける民衆の不安を払拭するために一般向けの啓蒙書も不可欠であった。後者にあたるゴルトシュミットの本の翻訳は、学問上の功績にはならないので、あえて訳者名を記載しなかったのかもしれない。

オランダ語版はドイツ語版と本文の内容は一致しているが、ドイツ語版の附録(「Anhang」¹⁸⁾)および解説付きの参考文献リスト(「Literatur über die Kuhpocken」¹⁹⁾)が省かれており、翻訳不要と判断されたようである。附録の内容は「接種する」という動詞についての考察で、「フランス語では vacciner、英語では to vaccinate が用いられる。ドイツ語で kuhpocken (「牛痘する」) という動詞を作ることができるが、過去形や受動態では様々な誤解が生じかねないので、他

動詞でよく利用される接頭辞を付けて bekuhpocken という新語にすればよいかも知れない」などと書かれている。

図四 ゴルトシュミットの参考文献リスト(ドイツ語版、一八〇二年)

— 125 —

Litteratur über die Kuhpocken.

Englische.

Bereits 1795. erschien zu London eine Schrift, in welcher der Kuhpocken und ihrer merkwürdigen Eigenschaft, gegen die Menschenpocken zu sichern, kürzlich gedacht wird. Sie führt im Original den Titel:

I. Observations on morbid Poisons, Phagedaena and Cancer &c. by J. Adams. London 1795.

Joseph Adam's Bemerkungen über Krankheitsgifte, Phagedaena und Krebs u. Aus

三、底本が日本へ伝わった経路について

シーボルトは牛痘導入における自身の役割を少し過大に評価していた²¹⁾。日本における最初の試みはすでに一九世紀初頭に遡る。一八〇三年に商館長ヘンドリック・ドゥーフ(Hendrik Doeff)から教えを受けた通詞馬場佐十郎は、中川五郎治がロシアから持ち帰った牛痘書を和訳して文政三年(一八二〇)に『遁花秘訣』として発表した²²⁾。牛痘接種はオランダ領東インドにおいて一八〇四年に導入され、イギリス支配の時代(一八一〇—一八一六年)から組織的に行われ、一八二〇—二二年のバタビア総督府布告により徐々に徹底されるようになった。

一八〇九—一三年まで荷倉役として出島で勤務したヤン・コック・ブロムホフ(Jan Cock Blomhoff)は一八一七年に出島商館長に就任し、前任者ドゥーフと同様に牛痘接種に関する啓蒙活動に力を尽くした。一八二〇年には天然痘が猛威を振るつたため²⁴⁾、長崎では種痘への関心は高かった。ブロムホフの日記など多くの関連資料の和訳が、沼田次郎と栗原福也によって発表されている²⁵⁾。

附録の第二部では、地元の出版社から刊行されたヨハン・ヴァレンティン・ミュラー(Johann Valentin Müller, 1756-1813)の本に対する反論が述べられている。ミュラーは同じフランクフルトで開業する医師であり、その本の中で「牛の痘瘡は人間の痘瘡と何の関連性もなく、牛痘接種は天然痘に対する確かな予防にならない」などと主張していた²⁶⁾。確かに、ドイツ語の造語法やミュラーの主張への反論はもちろんのこと、英語、フランス語、ドイツ語の参考文献リストもこのような啓蒙書に入れる必要はなかった。

ブロムホフによれば、後にシーボルトに師事する湊長安(「Minatoo Tjoan」)と美馬順三(「Zoenzo Kagagawa」²⁷⁾)は一八二三年三月にブロムホフ自身および商館医テュリング(Nicolaas Tullingh)のもとで種痘法について学んだ。天草の牛の間に痘瘡が流行していると聞いた美馬順三はそこに行き

たいと言ひ、天草で牛痘漿を入手しようと考えたようだ。それに対しブロムホフは、牛痘には真種と偽種²⁷があると指摘したが、順三はそれについてはあまりよく分からなかったようだ。順三が参考にしたのは上述のレオナルドウス・ダーフィズが訳した『牛痘の原因および作用についての研究』だった²⁸。ブロムホフは、「その内容が複雑で広範囲にわたるので、牛の真痘と偽痘（「ware en falsche pokken bij de koeien」）や接種法をより早く理解できるように、一八二一年にバタヴィアから出島商館に送られた本を順三に貸し出した」²⁹。

図五 ヤン・コック・ブロムホフ（川原慶賀作ブロンホフ家族図より。アムステルダム国立美術館所蔵）



商館長ブロムホフの指摘はとても重要だった。日本では牛痘の存在さえまだ確認されておらず、牛の乳房にできる、牛痘と似た炎症などもあり、別のものを「真痘」と勘違いしてしまうことも起こり得た。古賀十二郎によれば、佐賀藩の儒学者草場佩川^{くさばはいせん}が牛痘と思われるものを長崎の蘭学者末次忠助（二七六五〜一八三八）に届け、シーボルトの鑑定を頼んだが、真痘ではなかった³⁰。

一八二一年に出島に送られた牛痘書の書名はバタビア財務部（Departement van Financien）の資料に記載されている。

「オランダ領東インド財務長官訓令抜粋 バタヴィア 一八二三年五月二〇日

財務長官は日本のオランダ商館長により総督府へ提出された「報告書」第七項の最後の部分に述べられている牛痘苗送付の要請を考慮し、貿易を管轄する財務評議員会で協議し、以下の事項を決定をした。

一 オランダ領東インド医務局長の外科医に対して、次の書面を認めること。

日本駐在の外科医からの種痘に関する報告を貴官に通知した私からの去る一月二〇日付書面第二〇、すなわち在日本の商館長によってなされた日本へ牛痘苗を送るようにとの要請にもとづき、例年行われていると同様に、日本に向けて送付する一定量を準備し、当地へ赴任するフォ

ン・シーボルトに預けるよう手配を願います。

二 在日本の商館長は、一八二一年六月二八日付決議第一第二項に関連し、上述第一項を通知し、また同決議により、同館長のもとへ送った『牛痘接種史概観』なる書物を来年返却するよう指示すること。³¹

ハ)『Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken, en derzelver inenting』を読んだブロムホフは牛痘接種の有用性を確信していた。

「私はできるだけはつきり、この有用な発明が人類にいかに関に役立つものであるかということ、また彼らが当地においてこれを実施した最初の人となる、という大きな名声を得ることになるであろうということを教えてやった。

長安は、もしこの試みが少しでも成功を収めた場合には直ちに主人の閣老青山氏に書面で報告し、日本全国にわたって種痘を導入する許可を請うつもりである、と声明した。

私自身この新しい試みの成果を確実にするため、この最初の試験が私の目の届くところでわが商館医師の指導監督の下におこなわれるようにしたととくに理解していた。そのように、彼らの情報は時として、いやしばしば必ずしも十分信頼できないことがあったからである。

こういう理由から私はこの痘漿³²を請求されても与えようとしなかった。それは誤った処置のために、また誤った処置のために生ずる偏見のためにこの有効な手段が無効なものとされないようにするためであった。彼らに必要なランセットをまた、オランダ船が来航した時には痘苗を与えることを約束した。また同時に、接種して好結果を得た人に対しても、それを実施した人に対しても褒美を約束した。またすでに確実な（効果のあった）ものの数について証明書を与えることを約束した。私はそれがうまく行くことを望むものである。³³

当時、出島商館にはすでに痘漿（「soet」）が保管されていたようだ。三月一二日に商館医テュリングはブロムホフ、湊長安、美馬順三らの立ち会いのもと、オランダ人一名と日本人二名に種痘接種を実施した。しかし、この画期的な試みは失敗に終わった。接種後の反応は良いものではなく、八日後に痕の大部分が消失してしまったのである。³⁴

手探り状態の美馬順三らに対して丁寧に対応したブロムホフの功績は大きい。オランダの植民地における牛痘接種の背景には何よりも労働力の確保や地元社会の安定という政治的・経済的狙いがあった。西洋医学の継続的受容が始まった一七世紀中頃以降、知識や技術に加え、文献、道具、医薬品などを提供することは日蘭貿易の「潤滑油」でもあったが、

自ら積極的に動くブロムホフの個人的な善意と使命感は資料から色濃く伝わる。彼の要請に応じて総督府が牛痘接種の導入を承認し、そのための牛痘漿は同年六月に日本へ向けて出港するシーボルトに預けられることになった。

財務長官が言及した『*Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken, en derzelver inenting*』はオランダ領東インドで大いに役に立ったようだ。美馬順三らが閲覧した一冊は一八二四年末にバタビアに返却されているので、その二年後に脱稿した日高涼台の訳本「種痘新書」は原文の写本あるいは新たに日本に届いた刊本に基づいて作成されたと思われる。テュリングとブロムホフの啓蒙活動により、牛痘を導入しようとする医師たちは、真痘と偽痘の区別、接種の方法およびその後の経過という重要な課題についても認識するようになった。

四、民衆啓蒙に力を尽くしたユダヤ人医師ゴルト

シュミット

ハインリッヒ・ハイマン・ヨーゼフ・ゴルトシュミット (Heimann Joseph Goldschmidt, 1761-1835) の生涯と功績を概観しておきたい³⁵。彼は一七六一年にドイツ・フランケン地方の小都市バイアースドルフ (Baiersdorf) のユダヤ人家庭に生まれたが、幼い頃両親を失い、東プロイセンのケーニヒスベルク (Königsberg) の伯父に引き取られた。少年の頃から商業より学問を志し、地元の裕福なユダヤ人の支援を受けるよ

うになり、一七八〇年代中頃、ケーニヒスベルク大学に入学した。医学を専攻したゴルトシュミットは、同大学で教鞭を執っていた哲学者カントの講義に感銘を受け、カントからも高評価を得たようだ。一七九〇年八月一三日、彼はヨーハン・ダニエル・メッツガー (Johann Daniel Metzger) 教授の指導のもと、神経病理学に関する学位論文で博士号を取得した³⁶。その後、ベルリン大学病院で勤務し、医療と解剖学の知識を深めた。

一七九二年、南部ドイツの親戚を訪問した際に、帝国自由都市フランクフルト・アム・マインに移住し、当局の許可を受けてユダヤ人医師として開業した。多くの大都市と異なりフランクフルト市のユダヤ人はまだユダヤ人街 (Judengasse) にしか住むことを認められず、ユダヤ人医師の数は四名に制限されていた。幼い頃から差別と貧困とともに助け合いの精神を体験してきたゴルトシュミットは社会に目を向け、市内のユダヤ人病院の創設および学校の運営³⁷に大いに貢献し、ユダヤ人街の住民のための哲学勉強会を開催したりした。

図六 一八六八年頃のフランクフルトのユダヤ人街 (Th. Creifelds 撮影)



一八〇一年に市参事会に献じた『牛痘と種痘の概史』を出版した。一八〇八年に彼はカトリックに入信し、Johann Baptista Clemens に改名した。以降彼はフランクフルトの第一区く第三区の「貧民医」(Armenarzt) を務めながら、カント哲学の講義などを通じて民衆啓蒙 (Volksaufklärung) に力を注いだ。一八三一年に卒中発作で倒れ業務を行えなくなり、一八三五年一月に再度の発作でこの世を去った。

当時のヨーロッパの都市は不衛生で一般市民は過密住宅で暮らしていた。天然痘が流行すると多数の感染者や死者を出した。ゴルトシュミットの『牛痘と種痘の概史』は、ヨーロッパにおける牛痘黎明期の激しい論争を牛痘推進の立場から整理し、「我が子の健康と命を大切にする慈愛深い両親のために」当時の疑問や反論にわかりやすく答えている。その序文によれば、医学は経験に基づく学問 (Erfahrungswissenschaft) である³⁹。患者の治療に全力を尽くすことや新しい方法を検証することは医者 の義務である。牛痘接種はすでにそのような検証を受け、人命を救うための有効性が確認された。しかし、それまでの種痘関連の本は医者のために書かれたもので、多くの人々はこの重要なことをまだ知らない。ゴルトシュミットはこの書で自身の経験と観察を踏まえながら、英語とドイツ語の優れた文献に基づいて、一般向けの概要をまとめた。本書はとりわけ真痘と偽痘の説明に力を入れている。接種医がそれに注意しないと様々な問題が生じるおそれがある。ゴルトシュミットは、一七九八年に刊行されたジェンナーの本とそれに対する反響も詳しく紹介している。彼の参考資料のリストには一八〇一年春までに発表された英語、ラテン語、フランス語およびドイツ語の三四点の文献が列記されている。牛痘接種の初期の論争を見事に整理した『牛痘と種痘の概史』は、ただちにオランダ語に訳されて翌年にアムステルダムで刊行された。

五、蘭学者が牛痘接種法に寄せる信頼

日本の予防接種の歴史はヨーロッパと同様に人痘から始まっている。筑前秋月藩医・緒方春朔（一七四八～一八一〇）が『医宗金鑑』（乾隆一四年、一七四九）をもとに開発した改良型の早苗種法（鼻早苗法）が広く普及していたが、同じく明の僧医戴曼公から伝わった池田流の治療法も引き続きよく行われていた⁴⁰。人痘接種を慎重に実施すれば、接種の影響による死亡率は二～三パーセントだったとされているが、江戸時代にはまだ広範囲にわたる関連データもなく、「接種による死亡」という最悪の結果を医師が観察する機会もめつたになかった。その一方、天然痘が流行した場合に接種を受けた人は感染しないということはわかりやすく、ヨーロッパと同様に、人痘接種の有用性を疑う余地はなかった。しかし、人痘と違い牛痘には動物の病気（病原体）を人間に移すという「気味の悪い」側面がある。それを疑問視したり、拒絶する西洋人は決して少なくなかったが、長崎で蘭学を志す医師たちは、意外にも最初から牛痘に積極的だった。当面は牛痘法の優位性を裏付けるものは、出島商館医への信頼だけだったが、テュリングとシーボルトによる接種が失敗に終わっても、この根拠のない信頼は揺らがなかった。

六、有馬撰蔵による全訳

「牛痘新書」の全訳で知られる有馬撰蔵（一八一七～一八四七）は一八四〇年代初頭に長崎で蘭学を学び、四年に緒方洪庵の適塾に入門した。彼はすぐに才能を認められ、洪庵の岳父（妻の父）億川百記の養子として億川家を継ぐことになったが、三十歳の若さで京都で客死した。長崎の蘭学者上野常足（俊之丞、一七九〇～一八五二）は、硝石製煉所の創設や種々の細工物の製作で名を上げた人物であるが、自身の蔵書の一冊を有馬撰蔵に餞別として贈っている。億川撰三の論文に掲載された写真で、上野常足の蔵書印を確認できる⁴¹が、この書物の現在の所在は不明である⁴²。

図七

「トルシット」『Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken』に見られる上野常足の蔵書印（億川撰三、一九三八年から転載）



有馬撰蔵の訳書では、ゴルトシュミットの序文、緒論、目次および数々の注釈は省かれているが、章立てはオランダ語版とほぼ一致している。下記の訳文は大阪大学適塾記念センター本に基づいている。

○総括

§ 1 Beschrijving van deze Ziekte bij de Koeijen

○牛痘ノ始原ヲ論ス

§ 2 Van den oorsprong der Koepokken

○牛痘ノ真偽ヲ論ス

§ 3 Echte en onechte Koepokken bij het

Rundvee / § 4 / § 5

○牛痘自然ニ人ニ伝染スル者ヲ論ス

§ 6 Koepokken door natuurlijke besmetting

○牛痘自然ニ人ニ伝染スル者ノ経過ヲ論ス

§ 7 Verloop der Koepokken bij de Menschen,

door natuurlijke aansteking

○牛痘ノ偉能ヲ論ス

§ 8 Hoogstmerkwaardige eigenschap der

Koepokken

○諸危蘭土ニ於テ種牛痘法流布スルヲ論ス

§ 9 Invoering der Koepokken in Engeland

○種牛痘法ハステ蘭土⁴³ニ伝来スルヲ論ス

§ 10 Invoering der Koepokken-inenting op
het vaste land

○牛痘伝染性ナキヲ論ス

§ 11 De Koepokken zijn niet besmettend

○牛痘ノ種法ヲ論ス

§ 12 Inentings-methode der Koepokken

○牛痘鉋鍼ヲ以テ種スル者ノ経過ヲ論ス

§ 13 Het beloop der Koepokken bij menschen,

na de inenting, door een Lancet-steek

○牛痘ノ真偽ヲ論ス

§ 14 Echte en onechte Koepokken bij menschen

○尋常ノ種痘法ト種牛痘法ノ優劣ヲ論ス

§ 15 Parallele der Koe-en Kinderpokken-

inenting, waaruit de voortreffelijkheid der

eerste boven de laatste ontegenzeggelijk

blijkt

○答難

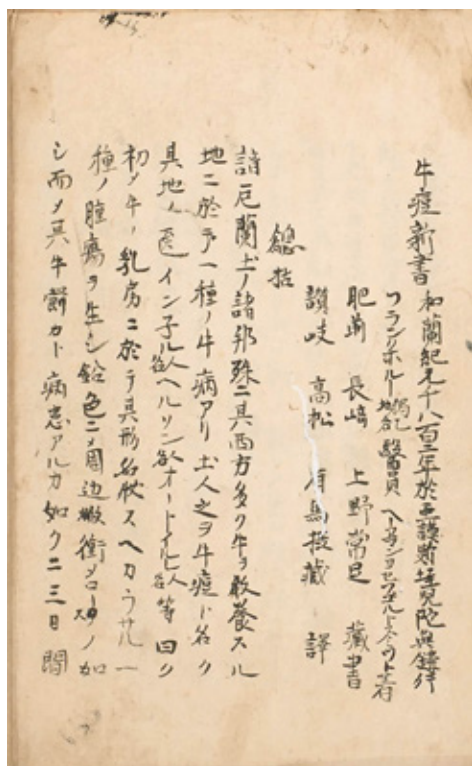
§ 16 Beantwoording van eenige twijfelingen

en tegenwerpingen tegen deze nieuwe

inenting

有馬撰蔵訳の「牛痘新書」は刊行本であると考えられる研究者が多いが、その形跡は確認できない。現存するのは、写本のみである。

図八 有馬撰蔵訳の「牛痘新書」（大阪大学適塾記念センター蔵）。



ら生じかねない難点も示している。⁴⁴
日高涼台が一八二五年に執筆した抄訳は三部からなる。第一部の前半はゴルトシュミット本の第三章を、後半は第一章の最重要部分を訳出している。

S 3 Echte en onechte Koepokken bij het

Rundvee (ゴルトシュミット)⁴⁵

「牛の乳房ニ発スル牛痘ノ真偽ノ弁」(日高本)

「牛痘真偽の区別」(森田本)

「牛痘牛乳房上ニ発スル者ノ見證」(辛島本)

「牛痘ノ真偽ヲ分ツ法」(高野本)

S 14chte en onechte Koepokken bij menschen

(ゴルトシュミット)

「表題ナシ」(日高本)

「表題ナシ」(森田本)

「表題ナシ」(辛島本)

「接後牛痘ノ真偽ヲ定ムルノ法」(高野本)

S 12 Inenting-methode der Koepokken (ゴルトシュミット)⁴⁶

トシュミット)

「牛痘傳接ノ奇法ヲ論ス」(日高本)

「表題ナシ」(森田本)

「牛痘傳接ノ手法」(辛島本)

「牛痘傳術」(高野本)

S 13 Het beloop der Koepokken bij

menschen, na de inenting, door een

七、ゴルトシュミットの本の抄訳について

一八二三年三月にゴルトシュミットの本を貸し出した出島商館長ブロムホフは、牛痘接種を志す美馬順三らにとりわけ「真痘」と「偽痘」に注意するよう助言していた。ブロムホフは医師ではないが、ゴルトシュミットの序文を読んで、そのような考えに至ったと思われる。

「真痘と偽痘を区別できるための特徴を正確に列挙することに特に力を尽くした。また、接種方法に極力注意を払わないと、(牛痘接種という)本来は素晴らしいことのために行うものか

Lancet-steek (「ルトシュミット」)⁴⁷

「ランセット用テ伝接スルノ後牛癩ノ運症候ヲ論ス」(日高本)

「表題ナシ」(森田本)

「牛痘鉋鍼ヲ以テ種スル者ノ経過ヲ論ス」(辛島本)

「牛痘病症」(高野本)

文政八年(一八二五)に長崎に赴いた高野長英(一八〇四〜一八五〇)も牛痘接種に強い関心を寄せていた。彼が遺した「牛痘接法 東奥瑞皐訳」の内容は日高涼台訳「種痘書」と一致しているが、様々な言い回しや訳語は日高系の写本と異なっている。しかしゴルトシュミットの本の同じ部分が選ばれているので、日高涼台の和訳を参照したと思われる。各写本の文章を比較してみると、中津の「種痘新説」は日高涼台訳を反映していることがわかる。とりわけ森田本との類似性が高い。

【G ゴルトシュミット、一八九二年。K 「種痘新説」

辛島本。M 「種痘書」森田本⁴⁸。H 「種痘新書」⁴⁹ T

「牛痘接法」⁵⁰】

- G I. De onechten hebben die blauw- of
loodachtige verwe niet
K 一 真痘ニ非ル者ハ青或鉛様ノ色ナシ
M 一 真の牛痘に非ざる者は青或は鉛□の色

なし

H 第一偽痘ハ青又鉛様色ナリ⁵¹

T 一 偽痘ハ青淡鉛様ノ色ヲナス

G 2. De onechten zijn met geen
rooschighen ontsloeken rand ongeven.

K 二 真「痘」ニ非ル者ハ其周圍ノ薔紅色ニナ
リテ焮衝スル事ナシ

M 第二真痘に非ざるものは其周圍の薔薇紅
花色なりて焮痛することなし

H 第二偽痘ハ其周圍薔薇色且ツ焮痛スル證
ナシ

T 二 偽痘ハ痘ノ周圍薔薇色紅色ヲ見ス事ナ
ク又焮痛スル事ナシ

G 3. De onechten veranderen schielijk in
eenen droogen schurft. Bij de echten
integendeel vindt deze verdroging eerst
later plaats, nadat de ontsteking
verdwenen is.

K 三 真「痘」ニ非者ハ速ニ乾涸シテ癩ト変ス
真ノ者ハ反レ之シテ焮衝已ニ消シテ后ニ始
テ乾涸ス

M 第三真痘に非ざるものは速に乾涸して癩
と変ず真痘のものは之に反す其焮痛漸くに
消して後ち始めて乾涸するなり。

H 第三 偽痘ハ速ニ乾涸シテ成ル真痘不然焮痛已ニ消シテ後乾燥ス

T 三 偽痘ハ忽チニ乾涸シテ結痂ス真痘ハ否ラス焮痛已ニ消散シテ漸次ニ乾涸ス

G 4. Bij de echten wordt het vee ziek, het verliest den eetlust, en de melk; het welk bij de onechten niet gevonden word.

K 四 真「痘」ノ者「二」於テハ其牛病シテ食ヲ欲セス乳汁ヲ減ス真「痘」ニ非ル者ハ此證ナシ

M 第四 真痘の者於ては其牛病み食を欲せず且つ乳汁を減ず、真痘に非ざるものは之に反す

H 第四 真痘ハ其牛ニ悩アリテ食ヲ欲セス其乳汁ヲ減少ス偽痘ニ於テハ此症ナシ

T 四 真痘ヲ発スルトキハ牛病ンテ食ヲ欲セス乳汁ノ分泌モ亦減ス偽痘ニハ此徴ナシ

八、中津への伝播について

「種痘新説」がいつ、どのような経路で辛島家に伝わったかは不明である。辛島家の痘瘡学は池田家の流れを汲むものであり、辛島父子が自ら長崎に赴いたとは考えにくいが、文政六年（一八二三）から長崎にいた中津藩の村上玄水がこの

ような訳書を写した可能性はある。玄水は文政九年（一八二八）、オランダ商館長スチュレル一行に長崎から小倉まで随行したこともあり、シーボルトとその周囲の人々の活動をよく把握していたと思われる。残念ながら、村上家には類似の写本は遺っていない。

また、日高涼台が文政一〇年（一八二七）に長崎を發つた後、肥後、豊後を経て、同一一年に伊予宇和島にしばらく逗留し、文政一三年（一八三〇）に大坂に赴いたことも、彼の訳書の普及経路として検討に値する。

いずれにせよ、辛島父子が城下町中津の「精徳堂」で、一七世紀に來日した戴曼公たいまんこうに遡る漢方系の天然痘治療を行いながら、蘭方医たちが検討している新しい接種法にも関心を向けていたことから、彼らの柔軟な知性と医師としての使命感がうかがえる。

【史料】

- ▲「牛痘新書」、有馬攝藏記、天保十一年〜弘化四年成立、嘉永三年（一八五〇）写（大阪大学適塾記念センター、九州大学医学図書館、京都大学富士川文庫、日文研宗田文庫、佐倉高校記念館鹿山文庫、鹿児島大学玉里文庫、内藤くすり博物館、究理堂、シーボルト記念館）。
- ▲「牛痘接法」、高野長英、成立年不明（『高野長英全集 第一巻』、高野長英全集刊行会編、第一書房、一九七八年、二〇五〜二四頁）。
- ▲「種痘新書」、日高涼台訳、自筆本、文政八年成立（長崎市シーボルト記念館蔵。『広島県山県郡医師会史』下巻、一一〇〜一二六頁）。
- ▲「種痘新説」写本、書写年不明、書写者不明、辛島医家旧蔵。中津市大江医家史料館所蔵。
- ▲高野長英全集刊行会編『高野長英全集』第一巻（医書）。東京、第一書房、一九七八年。
- ▲Goldschmidt, Heimmann Josef: Allgemeine Übersicht der Geschichte der Kuhpocken und deren Einimpfung als das sicherste und heilsamste Mittel zur gänzlichen Ausrottung der Menschenblattern. Frankfurt am Mayn: Behrens, 1801.
- ▲Goldschmidt, H. J. : Allgemeine beschouwing van de geschiedenis der koepokken, en derzelver inenting, als

het zekerste en heilzaamste middel ter geheele uitroeijing der menschenpokken. Amsterdam: Johannes Allart, 1802.

▲Nationaal Archief, Nederlandse Factorij in Japan, Inventaris nr. 236 (Dagregister 1822 november 26 -1823 november 20)

▲Nationaal Archief, Nederlandse Factorij in Japan, Inventaris nr. 237 (Dagregister 1823 november 20 -1824 december 7)

【参考文献】

- ▲青木歳幸・大島明秀・W・ミヒエル編『天然痘との闘い―九州の種痘』東京、岩田書院、二〇一八年。
- ▲徳川撰三「緒方洪庵門下の三蔵（緒方郁蔵・有馬撰蔵・伊藤慎蔵）について」『医譚』第二号、一九三八年、六〜一五頁。
- ▲織田毅「日高涼台研究序説―主に牛痘法普及における業績について」『鳴滝紀要』第二八号、二〇一八年、六三〜七〇頁。
- ▲蒲原宏「越佐種痘史の諸断面」『越佐研究』第一四集（一九五九）、四五〜五八頁。
- ▲古賀十二郎『西洋医術伝来史』長崎、形成社、一九七二年。
- ▲栗原福也「フォン・シーボルト来日の課題と背景」箭内健次、宮崎道生編『シーボルトと日本の開国近代化』、続群

書類従完成会、一九九七年、一五〇六九頁。

▲呉秀三『シーボルト先生―其生涯及功業』東京、吐鳳堂書店、一九二六年。

▲富田英壽『種痘の祖 緒方春朔』福岡、西日本新聞社、二〇〇五年。

▲西卷明彦「一九世紀初頭の日本における痘瘡対策」。『日本医史学雑誌』、第五九巻第二号（二〇一三年）、一六一―一六三頁。

▲沼田次郎「シーボルトの門人湊長安・美馬順三に関する若干の史料―出島商館長フロムホフの種痘実験をめぐる」、『シーボルト研究三・四合併号』、一九八五年、二二―三三頁。

▲日高訥児編輯・呉秀三校訂『日高涼台』神戸、日高訥児、一九三〇年。

▲広島県山県郡医師会史編纂委員会『広島県山県郡医師会史』山県郡医師会、一九九三年。

▲松木明知『中川五郎次とシベリア経由の牛痘種痘法』札幌、北海道出版企画センター、二〇〇九年。

▲宮坂正英「シーボルトの日本研究とその支援者としての美馬順三ならびに吉雄権之助」若木太一編『長崎・東西文化交渉史の舞台』上巻、東京、勉誠出版、二〇一三年、二九七―三二一頁。

▲吉田忠「日高涼台の蘭学」。東北大学日本文化研究所『日本文化研究所研究報告』第二三集（一九八九）、一一七―

一五〇頁。

▲Boomgaard, Peter: Smallpox and Vaccination on Java 1780-1860 – medical data as a source for demographic history. In: A.M. Luyendijk-Elshout et al. (eds.): Dutch Medicine in the Malay Archipelago. Rodopi, 1989, pp. 119-132 (Nieuwe Nederlandse bijdragen tot de geschiedenis der geneskunde en der natuurwetenschappen 35)

▲Boomgaard, Peter: Smallpox, vaccination, and the Pax Neerlandica, Indonesia, 1550-1930. In: Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde, Vol. 159 (2003), no. 4, pp. 590-617.

▲Hirsch, Albert: Das Philanthropin zu Frankfurt am Main. Frankfurt am Main: Waldemar Kramer, 1964.

▲Körner, Hans: Die Würzburger Siebold-Eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts. Leipzig: J. A. Barth, 1967.

▲Neuer Nekrolog der Deutschen. Dreizehnter Jahrgang, 1835, Theil 2, Weimar: B. Fr. Voigt, 1837.

▲Sachs, J.J.: Medicinischer Almanach für das Jahr 1837. Berlin: C. Heymann, 1837.

注

- 1 (明) 翁仲仁輯著『新刊秘傳痘疹金鏡録』(享保一十七年刊)、『池田獨美『重校痘科辨要』(文政四年刊)、『池田家秘書痘疹戒草』(写本、一冊、七五丁)、『池田家流痘瘡唇舌鑑図』(写本、彩色、一六丁)、『精得堂痘瘡良方』(写本、二七丁)、『戴曼公唇口訣』(写本、天保庚子夏写)『種痘新説』(写本、成立年不明、一四丁+表・裏表紙、二三×一六センチ) 辛島家五代辛島長齡(正庵、蕉庵、東溪。一七七九—一八五七) 辛島家六代辛島長徳(泰庵。一八一八—一八五九) 蒲原宏(一九五九)。
- 2 森田千庵の自筆本は一九五〇年代に貸し出された後、行方不明となっている。蒲原の論文のもとになったのは、蒲原自身が作製した写しである。
- 3 森田千庵については蒲原宏(一九五九) 参照。
- 4 (長崎にて) 一八三三年八月二四日(Tan Cock Blomhoffによるオランダ商館長日記)。(江戸にて) 一八二六年四月二三日、二六日、二七日(『NIPPON』一八八頁)。
- 5 蒲原宏(一九五九)、五四頁。
- 6 日高涼台の生涯については、日高訥児(一九三〇)、吉田忠(一九八九)、『広島県山県郡医師会史』(一九九三) および織田毅(二〇一八)を参照。
- 7 種痘書一卷、増日高涼台著作集(武田科学振興財団 杏雨書屋、乾六四八)
- 8 丙戌の誤りか。
- 9 織田毅(二〇一八)、六四頁。
- 10 種痘書一卷、増日高涼台著作集(武田科学振興財団 杏雨書屋、乾六四八)
- 11 吉田(一九八九)、一二五—一二七頁。
- 12 ダーフィズの履歴については、A. J. van der Aa: Biographisch woordenboek der Nederlanden (Nieuwe Uitgaf, Haarlem, Vol. 4, 1858, pp. 76f.)を参照。
- 13 Onderzoek naar de oorzaken en uitwerkselen der Variolae vaccinae,

- eene ziekte in de westelijke gedeelten van Engeland ontdekt, voornamlijk in het graafschap Gloucester, en aldaar bekend onder den naam van koepokken; door Edward Jenner [...] in het Nederduitsch vertaald en met een bijvoegsel vermeerderd door L. Davids, Haarlem: Loosjes, 1801.
- Goldschmidt (1801), pp. 111-124.
- Goldschmidt (1801), pp. 125-139.
- Johann Valentin Müller: Beweis, daß die Kuhpocken mit den natürlichen Kinderblattern in keiner Verbindung stehen, und also ihre Einimpfung kein untrügliches Verwahrungsmittel gegen die natürlichen Blattern seyn könne, Publikum zur Beherrzigung gewidmet. Frankfurt am Main: Jäger, 1801.
- Körner (1967), p. 274 (「Ich habe die Vaccine zuerst auf Japan eingeführt」)
- 松本明知(二〇〇九)、二一七—二八〇頁、三三三—三六八頁。
- Boomgaard (1989); ditto (2003), pp. 600f.
- 出島商館長日記 一八二〇年五月一三日(Nationaal Archief, Nederlandse Factorij in Japan, nr. 233)。
- 沼田次郎(一九八五)、栗原福也(一九九七)。
- 「Kagagawa」は何かの誤解によるものだと思う。
- この点に関する沼田および栗原の和訳は誤訳である。「de laatste [=美馬順三] speciaal zeide reeds en beschrijving daarover te hebben, en wilde na Amaya gaan, waar hij yernende gehoord te hebben bij de koeien pokken regeerde. Ik maakte hem echter opmerkzaam op de echte en onegte soort, en uit zijn discourses begreep ik, alsdat zijn ideeën ten dezen aanzien nog niet zuiver genoeg waren. Waarom ik hun voorstelde mij het boek eens te zenden, om na te zien。」
- 商館長日記 一八三三年三月一〇日。
- 商館長日記(一八三三年三月六日、七日、一〇日、一二日、一八日、二〇日)° Nationaal Archief, Nederlandse Factorij in Japan, nr. 236.
- 古賀十二郎(一九七二年)、四四六頁。

31 和訳は栗原福也（一九九七、二六頁）より。原文は NA, NFJ 552, p. 60.
 32 「stof」接種物質
 33 商館長日記、一八三三年三月七日。和訳は沼田次郎（一九八五、二四～二五頁）より。

「Zoo duidelijk als mogelijk gaf ik hun de nuttigheid te kennen, dat deze heilzame uitvinding aan 't menschedom te weeg bragt, en welk een grote naam zij zich zouden maken van de eerste te zijn geweest, die dit alhier in werking gebragt had.
 Eerstgenoemde betuigde van voornemen te zijn, wanneer hem de proef aan eenigen gelukt was, direct aan zijn Heer den Rijksraad zoude schrijven om eene vergunning overal in 't Rijk hetzelfde te mogen invoeren.

Expresselijk begeer ik de eerste proeven onder mijn oog, en het opzig van onzen Geneesheer geschiede, opdat ik zelf van den uitslag verzekerd zoude zijn, alzoo soms, en veelal, op hume berigten niet zeer te vertrouwen is.

Uit die reden heb ik ook geen stof willen afgeven, schoon mij daar genoeg om gevraagd is; om door verkeerde behandeling, en daardoor ontsane vooroordeelen dit heilzaam middel niet vrugtelooos te maken. Beloofde hun de nodige lancetten, als de schepen kwamen de stof zelfe, zoomede beloning voor de voorwerpen die met goed gevolg gevaccineerde waren als ook aan hun, als zij hetzelfde in beweging bragten, en reed bewijzen van een zeker getal zoude gegeven te hebben. Ik hoop dat dit reusereen mag。」(NA, NFJ 236, f. 17)。

34 商館長日記、一八三三年三月一八日、二〇日 (NA, NFJ 236, f. 18-19)。
 35 「ルトンマントの生涯にこころは、『Neuer Nekrolog der Deutschen』(一八三五) および Nekrologische Erinnerungen an deutsche Aerzte aus den Jahren 1835 und 1836 (Sachs 1837, pp. 7-9) を参照。
 36 Dissertatio Momenta quaedam ad comparationem pathologiae humoralis cum nervosa. Praes. Ioh. Dan. Metzger [...] Autor et respondent Heymann Ios. Goldschmidt. Regiomonti, Typis G. L.

37 Hartungii, [1780]. (18pp.)
 一八〇四年に財閥ロートシルト家の基礎を築いた銀行家 Mayer Anschel Rothschild により創設された「Philanthropin 博愛学校」はドイツで最も有名なユダヤ人学校となった。ユダヤ人でない子どもも受け入れられた。詳細については Hirsch (1964) を参照。

38 『新約聖書』の「ルカによる福音書」に登場する古代ユダヤの預言者「洗礼者ヨハネ」。

39 「De Arzenijkunde is eene practicale, eene ondervindingsleer, dat is, zij berust op sinlijke beschouwing en waarneeming der natuur。」(Goldschmidt, 1802, V)

40 富田英壽（二〇〇五）および西卷明彦（二〇一三）を参照。
 41 億川撰三（一九三八）、四五頁。

42 本論文では大阪大学適塾記念センター所蔵の写本を利用する。
 43 本論文では大阪大学適塾記念センター所蔵の写本を利用する。
 44 本論文では大阪大学適塾記念センター所蔵の写本を利用する。

45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
 45 Goldschmidt (1802) 五〇七頁「牛痘新説」一〇四。
 46 Goldschmidt (1802) 三四〇一頁「牛痘新説」五〇九。
 47 Goldschmidt (1802, pp. 41-50) 「牛痘新説」一〇〇一四。「ルトンマント」が独自にまとめた三章は「牛痘接種後の日毎の変化に関する初の報告だった」。

48 蒲原宏（一九五九）、五四～五八頁。
 49 『広島県山県郡医師会史』下巻、一一〇～一一六頁。
 50 『高野長英全集 第一巻』、二〇七頁。
 51 解説の間違ひ。

[表紙]

種痘新説

[一丁表]

§3 Echte en onechte Koepokken bij het Rundvee

Het komt zeer veel daar op aan, dat men, door nauwkeurige waarnemingen en zekere kentekens, de echte Koepokken van de onechten bij de Koeijen onderscheide.

De verdienstvolle Dr. JENNER in Engeland, wendde in het geheim alle mooglijke moeite aan, om eerst deze krankheid bij het Vee nauwkeurig te onderzoeken, eer hij de proeven derzelve bij de menschen in het werk stelde. Na onvermoeide zorgvuldigheid en nauwkeurigheide - welke deze gewichtige ontdekking voor de menschheid ook verdient - bemerkte hij echte en onechte Koepokken bij het Vee. Hij geeft de volgende kentekens op, om ze te onderscheiden:

1. De *onechten* hebben die blauw- of loodachtige verwe niet
2. De *onechten* zijn met geen roosachtigen ontstocken rand omgeven.
3. De *onechten* veranderen schielijk in eenen droogen schurft. Bij de *echten* integendeel vindt deze verdroging eerst later plaats, nadat de ontsteking verdwenen is.
4. Bij de *echten* wordt het vee ziek, het verliest den eetlust, en de melk; het welk bij de *onechten* niet gevonden wordt.

Zulke onechte Koepokken ontstaan voornamelijk in het voorjaar, wanneer de Koeijen in menigte naar de Vee-markten gedreven worden. De Landlieden laten dan dikwerf, uit gewinzucht, des morgens, voor dat de Koeijen uit de stallen gedreven worden, het melken na, op dat de Uijers een groter en schoner aanzien mogen hebben, en dezelve uit dien hoofde duurder verkogt worden. Een gedurig gevolg daar van is, dat eene ontsteking plaats vindt, die zich in een uitslag aan de Tepels en Uijers eindigt, en den Melker eene mislijke krankheit aan de handen, armen en schouderen mededeelt. Menigmaal wordt daarmee ook het voorhoofd besmet; wijl de knecht zich daarmee, bij het melken, aan den Uijer leunt. Deze krankheid kan zich bij een en denzelfden perzoon herhaalde malen openbaren;

牛痘牛乳房上ニ発スル者ノ見證

一 真痘ニ非ル者ハ青或鉛様ノ色ナシ

二 真ニ非ル者ハ其周圍ノ薔紅色ニナリテ焮痛スル事ナシ

三 真ニ非者ハ速ニ乾涸シテ痂ト變ス真ノ者ハ反_レ之シテ焮痛已ニ消シテ后ニ始テ乾涸ス

四 真ノ者於テハ其牛病シテ食ヲ欲セス乳汁ヲ減ス真[痘]ニ非ル者ハ此證ナシ

此ノ如キ證ノ真ニ非ル痘ハ別シテ春時ニ多ク牝牛ヲ市ニ率キ出ルトキニ發ス其誤ハ利ヲ貪ル者[一丁裏]トモ牛ヲ賣ルニ朝乳絞ル事ヲ止メテ市ニ出テ其乳房ノ脹リテ美ニシテ好價ヲ得ン事ヲ欲ス

故ニ乳汁滯リテ此ヨリシテ焮痛ヲ發シ終ニハ乳房乳頭等ニ瘡ヲ發シテ乳汁ヲ取_{【(中食)】}下賤ノ者牛肘等或額ニ傳染ス其額ニ傳染スルハ額ヲ乳房ニ觸ルヲ以テナリ此瘡ハ一人ニシテ數廻發スレトモ嘗テ痘ヲ坊クノ功ナシ

nooit echter wordt zij een behoedmiddel tegen de pokken.

Nog eene soort *onechte Koepokken bij het Vee*, heeft haaren oorsprong van eene bijzondere soort Vliegen, die in de Tepels der Koeijen bijten of steken. Ook deze soort is niet in staat, de pokbesmetting voortekomen.

§14 Echte en onechte Koepokken bij menschen

[...] Door de volgende tekenen laten zich de *onechte Koepokken* van de *echten* bepaaldelijk onderscheiden.

1.) De waare en echte Koepokken komen, na de inenting, langzaam ten voorschijn; zo dat men dikwerf tot den derden dag nog onzeker is, of de inenting gevat heeft of niet.

Bij de *onechten* integendeel bespeurt men eenen snellen voortgang. De inentingsplaatsen zijn reeds den tweeden dag ontstoken.

2.) Bij de *echte* Koepokken bemerkt men altoos tusschen den zesden en twaalfden dag eene, nu sterkere dan zwakkere, koorts, 't welk tot bewijs verstrekt, dat nu het gift ingezogen is, en het gansche lichaams-gestel aangegrepen heeft.

Bij de *onechten*, intusschen, wordt of in 't geheel geen spoor van eene koorts ontdekt, of 'er onstaan reeds op den tweeden dag, met de ontstokene inentings-plaatsen, ligte koorts-achtige bewegingen, als gevolgen van een plaatslijk kwetzuur, die even zoo spoedig weer verdwijnen, zonder dat het geheele lichaams-gestel 'er in deelt.

3.) Bij de *echte* Koepokken ontstaat, om de Ent-puisten, tusschen den agtsten en elfden dag altoos eene levendige peripherische roodheid, die naderhand, even zoo langzaam, als zij ontstond, wederom afneemt.

Bij de *onechten* wordt deze karakteristieke roodheid of in 't geheel niet bespeurd, of zij verschijnt reeds op den derden en vierden dag – zij is minder levendig en verdwijnt ook schielijk weder.

4.) De verloop der *echte Koepokken* duurt ten minsten veertien of vijftien dagen.

De *onechten* integendeel zijn menigwerf reeds op den zesden dag verdroogd.

5.) De *echte Koepok* heeft altoos eene eigenaartige gedaante; zij krijgt, naamlijk, met den vijfden dag bepaaldelijk in het midden eene deuk (*delle*), terwijl de randen zich daartegen steeds meer en meer verheffen.

Bij de *onechten* wordt integendeel deze regelmatige form niet waargenomen.

猶一種ノ偽牛痘ヲ発ス事アリ其原因ハ一種ノ蠅アリテ乳頭ヲ螫シ吸フヨリ発ル此等ノ種類ノ瘡ハ皆痘瘡傳染ヲ垢クノ功ナシ〔二丁表〕

〔表題無し〕

牛痘人身ニ接シテ発スル者ノ真偽ノ微候此下ニ擧ル微候ニテ人身牛痘ノ真偽分明ニ分別セラ

第一 真ノ牛痘ハ接傳ノ后徐々ニ発見ス故ニ毎接傳ノ后三日ヲ経テモ其感セシヤ否ヲ決定シカタシ真ニ非ル者ハコレニハンシテ速ニ発作シ接傳ノ痕第二日目ニ直ニ焮痛ヲ発スルナリ

第二 真ノ者ハ接后第六日より第十二日マテノ際ニ於テ時ニ劇シク時ニ微ナル熱ヲ発スコレ即其種子ヲ體中ニ吸收シ混身ニ順流スル〔二丁裏〕ノ微ナリ

真ニ非ル者ニ於テハ然ルニ或ハ全ク熱状ヲ見サス或ハ已ニ第二日ニ其接痕ノ焮痛ト共ニ微ニ熱状ヲ発シテ打撲處ノ如^{〔虫食〕}其熱ハ速ニ消散シテ惣身に蔓ル事ナシ

第三 真牛痘ハ第八日より第十一日マテノ際ニ於テ接痕ノ周圍ニ常ニ治潑タル紅輪ヲ発ス此紅輪其后其初ニ起レルトキノ如クシ徐々消散ス真ニ非ル者於テハ此紅輪全ク発ル事ナク或ハ第十三四日ニ已ニ發見シ又消散スル事モ甚速ナリ〔三丁表〕

第四 真牛痘ノ日数ハ少クトモ十四五日ナリ真ナラサル者ハコレニ反シテ毎ニ第六日ニハ乾固ス

第五 真牛痘ニハ常ニ定リノ形状アリ即第五日ヲ以テ瘡ノ中点少シ凹下シ其周圍ハ反テ次第々々ニ高起ス不真ノ者ハ反^レ之テ其形状ヲ為ス事ナシ

6.) De Materie der *echte Koepokken* blijft dikwils tot den elfden dag water helder en klaar.

De Materie der *onechten* daarentegen wordt aanstonds bij de forming der Pokken etterachtig.

7.) De *echte Koepokken* ontaarten nimmer in sterk-vloeiende en lang-aanhoudende zweeren.

Het welk echter bij de *onechten* menigmaal het geval is.

Dr. JENNER geeft, in zijne voortgezette waarneemingen, de volgende bronnen op, waaruit onechte Koepokken, die in geen deele voor eene toekomstige besmetting beveiligen, kunnen ontstaan.

1.) Wanneer men met gift inent, 't welk uit puisten aan een Koei-uijer genomen wordt, die geen specifieke Koepokken-gift bevatten. – (Ik heb boven uit de Jennersche schriften de kentekens opgegeven, waardoor men bij de Koeijen de echte Pokken van de onechten onderscheiden kan.)

2.) Door Materie, die wel oorspronkelijk specifiek gift in zich bevattende, maar door vuiligheid of andere, weinig in het oog vallende oorzaken, eene verandering ondergaan, of eenen lelijken reuk aangenomen heeft. (Eene echte en goede Koepokken-materie toch, moet geen den minsten reuk van zich geven.)

3.) Door Materie van eene Koepok in eenen overrijpen toestand, (dat is, wanneer de materie niet mehr water-helder maar reeds etterachtig is.)

Bij deze van Dr. JENNER aangevoerde bronnen, voeg ik nog de volgende:

4.) Wanneer uit de Koepokken van een Perzoon, die reeds voorheen de Kinder pokken gehad heeft, geënt wordt.

Dr. PEARSON³ heeft wel door zorgvuldige Proeven bewezen, dat de inenting met Koepok-gift bij Perzonen, die reeds de Kinderpokken gehad hebben, geenzins de eigenaartige ziekte voortbrengt. Intusschen kunnen toch bij zulke Perzonen, door de inenting met Echt-koepok-gift, plaatselijke Pokken voortgebracht

第六 真牛痘ノ種子ハ毎ニ第十一日マテ清水ノ如クニテ存在ス不真ノ者ノ種子ハ発瘡ノ初メヨリ膿状ニアリ〔三丁裏〕

第七 真牛痘ハ嘗テ強キ潰流シ長患スル^ニ潰瘍ニ変スル事ナリ^シ

真ニ非ル者ハ毎ニ右ノ患ヲ致スナリ^シ名医エンネル¹自ノ經驗ヲ以テ此下ニ擧ル所ノ痘^{【防】}ヲ坊クノ功ナキ非真ノ牛痘ノ発スル本源ヲ^{【虫食】}■²セリ

第一 若人真ノ痘種ヲ合マサル牛乳房上ノ瘡ヲ取テ傳接スルトキハ発之牛痘ノ真偽ノ見察ノシヤウハ已ニ上ノコレヲ擧タリ〔四丁表〕

第二 ニハ其源ハ真痘種タリト雖或ハ不際ニ汚シ或他少シノ事ニテモ其種子ヲ變性セシシテ或ハ悪キ真ノ物ヲ以テ薰シタルモノニテ傳接スルトキハ発シ真ノ痘種ハ少シモ香臭ナシ

第三 若シ熱シ過セル種子ヲ以テ接スルトキハ発ス熱シ過ストハ清水状ノ種子変シテ足ニ膿状ニ至ルモノヲ云右エンネルノ經驗ナリ右ノ外ニ我尚下ノ條ヲ加ヘ擧ン

第四 若シ已ニ真ノ痘種ニ患タル者ニ牛痘ヲ接〔四丁裏〕セルモノヨク種子ヲ取りテ接スルトキハ発之名医ペアルソン至テ密ニ試テ后人ニ示シテ曰已ニ真ノ痘ヲ患タル者ニ牛痘ヲ接シテ其種子ヲ取りテ接スルトキハ決シテ真ノ牛痘ヲ発スル事ナシ然レトモ其ノ已ニ真牛痘ヲ患タル者ニ於テ真ノ牛痘ノ種子ヲ用テ接スレハ瘡ヲ発スル事ナク然リト雖其種子ノ性質變シテ真ノ牛痘ヲ発セス何ントナレハ其人ノ體中ニ含ム所ノ痘ヲ感

1 Edward Jenner (1749–1823)

2 「示」(森田本)

3 George Pearson (1751–1828)

worden, welkers materie echter de oospronglijke soortelijke eigenschap des Koepokken-gifts even daardoor geheel verloren heeft; dewijl dezelve in een lichaam voortgebracht wordt, 't welk de vatbaarheid vor de Kinderpokken reeds benomen is. Het in menschen voortgebrachte echte Koepok-gift behoudt zijne specifieke eigenschap door alle generaties heen. Het moet echter altoos in zulke lichamen voortgeplant worden, waarin het steeds de vatbaarheid voor de natuurlijke Pokken, – met welke het zich, om zoo te speken *neutraliseren* kan, – aantreft. Wordt het in tegendeel voortgeplant in een lichaam, 't welk deze vatbaarheid, door de voor afgegaane natuurlijke, in ingeënte waare Kinderpokken reeds verloren heeft, zoo verliest het zijne specifieke kracht; en zal, zoo wel in deze, als volgende subjecten, een valsch soort van Koepokken – welke niet meer de eigenschap bezitten om tegen de natuurlijke te beveiligen – voortbrengen.

§12 Inentings-methode der Koepokken⁴

Wil men deze weldadige inenting allereerst in eenen Oord invoeren; zoo moet men het gift, uit den naastgelegenen Oord, daar deze inenting, met goed gevolg ingevoerd is, komen laten. Men wende zich deswegen tot ervarenen Mannen, van wier getrouwheid en ijver, om tot welzijn van het menschdom te zijn, men nauwkeurig overtuigd is. 'Er is in dezen de uiterste voorzichtigheid aan te bevelen. Ook moet zulk een, die voornemens is, deze heilzame inenting allereerst in eenen Oord intevoeren, de echte *form* en *het beloop* der Koepokken recht kennen, en bij zijne eerste Inentelingen zeer nauwkeurig daarop letten, of 'er ook wel eene waare karakteristieke Koepokken-entpuist ten voorschijn kome, ten einde 'er geen gelegenheid terverebreiding van valsche en onechte Koepokken gegeven worde.

Men bewaart het gift gemeenlijk tusschen twee kleine glasplaatjes, zijnde in het midden van het eene, eene kleine holrontheid (*concauiteit*) ingeslepen. In deze verdieping doet men een klein weinig met versche materie door en door bevochtigde boomwolfe, of Engelsche charpie. Deze beide glasplaatjes moeten nauwkeurig en vast op alkanderen sluiten; waarom het goed is, dat zij op de eene kant dof geslepen worden;

シ受ルノ質已ニ真痘ニテ奪ワレアル故ナリ
[五丁表] 人体中ヨリ出タル真ノ牛痘種子
ハ其一種ノ性能ハ幾傳接ニテモ變セス持ツ
ナリ然レトモ常ニ未痘ノ人ニ於テセスンハ
アル可カラス已ニ自然ノ痘瘡ヲ患タル者及
接痘法ヲ行テ其痘毒ヲ受ク可キ質ヲ失セル
者ノ體ニ傳ヘテ出来タル牛痘ノ種子ハ固有
ノ能力ヲ失フ終ニ偽痘ノ種子ト變シテ痘瘡
ヲ受ク事功能ヲ為スコトナシ

牛痘傳接ノ奇法

此ノ牛痘傳接ノ奇法ヲ始テ國ニ傳ヘント欲
セ[五丁裏]ハ必ス其近國ノ已ニ此ノ法ヲ
傳リ功能著シク行ワル所ヨリ其種子ヲ將來
セスンハアラス然ルニ其術ニ委シキ人ヲ得
トキハ國人ノ為トナル事決セリ又其ノ上ニ
モ其始テ此法ヲ國中ニ傳ル人ハ其瘡ノ真ノ
形狀及其成リ行ノ容軀ヲ正シク誌リテ其ノ
最初ニ傳接セル患者ニ仔細ニ心ヲ用テ真ノ
痘ヲ發ルヤ否ヲ察シ偽痘ノ流行ノ源ヲ發カ
スルヤウニスヘシ

常法其ノ種ヲ貯ルニハ二片ノ硝子板ヲ用ヒ
其[六丁表]心ヲ少シク凹ニ磨リ其中ニ種
液ヲ少許リヲ木綿或繖糸等ニ浸シテ内ル俱
此両片ノ硝子板ハ至密ニ合セシメスンハア
ラス故ニ其周縁ノ處^(虫食) 砂磨リスルヲヨシ
トス其兩片ヲ至密ニ合シテ外氣ヲ^(閉)坊ク為
ニ真上ニ細製ノフエルニス⁵ (物ヲヌルモノノ膠
漆ノ屬) ヲ塗リテ真上ヲ特牛ノ膀胱ヲ以テ同

4 Goldschmidt (1802)、三四～四一頁、「牛痘新説」五～九丁。

5 オランダ語 vernis、ニス

vervolgend bindt men ze stijf te zamen. Ter weering van de buitenlucht, doet men 'er een fijn vernis, (*Colophonium*) of zegel-lak op, en overtrekt ze met eene week gemaakte zachte kalfsblaze of met eene andere geschikte, klevende sustantie. Men opent dezelve niet eerde, dan bij de inenting, wanneer men de materie weder uit de boomwolfe perst en aan de punkt van het Lancet of de inentingsnaald brengt.

Men maakt in 't midden van ieder boven-arm onder de *Delta-muskel drie*, een halven duim van elkaer verwijderde, ent-steeken, in de gedaante van een drie-hoek, of *vier* in de gedaante van een vier-hoek. De steeken moeten geheel plat onder het bovenhuidje gemaakt worden, ten hoogsten twee Linien diep, zoo dat, indien 't mogelijk is, eerst eenige secunden na den steek een droppeltje bloed ten voorschijn kome.

Dr. WODWILLE geeft nog het volgende voorschrift: „wanneer men met vloeibare materie“, zegt hij, „inent, zoo moet men het Lancet bijna recht-hoekig aan het huid brengen, op dat de materie op de punt van het instrument zakke, warmede men dan, in deze houding, het bovenhuidje herhaalde malen voorzichtig opscheurt, tot dat men de eigentlijke huid bereikt, en het instrument zich met bloed verft. Deze manier heeft de voorkeur boven de gewone steeken, en ik hebbe ze geschikter en doelmatiger dan de andere gevonden.“ Het is zeer goed, dat voor de inenting, de arm in laauw water gebaad, of met warme Flenel gewreeven worde.

Heeft nu het gift bij eenige Perzonen gevat, en zijn daarop de echte Koepokken ten voorschijn gekomen; zoo moet men, zo veel mogelijk, op de bewaring van het gift bedacht zijn. Men laat, indien het mogelijk is, bij geen sujet deze, voor het menschedom zoo weldadige, vochtigheid nutteloos verdrogen. Men ent vervolgens, daar het geschieden kan, steeds me versche materie van arm tot arm in, nadien deze manier van inenten nooit, of ten minsten zeer zelden mislukt.

Het beste tijdstip om uit een entpuist verder inteën, is, wanneer de laagte (*delle*) in 't midden nog niet geheel verdweenen is, en de materie in de verhevene randen, nog dun en waterhelder is. Is echter de

封シ或ハ冑ニ適フ粘糊ス^[虫食]■葉ヲ以テ同封シ
用ルトキハ當テ始テ開キ其液ヲ再ヒランセ
ト⁶或傳接ノ為ニ作リタル針ノ鋒ニ染シム
ルヘシ[六丁裏]

傳接ノ法ハ臍上ニ其鍼ヲ用テ鼎足狀ニ三處
三角ニ其間三指半徑ヲ隔テ接ス若四鍼ヲ接
スル者ハ四角ニ形ニ接ス其鍼ヲ刺ス事ハ皮
下ヲ横サマニ刺スヘシ其深サヲ二^[虫食]ニ過
ナシムヘカラス能ス可クハ一二秒ノ后始テ
一二滴ノ血ヲ見ルヤウニナス可シ

名医ウートウ井ルレ曰若シ人ノ流動シテ種
液ヲ以テ接スルトキハランセトヲ堅ニ執テ
皮上ヲ數廻搔キ破ルヤウニシテ表皮下ニ達
シテ刀鋒ガ少シク血ニ染ムニ至ルヘシ然ル
トキ流動ノ種子[七丁表]其鋒尖ニ流レ行
テ皮下ニ徹ス此法ハ諸ノ常尋常ノ法ニ勝レ
リ傳接ノ以前ニ其臍ヲ溫湯中ニ浴シ或暖メ
タル巾ヲ以テ摩スル事甚好シ

若シ傳接ノ后真ノ牛痘發見スルトキハカヲ
盡シテ其種子ヲ取り貯ル事ニ心ヲ用スンハ
アラス必ス此人間ニ大功アル液ヲ無益ニ乾
個セシムル事ナカレ若シナル可クハ常ニ此
新治ノ種液ヲ以テ臍ヨリ臍ニ傳スヘシ此ノ
傳接ノ法ニ申ルトキハ[七丁裏]嘗テ誤ル
ナシ

種子ヲ取り傳接スル為ニ最上ノ時分ハ其瘡
ノ中心凹ニシテ周圍腫脹シ其中ニ水ノ如キ
清液ヲ含メルノ時ナリ若シ其ノ液已ニ^[粘稠]■

6 オランダ語 lancet、刃針

7 「分」(森田本)

materie reeds taai en etterachtig geworden; zoo is zij tot verdere inenting van geene nuttigheid meer. Zulk eene etterachtige materie kan nog wel plaatselijke zweertjes ten voorschijn brengen, die echter geene zweeren van het karakteristieke der Koepokken openbaren, en dus ook voor eene toekomstige pok-besmetting in geen deel beveiligen kunnen. – De 6de, 7de, 8ste en 9de dag, na eene welgelukte inenting, zullen dus de beste dagen ter opvang van het gift – tot verdere inenting – zijn. Daar, intusschen, eenige ent-puisten zich in haaren loop dikwerf een of twee dagen vertragen; zoo kan uit zulken nog op den 10den en 11den dag ingeënt worden. Indien nu, onaangezien alle nauwkeurigheid en voorzichtigheid, evenwel de eerste inenting mislukken mogt; zoo moet men zich niet laten afschrikken, om dezelve, na verloop van eenige dagen, te herhalen. 'Er heeft menigmaal, al zijn ook alle overige omstandigheden wel, bij een subject eene ogenblikkelijke, niet in den zin vallende, oorzaak plaats, die het vatten der inenting verijdelt.

Veele Doctoren hebben opgemerkt, dat bij kinderen, welker huid-organ eene scherpigheid openbaarde, de inenting niet zoo ligt vatteden, als bij zulke, die eene geheel zuivere huid hadden. Ik hebbe zulks alleen maar bevestigd gevonden bij Zuigelingen. Bij meer gevorderde subjecten scheenen mij de huid-scherpigheden geen groten invloed op de Inenting te hebben. Ook is, mijns erachtens, eene onmerkbaar kampachtige te zamentrekkin der inzuigenden huidvaten, juist ten tijde der inenting, dikwils eene oorzaak van het mislukken derzelfde.

Het gebeurt menigmaal, dat van 6 of 8 ent-steeken, slechts *éénigen*, of in 't geheel maar *één éenige* ent puist ten vorschijn komt. Dit verontruste de ouders in 't minste niet. Het is genoeg, wanneer slechts *één* steek beklijft, en slechts *één* karakteristieke Koepok, haaren echten verloop gehad heeft. Waren wij vooraf overtuigd, dat ieder ent-steek vatten zou, dan konden wij ons bij iedere inenting slechts met *één éenigen* steek vergnoegen.

Men kan ook de sinet-stoffe gedroogd bewaren: of tusschen 2 glaas-plaatjes; of op lapjes en Engelsche charpie (pluksel), of men

ニナリ膿状ニ変スルトキハ其ノ種子已傳接ノ能力ヲ失ス此ノ膿ニナレル種子モ亦一ノ潰瘍ヲ発ル事ヲ能フ然レトモ其ノ真ノ牛痘ノ能力ヲ失スル故ニ真牛痘ヲ痘ヲ發スル事不能事是ヲ以テ真ノ痘瘡ノ傳染ヲ坊クノ功ナシ傳接后六七八九日ノ間真痘ノ種子ヲ取リテ再[八丁表]傳ニ用ル為ノ最上ノ時ナリ然ルニ證ニヨリテ一兩日瘡ノ進行ノ遲滯スル者モアルニ由リテ十日十一日ニ至テモヨキ者アリ心ヲ用テ細密ニ傳接ノ法ヲ施ト雖初ノ傳接功ナキ事アルニヨリテ必ス數日ノ后施ス事ヲ厭フ不可毎ニ惣テ少シモ傳接ノ坊ヲナスノ著シキ同ナシト雖最微ノ固アリテ之ヲ坊クル事アリ

衆医皆以為ク皮上ニ竦ノ毒瘡ヲ發セル小兒於テハ皮上清キ兒ヨリハ傳接ヲ感シ難シ但シ正皮上ノ全ク清キ事ハ乳子ニ於[八丁裏]テノシコレヲ定カニ見ル多クノ經驗ニヨリ見ルニ皮辛竦毒ハ傳接ノ大害ヲサス但隱微ノ掣攣皮上ノ吸尿管ニ在ルヨリテ接痘ノ害ヲ為スナリ

第六或八日ニ至テ毎ニ僅ニ一二ノ接痕上
 ■^[虫食]ノ小瘡狀ヲ為ス事アリコレ驚クニ足カ
 ■^[虫食]ス只一ノ真牛痘ヲ生シテ其真症候ヲ見
 ■トキハ十分ナリ是ニ固テ若シ毎接痕ニ感受スル事ヲ決得ルナラハ一人一處ニシテナナルヘシ[九丁表]

其種子ハ或ハ二片硝子^板救間ニ滴著セシメ或ハ小片巾或ハ水綿花絲暗危利亞⁸ 繖絲ニ膿

8 Anglia、イギリス

bevochtigt boomwollen draden met etter, laat ze drogen, en bewaart ze in dicht geslotene glazen. Voor de inenting wordt nu deze gedroogde materia met een weinig speekzel of koud gedistilleerd water bevochtigt, en op het Lancet gebracht. Met damp, of zelfs kokendwater de materie week te maken, vin ik niet raadzaam, wijl daardoor het vlugge besmettende gedeelte des gifts, ligtelijk kon verloren gaan.

Men kan ook door kleine van 4 tot 6 Linien lange insijdingen, in welken met etter bevochtigde wolle draaden gelegd worden, inenten; of door middel van een Spaansche-vlieg¹⁰ -pleister. Intusschen is de manier, om het gift onmiddelijk door een Lancet-steek bij te brengen, verre de zekerste, en, wanneer het met de vereischte voorzichtigheid gedaan wordt, het minst smertelijk. Het is hoogstnodig, na iedere inenting, wanneer men niet aanstonds tot andere inenting overgaat, de punten der Lancetten zorgvuldig te zuiveren van al het, daar nog aanklevende, gift, wijl 'er zich anders ligtelijk roestvlekken kunnen aanzetten, die bij een toekomstige inenting, eene te grote prikkeling konden veroorzaken.

ヲ浸シテ乾涸セシメテ硝子板間ニ密封ス傳接ヲ行フノ時ニ當テ先ツ之ヲ唾津或蒸露製冷水ヲ以テ潤^潤和シテ刀上ニ滴スヘシ沸湯ノ蒸氣或ハ^{湯ヲ以テ}種子ヲ潤ス事ハ宜シキニ適ハス其故ハ溫氣ニヨリテ種子ノ揮發^{揮發}ノ部分ヲ^散散セシムルナリ

傳接ヲ行フニハ或四分ヨリ六分至ル長サノ小割ヲ皮上ニ作り種子ヲ以テ潤シタル綿花絲^{九丁裏}ヲ其上ニ傳テ小キ發泡ヲ為シテ其痕上ニ傳接ス但シ直ニランセト¹¹ヲ以テ傳接スル事最モ勝レリトス且ツ此法ヲ心ヲ用テ行フトキハ痛楚モ^少最少シ若シ人ノ相繼テ直^ニ傳接スルニ非ルトキハ每接センセ^ト鋒ヲ仔細ニヌグヒ溫メテ種子ノ余リノ糊著セルモノヲ¹²去ル事ヲ要ス否レハ其刀鏑ヲ生シ易シ其鏑^ニ児ニ接スルトキハ皮中ニ止ルトキハ痘^{トキニ}ノ發スル^{トキニ}臨テ甚シキ刺激ヲ為スナリ^{一〇丁表}

9 文脈を参考に補った。

10 青斑猫 (Lytta vesicatoria)

11 オランダ語 lancet、刃針

12 去

§13 Het beloop der Koepokken bij menschen, na de inenting, door een Lancet-steek.¹³

Om den 2den dag na de inenting, bemerkt men roode puntjes, bijna gelijk aan de vlooi-steeken, op welke men de zeer kleine plaats des steeks ziet. Dikwerf ziet 'er de steek, op dezen dag, nog als een gewoone uit, en wordt op den volgenden dag eerst rood. Zomtijds openbaart zich de eerste roodheid ook eerst op den 4den of 5den dag, en aan den eenen steek eerder, dan aan den anderen. (Tweemaal bemerkte ik, dat de inenting juist daar mislukte, waar reeds op den 2den dag alle ent-steeken rood verscheenen, op den 3den en 4den dag verdwenen deze roode puntjes gezamentlijk, en 'er kwam in 't vervolg niets weder te voorschijn. Daar ik integendeel bij eenen langzamen gang, wanneer de ent-steeken zich eerst op den 3den dag, als roode ontstokene puntjes vertoonden, bijna altijd de schoonste ent-puisten zag volgen.)

Derde dag. Als de vorige. Zomtijds reeds een fijn knopje op de plaats des steeks. (Zomtijds vertoont zich dit kleine knopje, zonder dat het roode puntje vooraf gegaan is.)

Vierde dag. Een klein bleek-rood knopje op iederen gevatteden ent-steek. (Zomtijds blijft dit knopje heden nog zonder alle roodheid.)

Vijfde dag. Het knopje iets groter en aan de spitse ingedrukt, en de randen dus verhevener. Wanneer men dit ziet, kan men bepaaldelijk zeggen, dat de inenting gevat heeft. Bij menigen Inenteling bemerkt men nu reeds eene geringe algemene werking op het lichaam, bij voorbeeld, eene bleeke gezichts-kleur, hitte in de handen, onrustigen nacht zachten zweet. (Het is echter toch zeer zelden, dat men reeds op dezen dag koorts-achtige bewegingen bespeuren zou. Alleen bij zeer gevoelige en prikkelbaare subjecten vindt dit wel eens plaats.)

Zesde dag. De ent-puisten groter, De randen verhevener. Gevolglijk ook in 't midden de induiking duidelijker.

Zevende dag. De ent-puisten bevatten reeds eenige Lymphe (helder vocht) in zich, en hebben een hel-rood, bijna doorschijnend aanzien; aan de randen is de roodheid op 't levendigste. (Ik heb dikwils reeds op den zesden dag Lymphe uit

牛痘鉋鍼ヲ以テ種スル者ノ經過ヲ論ス

人身ニランセトヲ以テ接シテ后ノ牛痘ノ運行接后第二日ニハ接痕小紅点ヲ發シテ蚤螫痕ノ如シ又毎ニ此日ニ於ハ只尋常ノ小刀痕ノミアリテ次ノ日至テ始テ紅点ヲ發スル事アリ時トシテハ又第四日第五日ニ至テ紅ヲ發シ或ハ一痕他ノ諸痕ニ先ツツテ發スル事モアリ我又第二日已ニ紅ヲ發シ第三四日ニ至テ悉消失シ以後再ヒ何モ發セスシテ傳接ノ功空シカリシ事ヲ見タル事二次アリ然ルニ我運行ノ徐ニシテ第三日ニ始テ紅ク發スル者ハ反テ常〔一〇丁裏〕ニ傳接ノ全功ヲ奏スルヲ驗ス

第三日 始前日時トシテハ已ニ微小ノ腫ヲ傳痕上ニ發スル事アリ時トシテハ此小腫未紅点ヲ見スシテ已ニ發スルモノアリ

第四日 已ニ感受セル痕毎ニ淡紅色ノ小腫ヲ發ス時トシテハ此小腫此日ニ至テ尚未紅色ナキ事アリ

第五日 其小腫漸大キクナリ其接痕ノ處少シク凹陷シ周圍腫脹ス若人此ノ候ヲ見ルトキハ傳接已ニ感受セリト決シ言フ能フ事多人ヲ傳〔一一丁表〕接セル中ニ於テ此時惣身ニ種子ノ力ノ及フモノヲ見タリ即顔色青サメ牛〔五〕心煩熱シ夜寢安カラス微汁出者ノ症ナリ然レトモ第五ノ日ニ如此ノ熱狀ヲ發スル事至テ稀ナリ但甚知覺ノ尖ク刺激シ易キ生質ノ兎ニ此症發スルナルノミ

第六日 接痕弥大キク其周圍強腫脹シ中点ハ隨テ著シク凹陷ス

第七日 瘡中已ニ小許ノ清液ヲ生ス其周圍ハ始ント透明ニシテ紅ナル色ヲ發ス此紅色ハ此日ヲ〔一一丁裏〕極美トスル事我毎時第六日ニ已ニ種子ヲ取りテ傳接セシ事アリ

13 Goldschmidt (1802), pp. 四一〜五〇頁、「牛痘新説」一〇〜一四丁。ゴルトシュミットが独自にまとめた一三章は、牛痘接種後の日毎の変化に関する初めての報告だった。

de ent-puisten ter verdere inenting genomen.)

De agtste, negende, tiende en elfde dag. De ent-puist neemt steed meer en meer toe, de deuk in het midden verdwijnt. De puist is geheel met helder vocht opgevuld, en heeft bijna het aanzien van een groote, *an de randen scherp besnedene Linze*. In deze dagen verschijnt om ieder puist een kringwijze rozenroode vlek. Wanneer men op die roodheid met den vinger drukt, verdwijnt zij op die plaats, waar men gedrukt heeft; zij komt echter terstond wederom; dikwils is deze roode ontstoken kring van grootte als een halve daalder. Deze ontstokene plaats is in het aanvoelen eenigzins hard, gezwollen, en heet, even als of 'er de roos in was. Nu zwellen ook de oxel-klieren een weinig, en veroorzaken eenige smerte. Meer gevorderde kinderen, weten deze pijn bepaald aan te wijzen; Maar kinderen, die nog niet in staat zijn hunne gewaarwordingen door woorden uitedrukken, weenen en zijn zeer onrustig, wanneer men hen op dit pas onder de armen vat.

In dit tijds-bestek ontdekt zich ook een zwakke, zomtijds ook en sterkere koorts, die men door de volgende tekenen onderkennen kan; Die Inentelingen worden gevoelig, verdrietig, neerslachtig, moedeloos, en openbaren over het geheel eene droefgeestigheid. Ik heb echter ook in eenige gevallen juist het tegendeel, als een teken van de ophanden zijnde koortsjes, opgemerkt: de kinderen waren, namentlijk, buitengewoon vrolijk, ongemeen opgeruimd en levendig. Zij hebben in de koortsdagen eene bleekere gezichts-kleur, meerderen brand, vooral in de handen, minder en donker water (*urin*). In eenige gevallen bemerkte ik eene meerdere ontlasting van water, 't welk ook eenen bijzonderen en sterken reuk had. Bij meer volwassene kinders bemerkt men ook op dezen tijd, of ook reeds wat vroeger, verminderden eetlust, twee tot drie onrustige nachten, waarin zij, niet zoo zeer buitengewoon weenen, als wel woelen en zich her- en derwaards werpen. Zij hebben ten dezen tijde, en ook nog in 't vervolg,

第八ヨリ十一日ニ至ルマテ瘡次第二大キクナリ中点ノ凹陷シ周圍ノ腫脹セル失シテ惣瘡ノ〔清液ヲ満盈ス其状急ニ凸起セル空レンス¹⁴ノ如シ□空レンストハ神時斗¹⁵ノ／蓋ノ類ナリ／急ニ凸起ストハ甲ヲ高く／モリタルヲ云ナリ接トモ其状^{〔虫食〕}如此ニアル■
ラン内ニ清液充滿スル■^{〔虫食〕}■^{〔虫食〕}■^{〔虫食〕}■此日ニ於テ每瘡ノ外圍ニ紅輪ヲ發ス■^{〔虫食〕}紅ヲ人指ヲ以テ壓ストキハ其處色白クナルナリ然シ指ヲ止ムレハ忽復紅ニナルナリ是ヲ以テ毎時其紅輪半タールトル¹⁶（彼法ノ金錢ノ類ナリ）此紅輪焮痛ヲ帶ビ〔一二丁表〕触レ試ムルニ微ニ硬腫シテロース¹⁷（病名ナリ）ノ周ノ者ニ似タリ又腋下ノ吉利盧¹⁸微ニ腫脹シテ微ニ痛ヲ發ス年長ノ児ハ其痛ヲ人ニ告ル事ヲ得レ共小兒未タ言ヲ以テ痛ヲ人ニ告ル事ヲ得サルモノハ人ノヨク腋下ニ手ヲ入レテ其ノ痛處ニ手ヲカケテ抱ク事ヲ拒ミテ甚安ンセス

（多少ノ／微或大）熱ヲ發ス其症候委シクハ次ニ擧ルカ如シ接痕知覺尖トクナリ神氣鬱ニ悵々トシテ喜シマス氣力ヲ失シテ萬事ニ懶クナルナリ然レトモ我又反テ熱ノ症ヲ驗セリ其症ハ即兎常ヨリモ神氣〔一二丁裏〕ハシクシテ活発トシテ發熱ノ日ノニ於惡カリシ顔色紅澤ニナリ別シテ兩手^{〔赤〕}赤ノ如クナリ小便小ク濁レリ或症ニ於テハ一ノ異常ノ臭氣強キ小便ノ多ク利セルヲ見ル年長ノ児ニ於テハ此時或ハ少シク前時ニ於テ食氣減シ二三夜ハ安眠ヲ不得其兒甚シク常に異ナル啼ヲナス惟自ラ轉ニ反側セルノミ此時或ハ小後喜ク發汗ス其誤ハ此時ニ當テハ風寒ニ感セサルヤウニ心ヲ用スンハアラサル故ナリ又時トシテハ此時輕キ水瀉ヲナス■
リ此等ノ〔一三丁表〕症ハ一二日ノ間コレアリ

14 空豆□オランダ語lensより、ひら豆、レンズ豆

15 計

16 オランダ語daalder、直径三八ミリの銀貨

17 オランダ語rose

18 オランダ語klier、腺

eene grote geneigdheid tot zweeten; weshalven men hun, om dezen tijd, zeer voor verkoudingen in acht nemen moet: ook zomwijlen een aanstoot van hoesten en ligten buikloop, (*Diarrhœe*). Deze toestand duurt gewoonlijk één, ook wel twee dagen.

Twaalfde dag. De cirkel-ronde en zeer hevige ontsteking om de ent-puisten, neemt zoo wel in grootheid als hoedanigheid merkelyk af. De Pokken zelfs verliezen haar waterachtig aanzien; worden stijf, spek- en atterachtig, en krijgen een wit-geelachtig aanzien. In het midden van dezelve vertoont zich een kleine korst. Deze verschijnzelen openbaren zich dikwils reeds op den elfden dag.

Dertiende en veertiende dag. De koorts, welke op den elfden en twaalfden zich in 't midden der ent-pokken begonnen had te vertonen, verspreidt zich steeds meer en meer naar de randen van dezelve, de vochtige materie verdroogt eindelijk geheel, en de Pokken verschijnen op den vijftienden en zestienden dag als donker bruine roofjes, die van zelfs afvallen.

Ten dezen tijde, ook wel een weinig vroeger, komen hier en daar aan het lichaam enkele verspreide blaasjes (*pimples*) ten voorschijn, die het aanzien van even uitgebotte Pokken hebben. Het zijn, namentlijk, kleine, spitse, eenigzins verhevene roode knopjes, met eenen rooden rand omgeven. Deze Pokjes zijn dikwerf zoo klein, dat men dezelve nauwlijks ontdekt; zij verdwijnen in vier-en-twintig uren op eenige plaatsen, en komen op anderen weder ten voorschijn. Deze afwisselende uitslag duurt menigmaal van agt tot veertien dagen, nadat de ent-pokken reeds verdroogd zijn. Dikwils zijn die Pokjes in de spitse iets glinsterend, en bevatten dan een nauwlijks merkbare waterachtige vochtigheid, die zich in weinig dagen in eenen schurft verandert. In eenige, doch zeldzame, gevallen, openbaren zich, in plaats van de pokjes, roode plekken, die aan den netelen-uitslag gelijk zijn.

第十二日 接瘡周圍ノ紅色^及激劇シキ焮痛及瘡ノ大サ等著シク減シ瘡中ノ液モ其水様ノ^{〔虫食〕}■状ヲ失シ粘稠ニナリテ膿状トナリテ^{〔白〕}■黄ノ色ヲ得□其中点ニ於テハ微ニ痂ヲ結フ此症候時^{〔虫食〕}■■■■第十一日ニ已ニ見ワル、事アリ

第十三日 或十四日其第十一日第十二日ニ於テ已^{〔二〕}■結ヒカタリシ痂次第ニ廣カリテ圍ニ及フ潤ヘリシ液モ乾涸シテ第十五十六日至リテ全ク結痂シテ後終ニ自ラ落痂ニ至ルナリ

此時或ハ少シク以前ニ身中處々ニ痘見点ノ如キ頭尖リテ少シク腫起シ其周圍紅ナル小疱子ヲ生此疱子時トシテハ小サシテ細カニ察セサレハ見難シ此ノ疱子廿四時一日夜ナリ又消^{〔ル〕}■又他處ニ発此ノ出没スル疱子ハ傳瘡已ニ乾涸シテ后第八日ヨリ十四日至リテ発スル事多シ毎時此小疱頭ノ尖リタル處ニ光沢アリテ少許ノ水状ノ液ヲ含ム此瘡一二日ノ中ニ癬瘡ニ變ス稀ニハ此疱子ノ代ニ火麻瘡ニ等シキ紅点ヲ発ス

Voor 't overige is deze, zo even beschrevene, secundaire Koepokken-uitslag van geene beduiding; de Kinderen zijn 'er niet ziek bij, en ontwaaren niets onaangenaams. Indiens echter deze uitslag (uitbotting) eenige weeken, na de verdroging der Ent-pokken, mogt voortduuren, en niet van zelfs verdwijnen wilde, zoo zal een zes- of agt-daagsch gebruik van het *verzoete quikzilver*, in kleine portien dien haast verdrijven. Deze uitbotting is geen noodzaaklijk gevolg van de echte Koepok-ziekte. Veele Inentelingen krijgen die niet, en zijn evenwel beveiligd voor de gewone kinder-ziekte.

Ik meen bemerkt te hebben, dat een onmatig broeijen deze uitbotting zeer begunstigt: hierom treft men die ook, mijns erachtens, meerder aan bij zuigelingen, dan bij meer volwassene Kinderen. Deze ziekte behoeft voor het overige geen hulp der Geneesheeren; ook kan men bijna de gewoone levens-wijze houden. In den zomer bij droog weer, kan men de kinderen, gedurende den ganschen verloop der ziekte, vrij laten gaan. In den winter is 'er echter meer voorzichtigheid nodig. Na den gehelen afloop der ziekte, geeft men de Inentelingen een zachte purgatie.

其他児少シモ苦シム事ナシ然レトモ若シ此
 疱子牛痘〔一四丁表〕已ニ乾涸シテ后ニ
 一二七日ノ間癒スニハ輕劑ノトルシス¹⁹
 七八日用ルトキハ速ニ之ヲ驅除スルナリ此
 ノ疱ハ真ノ牛痘ノ必要ノ症ニ非ス傳接セル
 兒ニ此疱ヲ発セスシテ能ク真ノ痘瘡ノ防キ
 トナレハモノ多シ我々此ノ牛痘ヲ甚シク発
 スルコト甚タ善症ナリト思ユリ接ルニ此症
 故ニ乳^チノミ子ニ多シ成長ノ兒ニ少シ此症他
 ノ医療ヲ用ルニ及ハス又食養等常ニ如クス
 ル事ヲ得夏月ニ於テ^{〔附〕}○清天ノ日ニハ外ニ始
 終外ニ出ル事^{〔附〕}坊ナシ冬月ニハ寒ニ冒サレサ
 ルヤウニ心ヲ用ユ〔一四丁裏〕ヘシ又惣症
 退キテ后輕ク下劑ヲ用ユヘシ

19 ラテン語 *dulcis*。ここで *Mercurius dulcis* (オランダ語 *verzoete quikzilver*) の意。^{かんこう}甘汞、塩化第一水銀、カロメルとも言う。

神尾格の人物交流

―松山棟庵・田代基徳との関係を巡って―

曾我俊裕、三谷紘平

要旨

平成二八年に中津市・耶馬溪風物館において、幕末に中津城下で活動した医家・神尾家に関する史料が発見された。神尾家については幕末の当主である雄策が種痘導入に携わったことや、その息子である格が適塾に学んだことなどが断片的に知られるのみであった。

本論では、三代目・格（一八三六―一八八九）に関する書簡二点を通じ、彼と慶応義塾医学所長を務めた松山棟庵や、適塾の学友で陸軍医監を務めた田代基徳との交流を示す。

キーワード

神尾家、中津藩、適塾、慶応義塾、芳蓮院、松山棟庵、田代一徳、神尾格

はじめに

本稿で対象とするのは、幕末に中津城下に居を構え、三代にわたって外局（外科）の医師を勤めた神尾家に関する史料である。中津市本耶馬溪町で開業していた伊東家に伝来した

もので、神尾家史料として現在、耶馬溪風物館に収蔵されている。

さて、拙稿（二〇一七）¹では、本史料より数点を紹介し、特に、近世末で医家としての初代当主・雄作（朔）（一七六六―一八二八）が吉雄耕牛のもとで蘭方医学を学び、中津城下で町医者として開業した様子と、その息子・雄策が京都の小石元俊のもとで同じく医学を学び、中津藩内における種痘の実施や医学館の設立に大きく寄与し、のちに扶持を賜り藩医として勤めたことを紹介した。

本稿では神尾医家の三代目で、適塾に学び中津藩医を勤めた格に関する書簡二点を紹介し、彼が、適塾そして初期の慶応義塾とどのように関わりをもったか紹介したい。

史料紹介

史料一、神尾格宛松山棟庵書簡

幕末から明治に活躍した医師・松山棟庵から明治一五（一八八二）年に神尾格へ宛てられたと考えられる書簡（縦一六・二厘、横八〇・二厘）。文末に釈文を示す。

松山棟庵（二八三九―一九一九）は、紀州藩出身の医師・

教育者である。紀州藩選抜の留学生として、慶応義塾で学び、大学東校の教授や慶応義塾医学所の所長などを歴任した²。同所閉鎖後も、三田に居を構え、実質的に慶応義塾の校医として診察にあたった。のちに、共立東京病院（現東京慈恵会医科大学）を開院したことは著名である。また医師会制度の創設にも寄与した³。

図一 松山棟庵・小幡篤次郎写真（右が松山棟庵）



また、慶応義塾の黎明期を支えた中津藩出身の教育者・小幡篤次郎（一八四二～一九〇五）らとともに中津市学校の教授として赴任しており、中津ともゆかりが深い。西澤直子氏

によれば、基本的に市学校の教員は、慶応義塾の中津藩出身者から選ばれていたという⁴。これは、人件費の抑制などを目的としたものであったらしいが、紀州藩出身の棟庵の登用は異例のことであつた。篤次郎とは若き日に二人で撮影した写真も残されており、特に親しい間柄であつたと考えられる。

さて、書簡は芳蓮院の病状に関する内容である。芳蓮院（一八一二～一八八六）は中津藩主・奥平昌暢の正室で、一橋徳川家三代・徳川斉敦の息女。はじめ栄姫のち国子と名乗った。福沢諭吉の『福翁自伝』によれば、幕末の芳蓮院は奥平家内の長老で、「一家無上の御方様」と崇められる人物であり、福沢から見聞きする西洋の生活・風習に興味を抱いたという⁵。その後の彼女は、藩内における有力な福沢支持者として活動した。明治八（一八七五）年ころに、旧藩主一家は東京へ転居することになるが、その際に高輪の奥平家ではなく、慶応義塾内へ移った。明治一九年に流行したインフルエンザに罹り、死去したという⁶。

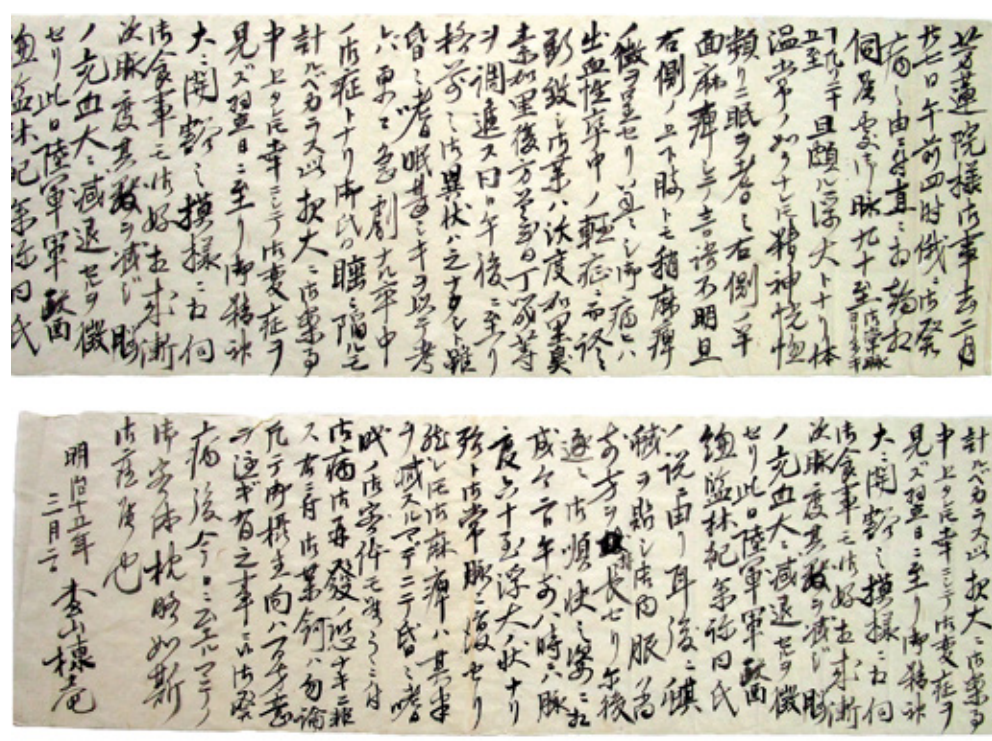
書簡は、彼女が脳卒中で倒れたという内容を示している。当初応急的な処置は棟庵によつて施され、病状は落ち着いたようだ。その後、陸軍軍医総監林紀という人物が治療を行ったという。管見の限り、鍼鍼という用語が不明であるが、何らかの西洋医学的術式であつたと想定される⁷。さて、林紀とは幕府奥医師から陸軍につとめた林研海（一八四四～一八八二）のことである。豊前小倉藩医から、幕府奥医師をつとめた蘭方医・林洞海（一八一三～一八九五）の子として

生まれ、文久元（一八六一）年より長崎のポンペのもとで医学を学んだ。その後、幕府留学生としてオランダ・ライデン大学などで学び、帰国後の明治四（一八七二）年には陸軍へ出仕した。同六年には軍医監となり、さらに軍医総監へ上った。松山棟庵との関係性は定かでないが、両名の交友を示す一史料ともなろう。なお、林研海はこの年の八月三〇日、有栖川宮熾仁親王のロシア出張に随行し、経由国のフランスにおいて、腎臓炎で客死している。

ところで、本書簡をなぜ東京の三田から、中津へ送る必要性があつたのかということは、書簡の読解のみでは判明しなかつた。しかし、中津市鷹匠町の東林寺に神尾格の墓碑が残存し、墓碑には幕末から明治にかけて中津藩医を勤めた大江春水の撰述による銘文が存在していることが明らかとなつた。

墓碑銘は風化が激しいが、読み取ることのできる箇所から、格が明治二三年に五三歳で死去したことや、芳蓮院の中津における侍医であつたことが判明した。従つて、松山棟庵が神尾格へ書簡を遣わしたのは、芳蓮院と格との旧主従の関係によるものであり、彼女を長く診察してきた格への問い合わせ、あるいは、彼女の病状を心配する格への状況報告であつたと考えられよう。現在のところ、格と棟庵がどこで出会ひ、どの程度の関係を持つたかは判然としないものの、彼が明治期に至つても旧主と関わり続け、また慶応義塾の関係者と中津の人々が密に連絡を取り合つていたことを示している。

図二 神尾格宛松山棟庵書簡



図三 神尾格の墓（東林寺内）



史料二、田代一徳宛 神尾格書簡

神尾格から田代一徳宛ての書簡の写しまたは草稿と考えられる（縦一六・七糎、横二二・五糎）。文末に釈文を示す。

田代一徳は、中津藩医・田代家代々の通名であるが、ここでの一徳は明治五年までこの名を名乗った、田代基徳のことを指し示すと想定される¹⁰。

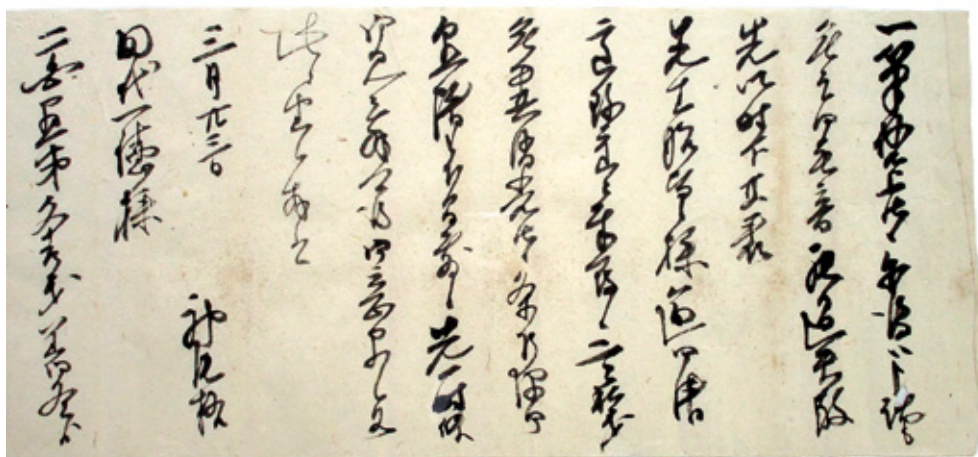
田代基徳（一八三九～一八九八）は中津藩出身の医者で、近代外科術の黎明期を支えた人物である。中津藩医・松川北渚（修山）の実子として生まれ、従兄弟にあたる同藩医・田代一徳（春耕）の養子となった。漢方を学んだ後、文久元（一八六二）年に適塾へ入塾した。緒方洪庵が幕府西洋医学

所頭取として江戸へ赴任した際に同行し、元治元（一八六四）年に医学所句読師に任ぜられた。慶応元（一八六五）年に幕府の軍船・蟠龍丸の船医となり、同三年（一八六七）には幕府西洋医学所塾頭に昇進している。明治元（一八六八）年に、日本初の本格的な近代外科学書『切斷要法』を著した。その後は陸軍に出仕し、明治二五（一八九二）年には、陸軍軍医監となった¹¹。

本書簡からは、神尾格の弟である久吉という人物が、中津を離れた場所で病を得て、田代の支援を受けていることが読み取れる。格はそれに感謝の意を示し、さらに続けての支援を頼むとともに、久吉への入用費の仲介を依頼している。格と田代はともに適塾で学んだ親しい間柄であったことから、弟への支援を依頼したのであろう。

さて「慶応義塾入社帳」には、慶応元年四月二〇日に神尾久吉という人物が慶応義塾へ入社した記録がある¹²。これによれば、久吉の父は神尾雄策となっており、格の弟に相違ない。田代は適塾以後、専ら江戸（東京）で暮らしており、田代と久吉が出会ったのは江戸（東京）と考えられる。

本書簡は前述の基徳改名以前に記されたものと考えられるが、いつ記されたのかは判然としない。しかし、久吉の慶応義塾入学に係るものであれば、慶応二（一八六六）年のことと想定される。



おわりに

以上、神尾家史料より二通の書簡を通じて、神尾格と松山棟庵・田代基徳との交流を示した。彼が、適塾出身の医者として中津で活躍していたであろうことは、前稿に述べた明治一四年六月二三日の福沢諭吉より中村正雄・中山平吉宛ての書簡¹³からも判明している。

松山棟庵書簡は、慶応義塾内に在住していた芳蓮院が脳卒中に罹り、治療中である旨が記されている。松山棟庵と神尾格の関係については判然としなかったものの、格の墓碑から、彼が芳蓮院在津中の侍医であつたことが判明した。

田代一徳（基徳）宛て書簡からは、かつて適塾で共に学んだ格と基徳との間に引き続き交流があつたこと、神尾格の弟に久吉という人物がおり、彼がおそらく江戸（東京）で田代の支援を受けていたことが判明した。また、「慶応義塾入社帳」から神尾久吉が慶応義塾に入社していることも判明した。

今後、発見された神尾格の墓碑を解読することにより、彼の人物像や適塾・慶応義塾との関わりなどがさらに明らかとなることが期待される。

【史料】

〈史料一〉

芳蓮院様御事、去二月

廿七日午前四時俄ニ御発

病之由ニ付直ニ拝診相

伺候処、御脉九十至御常脉ヨリ多キ

凡ソ二十且頗ル浮大トナリ体

温常ノ如クナレト精神恍惚

頻リニ眠マヲ耆ミ右側ノ半

面麻痺シテ言語不明、且

右側ノ足下肢トモ稍麻痺

ノ徴ヲ呈セリ、蓋シ御病ヒハ

出血性卒中ノ輕症ニ而診

断致シ御藥ハ沃度加里（ヨウドカリ）・臭

素加里復方（ソカリ）ソヒルテイ成等

ヲ調進ス、同日午後ニ至リ

格前之御異状ハ之ナクシト雖

昏々嗜眠甚シキヲ以テ考

レバ更ニ急劇ナル卒中

ノ御症トナリ御昏睡ニ陥ルモ

計ルベカラズ、此夜大ニ御案事

申上タレト幸ニシテ御変症ヲ

見ズ、翌日ニ至リ御精神

大ニ開豁之模様ニ相伺

御食事モ御好相成漸

次脉度其数ヲ減ジ腦

ノ充血大ニ減退セルヲ徴

セリ、此日陸軍軍医

総監林紀參診同氏

ノ説ニ由リ耳後ニ鉗

鍼ヲ貼シ御内脉ク尚

前方ヲ持長セリ、尔後

遂ニ御順快之姿ニ相

成今二日午前八時ニハ脉

度六十至浮大ノ状ナリ、

殆ト御常脈ニ復セリ、

然レト御麻痺ハ其半

ヲ減スルマデニテ昏々嗜

眠ノ御客体モ候無之ニ付、

御病御再発ノ恐ナキニ非

ス、右ニ付御藥餌ハ勿論

凡テ御摂生向ハ百万意

ヲ注ギ有之事ニ候御発

病後今日ニ至ルマテノ

御客体枕略如斯

御座候也

明治十五年

三月二日 松山棟庵

〈史料二〉

一筆啓上仕候 乎後ハ申訳
無之、御無音打過失敬
先以時下其表

先生始皆々様迄御情
意珍重ニ奉存候、二ニ私義
無異消光仕候条、乍憚御
愚情被下間敷候、先一時候
御見舞可得御意早々如
此御座候、拝之

三月二十三日 神尾 格
田代一徳様

二白、愚弟久吉義、旧冬
御厄介ニ相成り難在何
分ニも宜シク御引立奉希
上候、同人義大病相煩ヒ
難渋仕居候趣、増田氏
お申参り候、定而宅ニ御厄
介ニ相成候事ト奉存候、同
人義、昨年も大病相煩ヒ

爰再発致シ候事乎ト

愚心罷在候、暮々も養生

方得ト御申聞セ被下候様仕度

何分ニも御配情奉願候、

同人病中入費多ク一入困窮

之体、右ニ付急々発金可致

旨増田氏お申参候、過分

先便呈上申候金札ニ而當

月分之飯料ハ足り可申候ハ

奉存候得共、甚々氣遣敷

御座候間、今便拾両丈當

分之飯料小遣ヒニ遣シ

度、尤先生まで御預ケ申

上置度存候、既ニ手紙ニ

封シ込ミ飛脚やへさし

出シ候処、未便ニは物入り

状禁止之由申出不得已、

依而当分之小遣丈愚弟

へ直ニさし送り置キ申候、万

一飯料不足ニも相成り居

候得は、当分御取替へ置キ

被下、何レ共微不遠中慥

ナル便りも可在之、其節

先生まで呈上可申候間、此

如^レ御聞濟御被下候様、此方奉願上候、早々

【参考文献】

- ▲赤松文二郎『扇城遺聞』中津小幡記念図書館、一九三二年。
- ▲ヴォルフガング・ミヒェル・鳥井裕美子・川畠真人共編『九州の蘭学』思文閣出版、二〇〇九年。
- ▲大分県下毛郡教育会編『下毛郡誌』名著出版、一九七二年。
- ▲河北展生「慶応義塾入社帳」に見る中津出身者」『近代日本研究』四、慶応義塾福澤研究センター、一九八七年。
- ▲曾我俊裕・三谷紘平「神尾医家に関する新出史料について」『中津市歴史民俗資料館分館医家史料館資料叢書』一六、中津市教育委員会、二〇一七年。
- ▲西澤直子「中津市学校に関する考察」『近代日本研究』一六、一九九九年。
- ▲西澤直子『福澤諭吉と女性』慶応義塾大学出版会、二〇一一年。
- ▲平尾真智子「田代基徳と高木兼寛―近代看護学の導入に貢献した二人の九州人」『中津市歴史民俗資料館分館医家史料館史料叢書』一三、中津市教育委員会、二〇一四年。
- ▲福沢諭吉『福翁自伝』岩波書店、一九八〇年。
- ▲望月洋子「林洞海・研海―父子の理念」『日本医史学』第四十九号、二〇〇三年。
- ▲慶応義塾編『福沢諭吉書簡集』三、岩波書店、二〇〇二年。

注

- ▲竹内博編『日本洋学人名事典』柏書房、一九九四年。
- ▲日本英学史学会編「松山棟庵年譜」『英学史研究』二、日本英学史学会、一九七〇年。
- ▲日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、一九八四年。
- ▲福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』慶応義塾、二〇一〇年。
- 1 曾我俊裕・三谷紘平「神尾医家に関する新出史料について」『中津市歴史民俗資料館分館医家史料館資料叢書』一六、中津市教育委員会、二〇一七年。
- 2 日本英学史学会編「松山棟庵年譜」『英学史研究』二、日本英学史学会、一九七〇年。
- 3 福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』慶応義塾、二〇一〇年、五七八頁。
- 4 西澤直子「中津市学校に関する考察」『近代日本研究』一六、一九九九年、七三〜七四頁。
- 5 福沢諭吉『福翁自伝』岩波書店、一九八〇年、二八九頁。なお、芳連院に関する記述は、「一身の品行またおのずから効力あり」の項に詳述される。
- 6 註三同掲書、五七二頁。
- 7 鍼治療の可能性もあるが、林研海が専ら西洋医学を用いていることから可能性は低いと考えられる。
- 8 竹内博編『日本洋学人名事典』柏書房、一九九四年。
- 9 望月洋子「林洞海・研海―父子の理念」『日本医史学』第四十九号、二〇〇三年。及び註八同掲書。

- 10 平尾真智子「田代基徳と高木兼寛―近代看護学の導入に貢献した二人の九州人」『中津市歴史民俗資料館分館医家史料館史料叢書』一三、中津市教育委員会、二〇一四年。および、川島眞人「田代基徳」『九州の蘭学』思文閣出版、二〇〇九年、三三九頁。
註八同掲書。
- 11 河北展生「『慶応義塾入社帳』に見る中津出身者」『近代日本研究』四、慶応義塾福沢研究センター、一九八七年、二二頁。
- 12 慶応義塾編『福沢諭吉書簡集』三、岩波書店、二〇〇二年。
- 13 付記・本稿作成に伴い、W. ミヒエル先生・吉田洋一先生にご教示賜りました。また、墓碑の調査に際し、東林寺の瀬川昌邦御住職にご協力頂きました。文末に記して感謝いたします。

新発見の村上玄水像について

工藤舞子、當所美恵子

要旨

村上家敷地内の土蔵で、中津市村上医家史料館の所蔵品として収蔵されていた人物画に、「永仙院様御寿像」という書付がなされていることが発見された。この書付から、描かれている人物は、村上家七代の村上玄水（一七八一～一八四三）と推測される。

作品の紹介すると共に、画題の検討により、村上玄水の肖像であることを確認した。また、制作時期の検討を行った。

キーワード

村上玄水、中津藩、肖像画、狩野派、大江玄仙、帆足萬里、墓碑銘

はじめに

本史料は、村上医家史料館所蔵の人物画である。本年度中の同史料館での資料整理に際し、長らく村上家敷地内の土蔵に収蔵されていたこの人物画に、「永仙院様御寿像」の書付があることが発見された。「永仙院」とは、村上玄水の院号、

である。すなわち、この人物画が村上玄水の肖像画であるとの書付である。村上玄水は、村上医家の七代目にあたり、中津藩医であつた他、人体解剖図の作成などでも知られている。

本稿では、この「永仙院様御寿像」について紹介する。

一、資料の概略

本人物画（本紙縦一一・二八糎×横四三・三糎）は、絹本着色の掛軸装である（図一）。共箱はなく、長らく土蔵にそのままの状態で保管されていたこともあり、表装は痛みが激しく、ヤケ、シミ、破れが多く見られる。一方で、本紙は極端な劣化は見られない。画面下部に大きな虫食いがある他には、若干の絵具の剥落とシミ、ヤケが確認できるのみである。また、補彩の跡はみられない。なお、先述した「永仙院様御寿像」の書付は、表装裏の軸棒部分に墨書されている。

この資料の画面に描かれるのは、帯刀して座す高齢の男性、そしてその奥の弓道具、手前の雷文が描かれた書物を置いた文机である（図二）。玄水と考えられるこの人物が腰に差している刀の柄には、村上医家の家紋である三階菱が描きこまれている（図二）。また、手前の文机に置かれる書物

は、雷文や、本の形状の表現から、和書ではなく、洋書を意識して描いたものと思われる。

肖像画内に配置される道具類は、それぞれ描かれた人物を示すためのものである。本資料では特に、村上家の紋の入った刀を持った人物の後ろに配置されるのが、弓道具である点、そして文机に置かれた本が、洋書の形をしている点は注目すべきであろう。

玄水の人となりが見える資料として、玄水と交流あった、日出藩士で学問に良く通じていた帆足萬里²（一七七八～一八五二）の選文による『墓碑銘』³がある（史料「村上玄水墓碑銘」）。この墓碑銘には、玄水の主な業績などと合わせて、玄水の人柄についても書かれている。今回注目するのは、墓碑銘後半部に記される「已悦窮理之言有暇即讀書。旁習武藝、尤好射。」の部分である。まずは前半の「已悦窮理之言有暇即讀書。」であるが、これは玄水が、西洋の学問に関する書籍を好み、読んでいたことに言及している部分である。文机に置かれた洋書は、玄水のこうした様子や蘭字に対する功績から描かれたものであらうと考えられる。

また後半部「旁習武藝、尤好射。」であるが、これは、玄水が武芸も嗜み、中でも弓を好んでいたということに言及した部分である。画面左奥に配置された弓道具は、その様な玄水の一面を表現するためのものと考えられる。

加えて、腰に差した刀に注目すると、この刀の造形や、下緒を握る手といった構図が、村上医家初代の村上宗伯の曾祖

父にあたる、村上良慶の肖像画（以下良慶像）とよく似ている（図三）。朱漆の鞘、柄の鮫肌の表現、また柄に描かれる文様の入れ方は、両像に通じるものがある。玄水像制作時に、良慶像が参照されたことが考えられる。

以上の通り、この人物画は村上玄水の肖像画で間違いないであらう。しかしながら、この玄水像には讃や絵師の落款等が無く、制作時期は定かではない。「永仙院様御寿像」の書付は、その内容からも玄水死後のものである可能性が高いが、墨書の状態と表装の状態を合わせると、書付が後年のものである可能性も高い。玄水像の制作時期については、検討が必要である。

二、他作品との比較・検討

中津市内の医家にまつわる肖像画は、玄水像以外にも残されている。ここでは、中津藩で活躍した医師辛島正庵⁴（一六七八～一七六九）の肖像（図四）、大江医家二代当主大江玄仙⁵（一七一〇～一七九二）の肖像（図五）との比較から、玄水像の特徴を捉える。

まず、辛島正庵の肖像（図四）と比較を行う（以下正庵像）。正庵像は、画賛に「安永四年乙未八月／本府儒臣七十八翁藤田順則識」の文字があり、制作年もその前後と考えられる。なお、藤田順則とは、中津藩儒藤田敬所（二六九八～一七七六）を指す⁶。

正庵像には、中央に正庵、手前に和綴じの本が数冊と墨道

具が置かれた文机が一脚、奥に山水の水墨画が描かれた衝立が描かれている。人物、背景共に柔らかな筆遣いで描かれており、顔の造形描写も巧みで、少し開いた口や、笑って三日月型になった目などの表情も生き生きと表現している。一方で、玄水像は、鼻・唇・目とそれぞれの部分が、中世の狩野派絵師らによる似絵の形式を真似たような形状をしている。

また、人体の全体のバランスについても、正庵像は破綻なく描かれているが、玄水像は、肩幅に比べて頭部が大きく、それに伴い、文机に乗せられた右腕と首・頭の位置関係も悪くなっているなど、技術的に未熟である。

着衣や弓道具や玄水の纏う被風の格子模様などは、丁寧に描かれている。但し衣文線は、正庵像と比較すると固く、筆のうねりや筆運びを見せる線ではなく、太く目立つが、単調な線になっている。この様に玄水像は、狩野派に影響された作風と、絵師の作画技術が不足していることが確認できる。

次に、中津市の大江医家史料館所蔵の作品で、大江玄仙の肖像画（以下玄仙像）との比較を行う（図五）。大江玄仙は、大江医家の第二代当主で、先の辛島正庵と同時代の人物である。玄仙像は、中央に玄仙、その奥に、数冊の本が乗った文机が描かれている。構図や顔の全体の造形は、玄水像とは異なるが、二作品の作風はよく似ている。唇や鼻筋の形は、大小の違いはあるが、筆遣いや基本の形が似ており、狩野派の影響が窺える。また、人体表現の不熟さも、共通するところが多い。衣文の表現が若干異なることから、同一の絵師によ

るものと断じることはいできないが、肖像の制作に於いて、狩野派による似絵の影響を強く受けた絵師、又は一派がこの作品を制作したと考えられる。加えて、玄水と玄仙の没年には、五十年ほどの開きがある。同時期に描かれたものか、近い絵師が、それぞれの晩年に描いたものかは判然としない。なお、玄仙像については表題入りの共箱が付属しており、後年に描かれた可能性も考えられる。

玄水と同時代に活躍していたと考えられる絵師には、片山九畹⁷（生没年不詳）や大西圭斎⁸（不明く一八二九頃）らがいる。片山九畹は円山応挙の弟子として良く知られる通り、円山派の影響を色濃く受けている。また、大西圭斎は南蘋派や谷文晁に影響を受けている。しかしながら、玄水像は、そうした各画派の影響は見られない。九畹の子片山九皐⁹（生没年不詳）や圭斎の子大西仙洲¹⁰（生没年不詳）と比べても、作風は大きく異なる。玄水と九畹の接触の可能性は、『解剖図説』¹¹の解剖図を九畹が手掛けたといわれている¹²ことから、決して低くはないが、九畹やその周辺絵師の手掛けた作品とは考えにくい。加えて、明治以降は、仙洲など中津藩で絵師として用いられた藩士や御用絵師たちが中津に住んでいたことが判っている。玄水像が長らく保存されていた土蔵にも、明治以降の仙洲の手による作品がまぐりの状態で保存されているが、この玄水像はそういった絵師達の制作であるとは考えにくい。

また、田能村竹田（一七七七～一八三五）¹³に連なる南画家

たちが多く中津でも活動しているが、先にみてきた通り、南画の影響・技法は玄水像にはみられない。加えて、村上医家史料館には、玄水と同時代、または幕末明治期以降の文人画家たちの作品が多く収蔵されているが、それらの作品と比べても、南画家・文人画家の作品や、それらの影響を受けた絵師の作品とはいいたい。

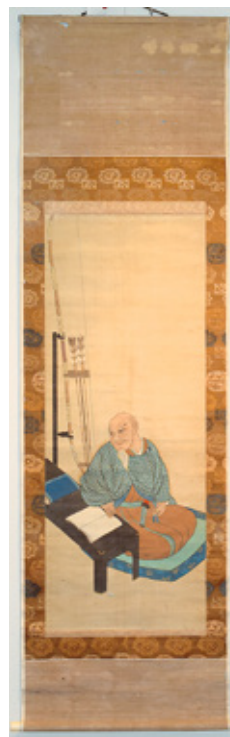
おわりに

ここまで確認してきた通り、今回発見された玄水像は、従来知られる中津の絵師たちの作風とは大きく異なっている上、絵師の技術の未熟さが目立つ作品である。狩野派の影響を受けた中津やその周辺地域で活動した町絵師の作品で、玄仙像と近い絵師、また同じ絵師が手掛けたと考えられる。玄水と玄仙に一世代の差があることを鑑みると、確定は困難である。書付の「御寿像」の文言の通り、生前の制作とするなら、発注の契機として、最晩年の還暦を祝してということがあるが、讃が無いなど、不審な点もある。

前時代的な作風と肖像画の注文意義、そして藩絵師たちの明治以降の動向から、玄水像が維新後に描かれたとは考えにくく、幕末までに制作された作品であろう¹¹とは思われる。絵具の状態からも一八七〇年より前の制作である可能性が高く、讃や共箱がない事も鑑みると、最晩年に発注したが、発注主である玄水の死等のなんらかの問題によって、現状となった可能性も考えられるなど、多く検討の余地がある作品

である。今後、類似作品とともにより一層の調査を行いたい。

図一 永仙院様御寿像 全図



図二 永仙院様御寿像 部分



圖三 村上良慶像 部分



圖四 辛島正庵像 部分



圖五 大江玄仙 部分



資料..村上玄水墓碑銘

君諱卓。字玄立。後改玄水。姓村上。考維嶽。妣山口氏。其先出村上帝源良國之後也。幼從倉成龍渚・野本雪巖、受業。豪雋、絕人。十四五慕諸葛武侯之爲人、喜擊劍、欲學天文・輜略・炮術、苦無善師。寬政戊午、遊京師見久留米文學梯隆恭。隆恭世傳兵法。終與之久留米、留三年、盡受其訣。

文化丙寅、中井厚澤遊長崎、過中津。君得見、聞西洋內景藥方說、大悅始專爲醫方。

常語人曰「吾家世以醫仕。然五行生克之言、空

疎無當。我不忍以此爲人之司命。今而後疾

病庶可得治也。益治西洋天文窮理之言。」

國有懼重刑者。請得其屍與門人解剖使畫

工圖寫。因次臟腑脉絡之說甚精。

辛未命爲外班醫師、賜三人之餼。

壬申襲父祿。已而遷爲近習醫師。

君伉直、不好阿諛。不能與儕輩俯仰以取

世資。

文政甲申、以病致仕。探源侯立特以精方藥仍

賜三人之餼。月六入見。從朝江都。已悅窮理

之言有暇即讀書。旁習武藝、尤好射。

既老。得間曠之地、使人開墾。日往督視以

種蒔爲樂。

天保癸卯七月四日、以病卒。家葬東林寺先塋。

壽六十三。配辛島氏。生三男三女。長子良一

嗣。一女贅横井氏。子維郁、爲從曾祖玄洞後。

一女適小倉安武村正桑田正久。餘皆歿。銘曰、

以梁支傾

未盡其材

懷璧自燿

反受其災

既歸其全

或不知君

視於蒿里

日出大夫

帆足萬里撰

本藩

磯田鎮武書

孝子

良一立

参考文献

▲ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料Ⅰ』中津市歴

史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇三年。

▲ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料Ⅲ』中津市歴

史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇五年。

▲ヴォルフガング・ミヒエル、鳥井裕美子、川寫真人共編

『九州の蘭学』思文閣出版、二〇〇九年。

▲今永正樹『医も亦自然に従う』村上記念病院、一九八二年。

▲後藤龍二『大分の近代美術 明治・大正・昭和』有限会社

海鳥社、一九九二年。

▲帆足章二編『大分県文人画人辞典』大分県文人画人研究

会、一九九二年。

▲大塚富吉『大分県画人名鑑』大分県画人名鑑刊行会、

一九七八年。

注

- 1 戒名「永仙院大道玄水居士」（『医も亦自然に従う』一七三頁）。
- 2 帆足萬里（一七七八〜一八五二）日出藩士。二七歳の若さで日出藩校の教授となる等、早くから頭角を顕す。儒学者として知られるが、窮理学など西洋の学問にも通じた。玄水の息子春海の師となる等、玄水との交流も深い。（『九州の蘭学』一二八〜一三三頁）。
- 3 細田富多『村上医家資料集一』中津市歴史民俗資料館、二〇〇五年、所収。
- 4 辛島正庵（一六七八〜一七六九）辛島家初代当主。医師。元文四（一七三九）年に待医となった。（『九州の蘭学』、川島眞人「辛島正庵―種痘に生涯をかけた医者たち―」
- 5 大江玄仙（一七一〇〜一七九二）大江医家第二代当主。（現当主大江満氏の御教示による）
- 6 本書に所収されている大島明秀「近世中津領内の儒者とその墓銘―藤田敬所、賀来元龍、原田東岳」参照。
- 7 片山九畹（生没年不詳）江戸後期。中津藩絵師。本姓は千原。名は藤弘。東籬とも号した。上京し、円山応挙の元で画を学んだ後、中津藩に戻り、活躍した。一説には文化年間に没。（『大分県画人名鑑』一頁）。
- 8 大西圭斎（生没年不詳）江戸後期。中津藩に絵師として用いられる。江戸に在住していたが、中津にも多く作品が残されており、来往が窺える。南蘋派に傾倒した後、谷文晁に師事。花鳥画の優品が多い。文政末頃の没。（『大分県画人名鑑』一頁）。
- 9 片山九臯（生没年不詳）江戸後期〜明治初期。始め父九畹に学び、後に応挙にも学んだといわれる。九畹と同じく東籬とも号した。竹田の『師友画録』にその名が上げられている。（『大分県画人名鑑』一頁）。
- 10 大西仙洲（生没年不詳）江戸後期〜明治初期。大西圭斎の子。始め江戸藩邸に仕えたが、廃藩後は中津に暫く住んだ。明治九（一八七六）年頃には中津市学校の書道教師に任じられている。（『大分県画人名鑑』三頁）。
- 11 村上玄水『解剖図説』一八二九年、帆足萬里による序文と片山九畹によ

13 12

る解剖図の下絵が村上医家史料館に所蔵されている。原本は失われているが熊谷克己編『築上郡志』上巻、福岡縣教育會築上支會、一九二二年、四六五〜四六九頁に摘録が収録されている。田能村竹田（一七七七〜一八三五）竹田藩士。豊後南画の大成者として知られる。中津にも知己が多く、雲華をはじめ、多くの中津文化人と交流し、その南画技法を伝授した。（『大分県画人名鑑』一九六頁）。

【特別展 実施報告】

『解体新書』と前野良沢

- ①場所 中津市歴史民俗資料館分館大江医家史料館
- ②主催 中津市教育委員会
- ③協力 大分県立先哲史料館・慶応義塾福沢研究センター
- ④期間 平成二九年一月六日～平成三〇年二月三日

概要

『解体新書』の編纂の中核を担った中津藩医・前野良沢。平成三〇年のNHK正月時代劇「風雲児たち〜蘭学革命編」では、その主人公としてフィーチャーされました。

本展はこのドラマの公開を記念し、『解体新書』翻訳以前の蘭学の歴史及び、本書が後世の人々に与えた影響も含め、『解体新書』と前野良沢の事績、また前野良沢と中津の関係を紹介する目的で行われたものです。展覧会全体をミヒエル・ヴォルフガング九州大学名誉教授に監修頂きました。

展示は、中津市所蔵・寄託史料を中心としましたが、前野良沢を紹介する上で欠くべからざる史料の出陳については、慶応義塾福沢研究センター・三田メディアセンター・信濃町メディアセンター、大分県立先哲史料館、県内個人のご協力を得ました。

展示室内は全四章の構成で展開しました。

まず、一章「蘭学の芽生え」では、「カスパル流医学書」など地方にまで影響を及ぼした蘭方医学書を紹介し、特に、蘭学の中心地・長崎から近かった九州でどのように蘭学が受容されていたのかを示しました。

二章『解体新書』と前野良沢」では、良沢の生い立ちから、中津藩医としての系譜、そして中核となる『解体新書』の翻訳にまつわる史料を紹介しました。この章では『解体新書』を核とし、前野良沢の表記がある「宝暦年中分限帳写」や、「吉雄流外科免許」などの新出史料も展示しました。

三章「良沢の知られざる功績」では、現在小・中学校の教科書でも利用されている「前野良沢肖像」を展示するとともに、良沢が『解体新書』翻訳以後に翻訳したオランダ語文献のことや、寛政の改革とのかかわりなどを中心に展開し、前野良沢の代表著作である「魯西亜本紀略」（富士川文庫本）を展示しました。

最後に四章「良沢の学びを受け継いだ人々」では、前野良沢周辺の人物と、特に良沢の学びが中津の蘭学に与えた影響について紹介しました。大槻玄沢の「蘭学階梯」や、近年良沢晩年の弟子であったことが判明した、中津藩主・奥平昌高の命による『蘭語訳撰』、良沢の功績を顕彰した福沢諭吉の自筆原稿「蘭化堂設立の目論見書」を展示しましたが、特に、福沢諭吉手垢本で、現在刊行されている『蘭学事始』の底本となった「和蘭事始」は多くの来館者の注目を惹きました。

本展は、大江医家史料館の開館後初となる本格的な特別展となりました。二月三十一日には、演出の吉川邦夫氏、ドラマ主演の片岡愛之助氏、音楽を担当した藤原道三氏らが本展を訪れました。

また本展に合わせて、大分県先哲叢書『前野良沢』普及版を再版し、著者の鳥井裕美子大分大学名誉教授には再版及び展示に関しても、多大なご協力を頂きました。

会期中の入館者は九〇八人、そのうち年末年始の特別開館時の入館者数は三六三名でした。

広報活動

- ・大分合同新聞での全面広告（平成二九年一月二日朝刊）
- ・中津市広報番組「ぐるつと中津」（OABテレビ二月二五日）
- ・ドラマ番組宣伝番組「風雲児たち解体新書」（NHK総合平成三〇年一月一日）
- ・NHK正月時代劇「風雲児たち蘭学革命篇」（NHK総合一月一日）
- ・大分県広報番組「お！」（OABテレビ二月一四日）

期間内イベント

- ・記念ギャラリートーク（講師：W・ミヒエル 九州大学名誉教授）平成二九年二月一六日
- ・風雲児たち放映直前プレミアムトークin中津（中津文化会館 出演 片岡愛之助・栗原英雄・大野泰広・長野里美・

展示の様子

- 藤原道三・小栗さくら・中津一節截の会（二月三十一日）
- ・一節截コンサート（川島真人 日本医史学会常任理事・中津一節截の会 平成三〇年一月二八日）

（文責・曾我）



ギャラリートークおよび一節截コンサートの様子



『解体新書』と前野良沢 資料リスト

	資 料 名	所有者・所蔵先	概 要
1	「カスバル流医学書」	個人蔵 大江医家史料館寄託	日本へはじめて本格的に導入された、本格的な蘭方医学・カスバル流外科の教則本。(初公開)
2	『和蘭全身内外分合図』	大江医家史料館	オランダ語の解剖書を17世紀の長崎通詞・本木良意が訳した、見開き絵本状の解剖図。
3	平田長太夫免許状	大江医家史料館	中津に伝わった、オランダ商館長のサインが入った蘭方医免許の写し。
4	吉雄流外科免許	耶馬溪風物館	良沢の師事した長崎のオランダ通詞・吉雄耕牛が中津の町医者に与えた外科免許。(初公開)
5	縛帯図	耶馬溪風物館	吉雄耕牛塾で筆写された紅毛流外科の教則本。包帯の使用方法をあらわす。(初公開)
6	前野良沢像	個人蔵	前野良沢ら江戸時代の医学に影響を与えた3人の医者 の肖像画。
7	前野良沢書簡(複製)	大分県立先哲史料館	寛政の三奇人・高山彦九郎にあてられた良沢の書簡。
8	『ターヘル・アナトミア』	個人蔵	『解体新書』の原本である、『ターヘル・アナトミア』のドイツ語原書。
9	「記註概要」	中津市立図書館	良沢が長崎へ派遣されたことを示す中津藩の史料。
10	『宝暦年中分限帳』	個人蔵 大江医家史料館寄託	良沢の名が唯一記されている中津藩分限帳。(初公開)
11	『解体新書』	個人蔵 大江医家史料館寄託	中津藩医・大江家に伝来した『解体新書』の初版本。
12	『重訂 解体新書』	個人蔵 大江医家史料館寄託	大概玄沢によって著された、『解体新書』の改訂版。
13	『ハルマ 蘭仏辞書』	個人蔵	良沢たち『解体新書』のグループが利用したとされる蘭仏辞書。
14	一節載	個人蔵 村上医家史料館寄託	中津藩医・村上家に伝わり、良沢も好んで演奏したとされる縦笛。
15	「魯西亜本紀略」	慶応義塾大学信濃町メディアセンター	良沢の著作で、ロシアの歴史の概説書。江戸時代の写本。
16	『ズーフ・ハルマ』	大分県立先哲史料館	長崎ハルマともよばれ、解体新書以降に出版された蘭日辞書。
17	『蘭学階梯』	大分県立先哲史料館	良沢の著作をベースに、良沢の弟子・大概玄沢によって出版された蘭学入門書。
18	『訳鍵 凡例』	個人蔵 村上医家史料館寄託	江戸時代に刊行された蘭日辞書で、良沢の功績を刻む。
19	『蘭語訳撰』	中津市立図書館	良沢の弟子であった、中津藩主・奥平昌高によって編さんされた日本初の日蘭辞書。
20	「和蘭事始」	慶応義塾福沢研究センター	福沢諭吉の手垢本で、のちに『蘭学事始』と改題して出版された杉田玄白の手記の写し。
21	『蘭学事始』明治23年版	個人蔵	福沢諭吉によって上記史料をもとに刊行され、福澤の序文を伴う。
22	「蘭化堂設立の目論見書」	慶応義塾大学三田メディアセンター	福沢諭吉が発願した、前野良沢らを顕彰するお堂兼図書館の設立趣意書。

ABSTRACTS

Akihide ŌSHIMA

Three Confucianist Scholars in Early Modern Nakatsu and the Inscriptions on their Gravestones

During an investigation of Edo period materials kept in the Murakami Medical Archive, several papers were discovered that described the life and achievements of three influential inhabitants of the Nakatsu domain: Fujita Keisho (1698–1776), who laid out the academic foundations of the domain; Kaku Genryū (1716–1784), who conducted studies in Confucianism while running a sake brewery in the town of Bungo and serving as mayor, and Harada Tōgaku (1709–1783), a scholar from the adjacent Hiji Clan, who resettled in Nakatsu, taught Confucianism, and published well-known books on that subject, such as *Keisetsu Shūi*. An investigation of the gravestones, which remain in local temple graveyards, showed that the rediscovered texts were copies of the gravestone inscriptions that were probably made between 1789 and 1830. Thanks to these copies, missing parts of the damaged gravestones could be reconstructed. Furthermore, we now know that Harada studied Confucianism under Hattori Nankaku (1683–1758) and that he was well versed in horsemanship, military science, and swordsmanship. Kaku, who previously appeared to be marginalized as a Confucianist scholar, turned out to have close contacts with Miura Baien (1723–1789), one of the greatest philosophers of 18th century Japan. After Kaku's death, Miura even provided a Chinese-style poem for his gravestone.

Yōichi YOSHIDA

A Secret Scroll on the Old Way of Medicine (*I daidō shōkan*)

There are two handscrolls kept by the Ōe Medical Archive in Nakatsu that were probably written in 1821. They are addressed to “Terai Yōjin” and “Terai Sengo,” who seem to be the same person. They describe a series of medical treatments, many of a magical nature. Judging from their content and the mention of outstanding traditional physicians in Kyōto, such as Tamba (Nishiki-koji) Yorisato, Nakarai Shuzen, and Nakarai Sōgen, these two scrolls are medical licenses granted to “Terai Nanigashi” at the end of his medical education. Licenses provided by the Taki family in the medical school of the Edo government and licenses from a number of regional domains with established medical education systems are well known. However, little is yet known about the education and practices of physicians to the nobility at Tennō's court and their relations with regional medical circles. These two scrolls provide a rare first glimpse into that matter.

Wolfgang MICHEL

On the Manuscript *Shutō Shinsetsu* (A New Theory of Inoculation) and its Background

Among the old manuscripts once kept by the Karashima family in Nakatsu, there is one entitled

A New Theory of Inoculation. Several ex libris seals of the physicians Karashima Chōrei (1779–1857) and his son Chōtoku (1806–1845) indicate that it was considered to be an important paper. It shows Western names in Japanese script, such as Edward Jenner, George Pearson, and William Woodville. It describes the characteristics of cowpox, the techniques of vaccination, and various symptoms that appeared after inoculations. One would not expect to find such a manuscript in the Karashima collection because this family was famous for its Chinese-style smallpox treatment, which was brought to 17th century Japan by the Chinese monk Dai Mangong (alias Tai Mankō or Dokuryūshōeki).

The manuscript shows neither a date nor any hint as to the author or copyist, but this text must have been written during the first half of the 19th century. A search for similar manuscripts located several with slightly different titles. They bear the name of Hiradaka Ryōdai (1797–1868), a physician from the village of Shinjō in the province of Aki (present-day Hiroshima Prefecture). One of them also mentions the name “Siebold” in Chinese characters. As Hiradaka went to Nagasaki in 1823 and became a disciple of Dr. Philipp Franz von Siebold, who had arrived at the Dutch trading post of Dejima in the summer of that year, one is tempted to link these texts to Siebold’s teachings.

Siebold later claimed that he had introduced Jenner’s vaccination into Japan. However, Japanese interest in this new method of smallpox prevention had grown long before his arrival in Nagasaki, and Jan Cock Blomhoff (1779–1853), who served as chief of the Dutch trading post from 1817 to 1824, deserves much more credit for his dedicated efforts to spread information, instruments, and vaccination material. According to various entries in his official diaries, Blomhoff had already requested lancets, vaccine material, and literature from Batavia during the early 1820s, but unfortunately several inoculation trials yielded poor results.

Then, in March 1823, the physicians Mima Junzō (1795–1825) and his colleague Minato Chōan (1786–1838) came to Dejima to meet Blomhoff. Mima had read Leonardus Davids’ Dutch translation of Jenner’s *Inquiry into the Causes and Effects of the Variolae Vaccinae* and indicated his intention to collect cowpox matter from supposedly infected cattle in the Amakusa area. Blomhoff, who soon became aware of their insufficient knowledge, pointed out the importance of distinguishing real cowpox from other similar symptoms. Furthermore, to improve their understanding, he provided a book that was more concise and easier to read than Jenner’s lengthy deliberations. He also asked the trading post physician Nicolaas Tullingh to conduct a vaccination for three people. This trial failed again and once more he ordered fresh vaccine.

The book Mima borrowed from Blomhoff was the German physician Heimann Josef Goldschmidt’s *Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken, en derzelver inënting*. This was the Dutch translation of a book published in 1801 in Frankfurt am Main by Goldschmidt (1761–1835). Goldschmidt, the son of a Jewish family in the Franconian village Baiersdorf, had lost both parents in his early childhood and grew up in the house of an uncle in Königsberg (Eastern Prussia). As he did not develop much interest in his uncle’s business, a well-to-do local sponsor supported his education, including his enrollment at Königsberg university. There he became an ardent adherent of Immanuel Kant’s enlightenment philosophy. In 1790, he defended an inaugural dissertation under Johann Daniel Metzger and received a doctoral degree in medicine.

During a journey to southern Germany, Goldschmidt managed to obtain permission to practice medicine as one of four Jewish physicians in Frankfurt am Main. He was obliged to live in the

narrow quarters of the Judengasse (Jews' Lane). However, but there were wealthy and highly educated inhabitants such as the famous banker Mayer Amschel Rothschild, and despite the still restrictive policy of the authorities, the local Jewish community maintained an outstanding school (Philanthropin) and a renowned hospital. In 1808, Goldschmidt converted to Catholicism and changed his name to Johann Baptista Clemens Goldschmidt. A few years later he was appointed municipal physician for three of Frankfurt's poor quarters (Armenquartier). After many struggles, the ghetto and all special Jewish taxes were abolished in 1811.

Goldschmidt was the first physician in that region to recognize the effectiveness and blessings of Jenner's vaccination and wrote *General Survey of the History of Cowpox and its Inoculation as the Surest and most Beneficial Method for the complete Eradication of Human Smallpox* (Allgemeine Übersicht der Geschichte der Kuhpocken und deren Einimpfung als das sicherste und heilsamste Mittel zur gänzlichen Ausrottung der Menschenblattern). It is dedicated to "all sensitive and loving parents who care about the life and health of their children" and reflects perfectly the author's lifelong endeavors to enlighten the general population. Only three years after the publication of Jenner's book, Goldschmidt had compiled a concise history of Jenner's discovery and the heated debates in Britain, France, and Germany, including a description of the difference between "real cowpox" and "pseudo cowpox," and last but not least the technique of vaccination and the various symptoms that appeared after inoculations. The Dutch translation of his book was probably undertaken by Leonardus Davids, a Jewish physician from Rotterdam who spearheaded the introduction of vaccination into the Netherlands.

In his conversations with Mima, Blomhoff had pointed out three important topics related to inoculations with cowpox. Hidaka Ryōdai's translation, titled *Shutō shinsho* (A New Book on Inoculation), was finished in 1825, perhaps with some help from Siebold. It comprises only three of Goldschmidt's thirteen chapters, and these chapters cover the exact problems pointed out by Blomhoff in March 1823. Several handwritten copies of Hidaka's translation circulated among physicians. One of these eventually ended up in the library of the Karashima family in Nakatsu.

There is another translation of Goldschmidt's book by the prominent physician Takano Chōei (1804–1850) who went to Nagasaki in 1820, and like Hidaka became Siebold's disciple in 1823. It is entitled *Gyūtō seppō* (Method of Vaccination), and like Hidaka's text, it presents the same three chapters, but shows significant different sentence structures and wordings. Takano had obviously made his own translation.

Judging from the number of preserved copies, Hidaka's and Takano's manuscripts circulated to some extent, but from the 1820s to the late 1840s, the vaccine lymph brought to Nagasaki repeatedly lost its potency during the long voyage from Batavia (Jakarta) to Japan. Nevertheless, studies of relevant Dutch books continued, although Japanese physicians still had no confirmation of the effectiveness or safety of cowpox inoculation.

Interest in Goldschmidt's book was rekindled when the trading post physician Dr. Otto Mohnike managed to provide active vaccine "crusts" in 1848. Believing in the potential merits of cowpox inoculation, physicians from all over the country rushed to Nagasaki asking for the vaccine. One of them was Arima Setsuzō (1817–1847) who in 1844 joined the famous Tekijuku school run by the scholar and physician Ogata Kōan in Ōsaka. There he soon proved to be a gifted scholar and was adopted by Ogata's father in law Okugawa Hyakki. Arima, too, had been in Nagasaki, and received Goldschmidt's book as a farewell gift from the reputable Ueno Tsuneashi (1790–1851). In contrast to Hidaka and Takano, Arima translated the complete book, leaving out only the

supplementary part and Goldschmidt's footnotes. As he died in 1847, his translation entitled *Gyūto shinsho* (A New Book on Vaccination) must have been completed before that date. Many authors write that it was printed in 1850, but there is not a single copy to prove such an assumption. Like Hidaka's partial translation, Arima's text circulated only as manuscript copies, several which are preserved in collections of 19th century physicians and regional lords.

Toshihiro SOGA, Kōhei MITANI

Letters Related to the Physicians Kamio Kaku, Matsuyama Tōan, and Tashiro Motonori

During an investigation of materials kept by the Yabakei Fūbutsukan Museum (Nakatsu City, Hon-Yabakei), we discovered several manuscripts that shed new light on the Kamio family. The history of this family of physicians has yet to be clarified. Previously, the name Kamio Yūsaku had emerged in relation to the propagation of vaccination in Nakatsu. We also knew that his son Kamio Kaku (1836–1889) had studied in Ogata Kōan's renowned "Dutch Studies School," Tekijuku, in Osaka.

Letters related to Kaku, who seems to have been the third-generation physician of his family, reveal that he had close ties to Matsuyama Tōan, head of the Medical Faculty of Keio Gijuku (present-day Keio University) in Tokyo, and Tashiro Motonori, a former fellow of the Tekijuku, who later became an influential surgeon major-general of the army in Meiji Japan.

Maiko KUDŌ, Mieko TŌSHO

A Newly Discovered Portrait of the Physician Murakami Gensui (1781–1843)

An investigation of materials in the old storehouse of the Murakami family brought to light a hanging scroll with a portrait. It bears the inscription "Eisen-In-Sama-Goju-Zō," which relates to Murakami Gensui. This was the seventh head of the Murakami family, who served as personal physician to the Lord of Nakatsu. Based on the inscription and the portrait, this scroll must have been painted between the 1820s and 1840s.

索引

索引																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

て	寺井專悟	26、	34
	寺井要人	26、	37
	典薬頭	28、	39
と	土居震発	4、	5
	ドウフ		48
	東岳学的		11
	東岳筆囀		11
な	半井主善	32、	39
	半井宗玄	32、	39
に	錦小路頼理	26、	38
		28、	
		31、	
は	八居題詠		9
	服部南郭	11、	14
	八法	28、	39
	原田東岳	1、	14
		3、	
		4、	
ひ	久恒元的		11
	日高涼台	44、	57
		46、	
		51、	
		55、	
		57	

ふ	風寒暑湿	29、	34
	福沢諭吉	74、	77
	藤田敬所		
		1、	83
		6、	
		8、	
		13、	
		14、	
	覆醬集		9
	フランクフルト・アム・マイン		52
	ブロムホフ	46、	51
		48、	
ほ	帆足萬里	82、	83
	豊国紀行		9
	北海先生文鈔	11、	13
ま	松井可楽		9
	松山棟庵	73、	79
		75、	
		77、	
み	三浦梅園	1、	14
	密教		28
	湊長安	48、	50
	美馬順三	48、	50
む	村上玄水		86
		1、	
		3、	
		4、	
		82、	
		83、	

り	竜王墓地	10
わ	和気家(氏)	27、
		31、
		38
L	列朝詩集 (Liè-cháo shīj)	9
Q	錢謙益 (Qián Qiānyì)	9
Y	湧幢小品 (Yǒng chuāng xiǎopǐn)	9
Z	朱國禎 (Zhū guó zhēn)	9

CONTENTS

PREFACE

ARTICLES

Akihide ŌSHIMA

Three Confucianist Scholars in Early Modern Nakatsu and the Inscriptions on their
Gravestones 1

Yōichi YOSHIDA

A Secret Scroll on the Old Way of Medicine (*I daidō shōkan*) 26

Wolfgang MICHEL

On the Manuscript Shutō Shinsetsu (A New Theory of Inoculation) and its
Background 44

SOURCE MATERIAL

Toshihiro SOGA, Kōhei MITANI

Letters Related to the Physicians Kamio Kaku, Matsuyama Tōan, and Tashiro
Motonorio 73

Maiko KUDŌ, Mieko TŌSHO

A Newly Discovered Portrait of the Physician Murakami Gensui (1781–1843)
..... 82

REPORT

Special Exhibition : “*Kaitai Shinsho* and Maeno Ryōtaku” 89

ABSTRACTS 92

INDEX 96

Wolfgang MICHEL, Yōichi YOSHIDA, Akihide ŌSHIMA (ed.): Source Material and
Personalities 6.

NAKATSU MUNICIPAL MUSEUM OF HISTORY AND FOLKLORE – MEDICAL
ARCHIVE SERIES, No. 18

CITY OF NAKATSU, BOARD OF EDUCATION

Kawaharada Printing Co., Nakatsu, March 2019

● 執筆者一覧

大島 明秀 (おおしま・あきひで)

熊本県立大学文学部准教授

工藤 舞子 (くどう・まいこ)

中津市教育委員会社会教育課

曾我 俊裕 (そが・としひろ)

中津市教育委員会文化財室

當所美恵子 (とうしょ・みえこ)

村上医家史料館

三谷 紘平 (みたに・こうへい)

中津市教育委員会文化財室

MICHEL, Wolfgang (ミヒエル・ヴォルフガング)

九州大学名誉教授

吉田 洋一 (よしだ・よういち)

久留米大学文学部教授

中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書XVIII
ミヒエル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀 共編

史料と人物 VI

平成31 (2019) 年 3 月

発行者 中津市教育委員会

刊 行 中津市歴史民俗資料館

〒871-0055 大分県中津市1385番地 (殿町)
TEL 0979-23-8615

印 刷 株式会社 川原田印刷社

ISSN 2432-0773

DE
POKKE
ZELVER INËNTING,
KERSTE EN HEILZAAMSTE
ER GEHEELE UITROEIJING
MENSCHENPOKKEN.
belvullen en tederhartigen Ouderen,
Leven en de Gezondheid hunner
Kinderen lief is, opgedragen
DOOR
J. GOLDSCHMIDT,
M. D. te Frankfort aan den Main.
UIT HET HOOGDUITSCH.

☆
TE AMSTERDAM, * 33
JOHANNES ALLART.
MDECCII.



秘
密
修
法

明治十五年
三月云
李山棟
病後今云云
市安床枕
如斯也

子好山三甫晉
監終託以墓銘
攬淺繫斯辭

高鳳